

諸田南遺跡A・B・C地区

さだのみ ほかの 定留遺跡外野地区

— 県道中津港線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

諸田南遺跡A・B・C地区

さだのみ ほかの 定留遺跡外野地区

— 県道中津港線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



諸田南遺跡A地区S-4遺構



諸田南遺跡A地区SK29須恵器甕出土状況

序 文

本書は県教育委員会が大分県中津土木事務所の依頼を受けて平成14～17年度に実施した中津日田道路の中津港線に伴う諸田南遺跡、定留遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の立地する中津市の下毛原台地は標高十数メートルの低い平坦な洪積台地ですが、台地の中央部や縁辺部には数多くの遺跡が展開しています。

今回調査した諸田南遺跡では、古墳時代後期の祭祀用土坑が発見されました。土坑内には当時の人々が祭祀に使用した須恵器や土師器が多量に残っていました。また、定留遺跡では縄文時代の早期という今から約八千年も昔に作られた狩猟用の陥穴や、調理に使ったと考えられる炉穴が発見されています。これらは、当時の人々の生活や文化を探る上で重要な基礎資料となりました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成14～17年度に実施した中津日田道路の中津港線道路改良工事に伴う諸田南遺跡A・B・C地区、定留遺跡外野地区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した。
- 3 発掘調査にあたり中津市教育委員会、県土木建築部中津土木事務所、地元関係各位の協力を得た。
- 4 発掘調査出土遺物の整理は大分県教育庁埋蔵文化財センターで行った。
- 5 出土遺物の一部は当センターの吉田寛の教示を得た。
- 6 発掘調査出土遺物、図面、写真等は当センターで保管している。
- 7 本書の執筆は第1章、第4章、第5章を栗田勝弘(当センター調査第二課長)、第2章、第3章を田中裕介(文化課文化財班主幹)が担当した。
- 8 本書の編集は栗田勝弘、田中裕介が担当した。
- 9 本書で使用した須恵器型式は、田辺昭三1966『陶邑古窯址群I』平安学園に基づく。

目 次

第1章 調査の経過と概要	
第1節 調査に至る経過と調査方法	1
第2節 調査団の構成	1
第3節 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第4節 発掘調査の対象地と概要	4
第2章 諸田南遺跡A地区	
第1節 調査の経緯	7
第2節 遺構の概要と基本層序	10
第3節 古墳時代後期の遺構と遺物	13
第4節 近現代の遺構	38
第5節 小結—古墳時代後期の一本柱を立てた祭祀遺構について	38
第3章 諸田南遺跡B地区	
第1節 調査の経緯	59
第2節 遺構の概要と基本層序	60
第3節 中世の遺構と遺物	62
第4節 小結	82
第4章 諸田南遺跡C地区	
第1節 出土遺構と遺物	94
第2節 小結	97
第5章 定留遺跡外野地区	
第1節 出土遺構と遺物	101
第2節 小結	107

挿 図 目 次

第 1 章 調査の経過と概要

第1-1図	諸田南遺跡、定留遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25000)	3
第1-2図	中津港線内の発掘調査遺跡位置図 (1/5000)	4

第 2 章 諸田南遺跡A地区

第2-1図	諸田南遺跡A地区の位置 (1/3000)	7
第2-2図	諸田南遺跡A地区遺構配置図(1/150)	10
第2-3図	A地区の基本層序 (1/30)	13
第2-4図	A地区出土遺物 (1/3)	13
第2-5図	古墳時代後期の遺構配置図 (1/300)	13
第2-6図	SD1 (1/100)	14
第2-7図	SD1出土遺物 (1/3)	14
第2-8図	SD1 (1/50)	14
第2-9図	S-4遺構の層序 (1/40)	14~15
第2-10図	S-4上層 (1/80)	18
第2-11図	S-4中層 (1/80)	19
第2-13図	S-4第2層中出土遺物 (1/2)	19
第2-14図	S-4第3層=中層出土遺物 (1/3)	20
第2-15図	S-4下層 (1/80)	21
第2-16図	S-4第4層=下層出土遺物(1/3、1/2)	22
第2-17図	SK16 (1/30)	22
第2-18図	SK16出土遺物 (1/3)	22
第2-19図	SK17 (1/30)	23
第2-20図	SK17出土遺物 (1/3)	24
第2-21図	SK29上層 (1/30)	25
第2-22図	SK29中層 (1/30)	25
第2-23図	SK29下層 (1/30)	26
第2-24図	SK29断面土層図 (1/20)	27
第2-25図	SK29最上層出土遺物 (1/2)	27
第2-26図	SK29上層出土遺物 (1/3、1/2)	28
第2-27図	SK29中層①出土遺物 (1/3)	29
第2-28図	SK29中層②出土遺物 (1/3、1/2)	30
第2-29図	SK29下層出土遺物 (1/3)	30
第2-30図	SK19 (1/30)	31
第2-31図	SK18 (1/30)	31
第2-32図	SK21 (1/30)	31
第2-33図	SK23 (1/30)	32
第2-34図	SK23断面土層図 (1/20)	32
第2-35図	SK23出土遺物 (1/3)	32
第2-36図	SK24 (1/30)	33
第2-37図	SK24出土遺物 (1/3)	33
第2-38図	SK25 (1/30)	33
第2-39図	SK25出土遺物 (1/3)	33
第2-40図	SK26 (1/30)	34
第2-41図	SK26出土遺物 (1/3)	34
第2-42図	SK27 (1/30)	34
第2-43図	SK30 (1/30)	34
第2-44図	SK32 (1/30)	35

第2-45図	SK32出土遺物 (1/3)	35
第2-46図	SK31 (1/30)	35
第2-47図	SK31出土遺物 (1/3)	36
第2-48図	SP28 (1/30)	37
第2-49図	SP28断面土層図 (1/20)	37
第2-50図	近世遺構配置図 (1/300)	38
第2-51図	S-5出土遺物 (1/3)	38
第2-52図	S-4遺構の変遷 (1/200、400)	41

第 3 章 諸田南遺跡B地区

第3-1図	諸田南遺跡B地区の位置(1/3000)	59
第3-2図	諸田南遺跡B地区遺構配置図(1/400)	60
第3-3図	諸田南遺跡B地区主要部遺構配置図 (1/300)	62
第3-4図	SD1~3、SD8、SD28 (1/300)	63
第3-5図	SD1出土遺物 (1/3)	64
第3-6図	SD2出土遺物 (1/3)	64
第3-7図	SD3出土遺物① (1/3)	64
第3-8図	SD3出土遺物② (1/3)	64
第3-9図	SD11 (1/40)	65
第3-10図	SD11出土遺物 (1/3)	65
第3-11図	SD25 (1/40)	66
第3-12図	SD25出土遺物 (1/3)	66
第3-13図	SD28出土遺物 (1/3)	66
第3-14図	SD31 (1/80)	66
第3-15図	SD31出土遺物 (1/3)	67
第3-16図	SD44 (1/80)	67
第3-17図	SD44出土遺物 (1/3)	68
第3-18図	SD52 (1/60)	68
第3-19図	SD53 (1/80)	69
第3-20図	SD53出土遺物 (1/3)	70
第3-21図	SD54ab、SD56、SD55 (1/300)	71
第3-22図	SD54a出土遺物 (1/3)	71
第3-23図	SD54b出土遺物 (1/3)	71
第3-24図	SD54下部出土遺物 (1/3)	72
第3-25図	SD55出土遺物 (1/3)	72
第3-26図	SD56出土遺物 (1/3)	72
第3-27図	SK7 (1/40)	72
第3-28図	SX10 (1/20)	73
第3-29図	SX10出土遺物 (1/3)	73
第3-30図	SK13 (1/40)	73
第3-31図	SK29 (1/40)	73
第3-32図	SK29出土遺物 (1/3)	74
第3-33図	SK30 (1/30)	74
第3-34図	SK33 (1/40)	74
第3-35図	SK34 (1/40)	74
第3-36図	SK34出土遺物 (1/3)	74
第3-37図	SK35 (1/40)	75
第3-38図	SK35出土遺物 (1/3)	75
第3-39図	SK36 (1/40)	75
第3-40図	SK37 (1/40)	75
第3-41図	SK37出土遺物 (1/3)	76
第3-42図	SK39 (1/40)	76

第3-43図	SK41 (1/40)	76
第3-44図	SK42 (1/30)	76
第3-45図	SK43 (1/40)	77
第3-46図	SK43出土遺物 (1/3)	77
第3-47図	SK47 (1/40)	77
第3-48図	SK48 (1/30)	77
第3-49図	SK50 (1/30)	78
第3-50図	SK50出土遺物 (1/3)	78
第3-51図	SK57A・B (1/80)	78
第3-52図	SK57A土坑出土遺物 (1/3)	79
第3-53図	SK57B土坑出土遺物 (1/3)	79
第3-54図	SK58a・b (1/40)	79
第3-55図	SK58出土遺物 (1/3)	80
第3-56図	SK59 (1/40)	80
第3-57図	SK62出土遺物 (1/3)	80
第3-58図	SK65 (1/40)	80
第3-59図	SP5出土遺物 (1/3)	80
第3-60図	SP18出土遺物 (1/3)	80
第3-61図	SP32出土遺物 (1/3)	80
第3-62図	SP38 (1/30)	81
第3-63図	SP38出土遺物 (1/3)	81
第3-64図	SP40 (1/30)	81
第3-65図	SP40出土遺物 (1/3)	81
第3-66図	SP49出土遺物 (1/3)	81
第3-67図	SP51出土遺物 (1/3)	81
第3-68図	SP64 (1/30)	81
第3-69図	SP64出土遺物 (1/3)	81
第3-70図	B地区一括出土遺物 (1/3)	82
第3-71図	諸田南B地区の中世集落遺跡(1/800)	82

第4章 諸田南遺跡C地区

第4-1図	諸田南遺跡C地区調査区配置図 (1/2500)	93
第4-2図	諸田南遺跡C地区遺構配置図 (1/1000)	94
第4-3図	諸田南遺跡C-1地区1号溝～3号溝 (1/120)	95
第4-4図	諸田南遺跡C-3地区4号溝 (1/120)	96
第4-5図	諸田南遺跡C地区出土遺物 (1/3、1/2)	96

第5章 定留遺跡外野地区

第5-1図	定留遺跡外野地区調査区配置図 (1/2500)	101
第5-2図	定留遺跡外野地区遺構配置図 (1/600)	102
第5-3図	定留遺跡外野地区1号溝、2号溝 (1/160)	103
第5-4図	定留遺跡外野地区1号溝出土遺物 (1/3)	103
第5-5図	定留遺跡外野地区3号溝 (1/160)	104
第5-6図	定留遺跡外野地区陥穴 (1/30)	105
第5-7図	定留遺跡外野地区炉穴 (1/30)	106

第5-8図	定留遺跡外野地区炉穴出土遺物(1/3)	106
第5-9図	定留遺跡外野地区出土遺物 (1/3)	107

表目次

第2章 諸田南遺跡A地区

第2-1表	諸田南遺跡A地区遺構一覧表	11~12
第2-2表	S-4遺構内層序相関図	17
第2-3表	諸田南遺跡A地区の遺構相関図	39
第2-4表	接合資料一覧表	39

第3章 諸田南遺跡B地区

第3-1表	諸田南遺跡B地区遺構一覧表	61
-------	---------------	----

写真図版目次

第2章 諸田南遺跡A地区

写真図版1	A地区遠景	42
写真図版2	A地区層序、SD1	43
写真図版3	SB1、S-4遺構	44
写真図版4	S-4遺構完掘状況	45
写真図版5	S-4遺構各部	46
写真図版6	S-4遺構、SK16、SK17	47
写真図版7	SK18、SK19、SK23	48
写真図版8	SK24、SK25、SK26	49
写真図版9	SP28、SK29	50
写真図版10	SK31、SK32	51
写真図版11	遺物1	52
写真図版12	遺物2	53
写真図版13	遺物3	54
写真図版14	遺物4	55
写真図版15	遺物5	56

第3章 諸田南遺跡B地区

写真図版1	B地区全景	83
写真図版2	SD1～3	84
写真図版3	SD31、SD44、SD55	85
写真図版4	土坑	86
写真図版5	SK53、SK57、SP64	87
写真図版6	遺物1	88
写真図版7	遺物2	89
写真図版8	遺物3	90

第4章 諸田南遺跡C地区

写真図版1	C地区俯瞰	97
写真図版2	遺物1	98

第5章 定留遺跡外野地区

写真図版1	1号溝、陥穴、炉穴	108
写真図版2	陥穴	109
写真図版3	遺物1	110

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過と調査方法

今回調査した諸田南遺跡A・B・C地区、定留遺跡外野地区は、中津日田道路のうちの中津港線に伴い発掘調査されたものである。中津日田道路は北より中津港線、国道212号中津道路と続き、中津～三光、三光～本耶馬溪、本耶馬溪～耶馬溪線、耶馬溪～耶馬溪、耶馬溪～山国、山国～日田等に区分されている。中でも、中津港線、本耶馬溪～耶馬溪線に関しては既に発掘調査が終了している。また、国道212号中津道路に関しては伊藤田穂屋遺跡を除いては全て発掘調査を終了している。中津～三光間は平成20年度から試掘・本調査に入り、三光～本耶馬溪、耶馬溪～耶馬溪、耶馬溪～山国、山国～日田等は未定である。

ここで取扱う諸田南遺跡、定留遺跡は、海岸部を走る県道23号線から国道213号線(旧国道10号線)までの中津港線の区間で発見された遺跡である。中津港線は土地買収が行われた個所を平成14年度に試掘調査し、平成14年度後半から平成17年度に発掘調査を実施している。平成14年度後半は諸田南遺跡A地区、平成15年度は諸田南遺跡B地区、平成16年度は諸田南遺跡C地区、平成17年度は定留遺跡外野地区を調査対象とした。

第2節 調査団の構成

平成14～17年度に実施した諸田南遺跡A・B・C地区、定留遺跡外野地区の調査組織は以下のとおりである。

平成14年度 諸田南遺跡A地区

調査主体 大分県教育委員会

調査組織 岩尾 康晴 大分県教育庁文化課長

麻生 祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐

清水 宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐

栗田 勝弘 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当主幹

田中 裕介 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当副主幹(調査担当)

山崎 文子 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当嘱託(調査担当)

平成15年度 諸田南遺跡B地区

調査主体 大分県教育委員会

調査組織 今永 一成 大分県教育庁文化課長

麻生 祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐

清水 宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐

高橋 信武 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当主幹

栗原 眞 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当主幹

田中 裕介 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当副主幹(調査担当)

阿比留士朗 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当嘱託(調査担当)

平成16年度 諸田南遺跡C地区

調査主体 大分県教育委員会

調査組織 伊藤 正行 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

益永 孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長

高橋 徹 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長

高橋 信武 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主幹

矢部 勝徳 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主査(調査担当)

恒賀健太郎 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主事(調査担当)
下田 智隆 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当嘱託(調査担当)

平成17年度 定留遺跡外野地区

調査主体 大分県教育委員会

調査組織 渋谷 忠章 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

益永 孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長

栗田 勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長

高橋 信武 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主幹

槇島 隆二 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当副主幹(調査担当)

下田 智隆 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当嘱託(調査担当)

第3節 遺跡の地理的・歴史的環境

諸田南遺跡A・B・C地区、定留遺跡外野地区の調査は平成14～17年度に実施された。遺跡は八面山のメサの雄姿から派生する広大な下毛原台地と呼ばれる低台地上に展開している。これらの低台地は標高十数メートルであり、東を犬丸川、西を舞手川等の小さな支流によって浸食され、複雑に枝分かれをした開析谷と河岸段丘を各所に作り出している。遺跡はこの様な浅い谷に囲まれた平坦な丘陵上の縁辺部に点在している。

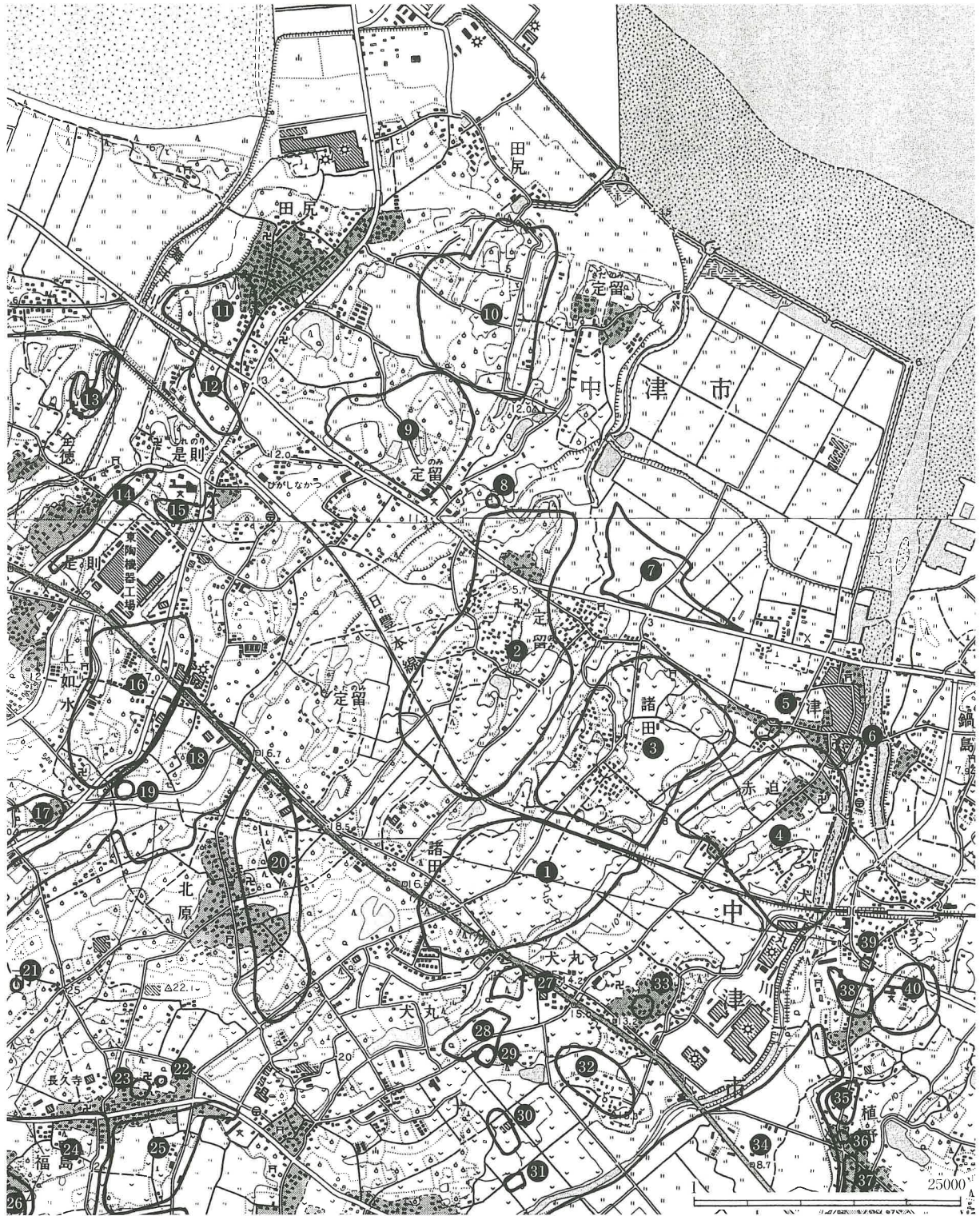
諸田南遺跡、定留遺跡の周辺の遺跡を見ると、旧石器時代では南西部約3.5kmの樋多田遺跡や3kmの才木遺跡で少数な後期旧石器時代の石器が出土している。

縄文時代では、約0.5km南には早期の炉穴を複数検出した鳥遺跡(27)がある。また、南西部約4kmの黒水遺跡は、国道10号線中津バイパスの調査で県内初の縄文時代早期～前期の陥穴遺構を25基検出し注目された。縄文後期では南西約2.5kmに竪穴住居内に埋葬人骨が検出された県指定史跡の棒垣遺跡がある。棒垣貝塚をはじめ、入垣貝塚等は稀有な重要遺跡の一つである。この地域の縄文時代の特徴としては、西約2kmの土木貝塚(21)や北約1kmの和間貝塚(8)、南東約2kmの県指定史跡の植野貝塚(36)などで象徴されるように貝塚が豊富な地域である。内陸部まで深く入り込んだ当時の周防灘沿岸の海岸線を示唆している。

弥生時代の遺跡としては、約0.5km北には諸田遺跡(3)、北西約2.5kmに舞手橋東段上遺跡(11)、是則遺跡(12)、全徳遺跡(13)、西1.5kmに上如水遺跡(16)がある。また、南西約2.5kmに三保遺跡(25)、福島遺跡(24)等がある。

古墳時代の遺跡としては、約0.5km北には是能遺跡(9)や田尻大迫遺跡(10)、西約1.5kmには原遺跡(19)、南約1.5kmには黒川古墳、東約1.5kmには若旗古墳(39)があるが、南方の犬丸川を越えた丘陵の縁辺には横穴墓群や窯跡群が豊富である。南西約2kmに城山横穴墓群、2.5kmに中津市指定の岩井崎横穴墓群、城山古墳群、南東約2.5kmには野依古墳がある。一方、窯跡群としては城山窯跡、草場窯跡、野依・伊藤田窯跡、伊藤田穂屋窯跡、夜鳴池西窯跡、踊ヶ迫窯跡、山田池窯跡、大池窯跡、瓦ヶ迫窯跡等がある。

中世の遺跡としては、南約0.5kmには野田遺跡(29)、上畑成遺跡(28)、同2kmには田中遺跡、屋敷田遺跡がある。東約1 kmには岩丸城跡(5)、末広城跡(6)、南西約1.5kmに田丸城跡(22)、田丸遺跡(23)、南西約2kmには中津市指定の城土遺跡、下伊藤田城跡、福島城跡(26)、前田遺跡、草場城跡がある。



1 諸田南遺跡	古墳・近世	15 安松遺跡	古墳・中世	29 野田遺跡	中世
2 定留遺跡	縄文・近世	16 上如水遺跡	弥生・古墳	30 北小琵琶遺跡	弥生～中世
3 諸田遺跡	弥生・古墳	17 中原遺跡	江戸	31 馬下遺跡	
4 赤迫東遺跡	鎌倉館跡	18 大悟法地区条里跡	古代・中世	32 中尾城跡	中世
5 岩丸城跡	中世	19 原遺跡	古墳	33 犬丸城跡	中世
6 末広城跡	中世	20 北原遺跡	弥生・古墳	34 野依地区条里跡	古代・中世
7 天貝川遺跡	縄文～古墳	21 土木貝塚	縄文	35 植野伽藍遺跡	弥生・古墳
8 和間貝塚	縄文	22 長久寺貝塚・田丸城跡	古墳・中世	36 植野貝塚(県指定)	縄文
9 是能遺跡	古墳	23 田丸遺跡	中世	37 植野古城遺跡	弥生・古墳
10 田尻大迫遺跡	古墳・奈良	24 福島遺跡	縄文～中世	38 若旗遺跡	弥生・古墳
11 舞手橋東段上遺跡	弥生	25 三保遺跡	弥生・古墳	39 若旗古墳	古墳
12 是則遺跡	弥生・古墳	26 福島城跡	中世	40 中須遺跡	古代
13 全徳遺跡	弥生・古墳	27 鳥遺跡	縄文・弥生・古墳		
14 舞手川流域遺跡	縄文～中世	28 上畑成遺跡	中世		

第1-1図 諸田南遺跡、定留遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25000)

第4節 発掘調査の対象地と概要

中津日田道路の中津港線に伴う調査は、平成14年度から土地買収の終了した箇所から順次を実施してきた。路線内の周知遺跡における確認調査は当然ではあるが、路線内のその他の対象地についても、工事中の不時発見を回避するために、必要と考えられる箇所に関しては試掘調査を実施していった。その結果、発掘調査の対象は北から、定留外野地区、諸田南遺跡A・B・C地区という4箇所が選別された。遺跡の分布は下記の地図に示すとおりである。



第1-2図 中津港線内の発掘調査遺跡位置図 (1/5000)

第2章

もろた 諸田南遺跡 A地区



S-4遺構掘り下げ中。

第2章 諸田南遺跡A地区

第1節 調査の経緯（第2-1図）

発端 中津日田道路の一環として県道中津港線の建設が計画され、その路線に定留遺跡、諸田南遺跡などの周知の遺跡が存在した。そのため遺跡の立地する段丘地形から見て、周知遺跡の範囲内に限らず遺跡の存在する可能性のある地点を試掘調査して工事以前に遺跡の保護をはかる必要が生じた。

試掘調査 2002(平成14)年末におこなった諸田南遺跡隣接地区の試掘調査の第18試掘坑において、漆黒の覆土が充満した大型の土坑を検出し、その検出面から古代以前にさかのぼる一個の石製紡錘車(第2-25図1)が発見された。この石製紡錘車が発見された土坑は翌2003(平成15)年1~3月に実施した本調査におけるS-4遺構にあたり、その中の土坑SK29の最上層に包含されていたことが判明した。この土坑の発見によって、この周囲を諸田南遺跡A地区として本発掘調査を行うこととなった。

本調査 2003(平成15)年1~3月、冬季に発掘調査をおこなった。現状は水田であり、まず水田耕作土と水田の床土を重機ではぐと、水田造成の際に盛られた暗茶色粘質土が全体に広がり、その下には基盤層に当たる黄色粘質土が存在し、すべての遺構はその面上において検出された。調査はまずその基盤層上で検出されたあらゆる痕跡にしるしをつけ、半裁してほりさげて、人為的遺構かどうかを判定し、人為的と判定された遺構のみにS番の通し番号をふして調査を進めた。以下その調査日誌抄である。



第2-1図 諸田南遺跡A地区の位置 (1/3000)

諸田南遺跡A地区、調査日誌抄

2003(平成15)年

1月15日(火) 曇のち晴、田んぼの中に進入路を建設。

16日(水) 晴。前日に引き続き進入路と、境界明示のために土波を作る。重機による表土剥ぎ開始。

17日(金) 晴。表土剥ぎ。A地区の範囲杭打ち。

20日(月) 晴。プレハブおよび機材搬入。表土剥ぎ。

21日(火) 晴。表土剥ぎ。今日から作業員約10名入る。

田中・山崎の2名で調査にあたる。そばに機材用のテント設置。調査区の壁面を削る。プレハブ電気工事。

22日(水) 晴のち曇。壁面清掃して、土層観察。水田層の下にすぐ遺構検出面がある。遺構検出作業に入る。

24日(金) 晴。遺構検出作業続行。遺構S-1からS-4を検出。S-4は真っ黒い覆土の入る大きな遺構である。

28日(火) 晴時々雪。遺構検出作業と、試掘トレンチの清掃をおこなう。

30日(木) 晴。遺構検出作業、S-5からS-13検出。各遺構の掘り下げを始める。

31日(金) 曇のち晴。各遺構の掘り下げ。S-1は溝と判明しSD1とする。SD1の延長部を拡張した。周辺でおこなわれていたボーリング調査の結果を聞く。水田の下は地表下2.7mまではローム層で2万年前までさかのぼるが、その下は地表下13mまでは火山灰の二次堆積層で、水を多く含み柔らかいとのこと。



SK31調査中

2月 3日(月) 晴。拡張部分の壁面清掃とSB1の遺構検出に当たる。各遺構の掘り下げ。見学者3名。

4日(火) 晴時々曇。掘立柱建物SB1検出状態写真撮影。溝SD1は北に伸び、須恵器の平瓶出土。7世紀の遺構の可能性強まる。土坑S-4からも須恵器や土師器の破片が出土しはじめる。見学者1名。

5日(水) 晴。SD1完掘、写真撮影。S-4掘り下げ継続。中津市教委高崎章子氏来跡。この付近では古代の遺構の覆土は黒色であるむね教示をうける。S-4の覆土と符合する。

6日(木) 晴。SD1の延長を確認するためにA地区の里道をはさんだ南側にトレンチを入れるが、すでに削平がおよび、溝の延長は確認できなかった。

7日(金) 晴。基準点設定、10m方眼の測量用の杭打ち。S-4上層黒色土を除去、その状態で写真撮影。諸田地区区長向氏来跡。

12日(水) 曇。雪じまいのシートをはずし、調査区半分の実測用の1m方眼の釘打ちと糸張りをおこなう。

13日(木) 晴。平面実測を20分の1で開始。見学者1名。

14日(金) 晴。平面実測継続。

17日(月) 晴。掘立柱建物SB1の各柱穴を半裁して掘り下げる。遺構掘り下げ。平面実測継続。

18日(火) 曇のち晴。掘立柱建物SB1の柱筋の延長部を更に拡張して、遺構検出。平面実測継続。

19日(水) 晴のち曇。SB1の柱穴検出。S-4上層平面実測、遺物取り上げ。実測用の釘打ち糸張り。

20日(木) 曇時々雨または晴。平面実測。

21日(金) 晴。掘立柱建物SB1柱穴掘り下げ。S-4より7世紀の須恵器出土。平面実測。

24日(月) 雨のち曇のち晴。平面実測継続、S-4を掘り下げると内部の小土坑が多数重複。断面写真撮影、実測。

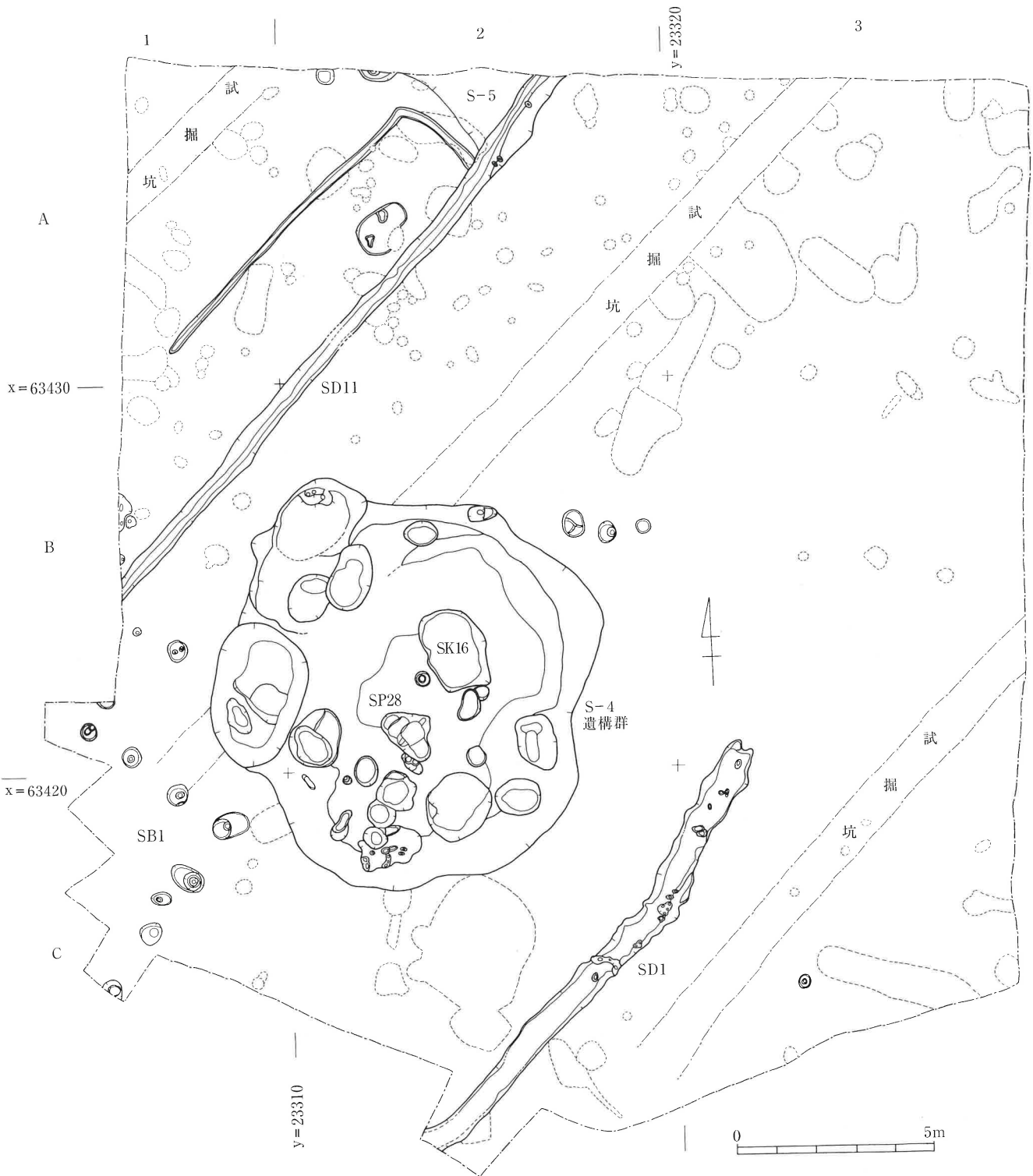
26日(水) 曇。ピット掘り下げ。S-4内の各土坑を断面観察しながら掘り下げ。SB1写真撮影、平面実測。見学者1名。

- 27日(木) 晴。S-4内の各土坑を掘り下げ、平面実測。SB1写真撮影、平面実測。
- 28日(金) 晴。S-4内の各土坑を掘り下げ、平面実測、遺物取り上げ。
- 3月 4日(火) 晴時々曇。S-4遺物取り上げ。更に掘り下げ、平面実測。
- 5日(水) 曇。S-4内の各遺構掘り下げ、写真撮影、平面実測。遺物取り上げ。中央に位置するS28は柱穴と判明。中心に1本の柱を立てた大型の土坑とは何か。中津市教委富田氏来跡。
- 6日(木) 雨。S-4遺構の性格を田中と栗田で検討。午後から中津土木事務所で会議。
- 7日(金) 雨。午前中は、土器洗いと記録の整理を行う。午後S-4断面実測。
- 10日(月) 晴。S-4内の各遺構の実測。遺物取り上げ。写真撮影。
- 11日(火) 晴。S-4内の各遺構の実測。遺物取り上げ。写真撮影。
- 12日(水) 晴。S-4内の各遺構の掘り下げ、実測。遺物取り上げ。写真撮影。SP28の柱穴には支えと考えられる掘り込みが四方にあり、トーチポールのような1本柱であると考えられた。一部の埋め戻し準備。高崎章子・花崎徹(中津市教育委員会)来跡。
- 13日(木) 晴。全景写真撮影。S-4各遺構の掘り下げ、実測。遺物取り上げ。写真撮影。
- 14日(金) 晴。S-4内の各遺構の掘り下げ、実測。遺物取り上げ。写真撮影。周辺片付け、埋め戻し開始。
- 17日(月) 雨のち曇。A地区調査終了。埋め戻し、清掃。遺物点検と土器洗い。甲斐寿義(県埋文センター)、後藤一重(県文化課)来跡。
- 18日(火) 曇。埋め戻し。事務所片付け。埋文センターに資材搬出。
- 19日(水) 晴。埋め戻し。トイレ等リース物件撤去。関係各位挨拶回り。
- 20日(木) 晴。埋め戻し終了。リース物件撤去。関係各位挨拶回り。



SBI建物発掘中

なお、報告書作製にあたり、遺構の図面調整には田中、山崎文子、藤沢香織があたり、遺物の接合等は伊東雅子、諫山明美、吉田ひとみがあたり、実測とトレースには松浦憲治、安部明美、上田はるみ、山口美紀、高井光子、田嶋智子の協力をえた。また遺物の写真撮影は、田中と原田昭一がおこなった。



第2-2図 諸田南遺跡A地区遺構配置図 (1/150)

第2節 遺構の概要と基本層序

どんな遺構が発見されたか（第2-2図、第2-1表） わずかに600m²ばかりに過ぎない小面積のなかに、6世紀後葉から7世紀前半にかけて存続した古墳時代後期の特異な遺構群が発見された。中心となるのは調査時にS-4遺構と呼んだ径10mを越える大型の掘り込みである。その周囲にはS-4を区画する浅い溝SD1が1条、さらにS-4遺構に近接する掘立柱建物SB1が発見されている。以上の各遺構は、本来集落の一角を構成するとみられる。S-4遺構は本来ひとつの大きな土坑であるが、調査の結果まず大きく掘りくぼめた中央に1本の柱を立て

たと推定される柱穴SP28がほられ、その周囲に10ヶ所前後の不規則な形態の土坑が順次ほられていき、その都度祭祀遺物を廃棄したと推定される。1本の立柱をシンボルにした祭祀遺構であると復元される。最後は柱が抜き取られたらしく、土坑SK16が最後に中央に掘られた後、埋め戻されてS-4遺構全体が浅く埋め戻されて放棄されている。

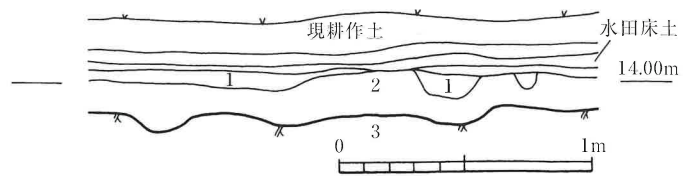
ところで周囲には、この遺構の以前と以後の時期にあたる遺構は一切発見されていない。6世紀末葉から7世紀前半にかけて存続した遺構群のみが存在し、近現代になって畑地としての利用がなされて、ふたたび溝状の遺構が認められるようになる。発見された遺構の一覧を第2-1表に掲げた。

第2-1表 諸田南遺跡A地区遺構一覧表

	遺構	性格	時期	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留混入遺物	備考
SB1	掘立柱建物					なし。	—	—	掘形埋土はS-4の3ないし4層と似る。
柱穴1	←SP15				掘形・柱痕	なし。	{掘形内} 須恵器甕片1.	—	SK29下層一括と接合。 SK29以後の建物
柱穴2		7世紀前葉		3層(基盤層)上面	掘形・柱痕	なし。		—	
柱穴3	←SP3				掘形・柱痕	なし。	{掘形内} 須恵器甕片1. 土師器甕1.	—	
柱穴4	←SP22				掘形・柱痕	なし。	{掘形内} 土師器甕1.	—	
柱穴5	←SP20				掘形・柱痕	なし。	{掘形内} 土師器1.	—	
柱穴6					掘形・柱痕	なし。	—	—	
柱穴7					掘形・柱痕	なし。	—	—	
SD1	溝	7世紀前葉(TK209以後)		3層(基盤層)上面	2層に別れる。	なし。	須恵器坏身1, 横瓶1.	—	
S-2	現代電柱	近代		1・2層上面	—	—	現代平瓦1, 針金数点	—	
S-3	→SB1柱穴3								
S-4	大規模な掘り込み	6世紀末~7世紀中葉(TK43~TK217)		3層(基盤層)上面	大別4層	多数の土坑があり。	1層: 須恵器(坏蓋、坏身、甕、甕)、土師器(甕) 2層: 須恵器(甕)、土師器(壺)、鉄環。 3層: 須恵器(坏、高坏、甕、甕)、土師器(皿、甕、甕) 4層: 須恵器(高坏、横瓶、壺、甕)、土師器(甕、甕)	1層: 黒色土器A類、肥前陶器、瓦質鍋 3層: 肥前陶胎染付	
S-5	現代水田	現代		1・2層上面	—	SD11と接続。	瓦質鍋1, 陶器碗1	管状土錘1	—
SP6	ピット				単層: 黒色土	S-7を切る。	土師片1。	—	—
S-7	焼土の広がり				焼土層	S-6に切られる。	土師片2。	—	—
SP8	ピット	近代		1・2層上面	単層: 黒色土	—	土師片4。	—	—
S-9	自然の窪み					—	土師片4。		
S-10	自然のしみ					—	須恵器甕片1.		
SD11	水田溝	現代		1・2層上面	単層: 暗灰色軟質土	S-5と接続。S-4を切る。	近現代陶器片3、土師5	須恵器坏蓋片2、坏身1、土師4	—
S-12	自然のしみ						古代土師片1	—	—
S-13	自然のしみ						古代土師片2(甕1)	—	—
S-14	自然のしみ	近代					近代陶器播鉢片1	—	—
SP15	→SB1柱穴1								
SK16	土坑(S-4内)	7世紀中葉(TK217)		S-4の2層除去後	多層: S-4の2層土で埋没。	S-4の3層をきり、2層土で埋め戻される。	須恵器(提瓶)、土師器(壺)	なし。	北西方向に埋土が舌状に広がる。
SK17	土坑(S-4内)	7世紀前葉		S-4の3層除去後	上下2層からなる。	SK29とSK32を切り、SK31に切られる。	須恵器(坏身、高坏、甕)、土師器(甕、甕)、ひらたい土製品	なし。	TK43, TK217 須恵器出土
SK18	土坑(S-4内)	6世紀末~7世紀前葉		S-4の4層除去後	単層: S-4の4層土で埋没。(焼土・炭なし)	なし。	須恵器高坏片1, 土師器1	なし。	—
SK19	土坑(S-4内)	6世紀末~7世紀前葉		S-4の3層除去後	単層: 暗黄褐色土(炭焼土なし)	SK27を切る。	須恵器片(壺1、坏1)	なし。	・S-4: 2層(上層)出土遺物と同一。

遺構	性格	時期	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留混入遺物	備考
SP20	→SB1柱穴5							
SK21	小土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の4層除去後	単層：S-4の4層土で埋没。 (焼土・炭なし)	なし。	土師器片2	なし。	—
SP22	→SB1柱穴4							
SK23A	小土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	7層の互層	SK23CとSK30を切り、SK23Bに切られる。	なし。	なし。	C土坑を埋め戻すために掘られたものか。
SK23B	小土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	3層	SK23AとC土坑を切る。	土師器坏蓋1(宝珠つまみ7世紀後半～末)、 須恵器甕1	なし。	掘削後放置され、4層と3層の堆積中に土器が入る。 ・SK24出土遺物と接合。 ・S-4下層出土遺物と接合。
SK23C	小土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	焼土・炭層	SK23AとB土坑に切られる。	なし。	なし。	何らかの火を焚いた跡で、S-4の3層堆積以前に埋め戻している。
SK24	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	上下2層からなる。	なし。	須恵器片(短頸壺1、壺2、坏2、高坏1)、土師器(甕数点)、棒状土錘1	なし。	須恵器高坏は故意に打ち欠かれている。棒状土錘も折れている。 ・SK23B出土遺物と接合。 ・S-4：3層(中層)と接合
SK25	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	単層：S-4の4層土で埋没。	SK29に切られる。	須恵器片(坏蓋1、甕1)、土師器片(甕3)	なし。	4層土で埋め戻し。
SK26	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	上下2層からなる。	なし。	須恵器片(高坏1)土師器片1。	なし。	S-4掘削当初に掘られ、すぐ埋め戻されている。
SK27	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	単層：S-4の4層土で埋没。	SK19に切られる。	なし。	なし。	—
SP28	中心柱穴(S-4内)	6世紀末～7世紀中葉(TK43～TK217)	S-4の4層除去後	掘形埋土、柱痕、	なし。	なし。	なし。	S-4掘削当初に掘られ、2層を貼る前に抜き取る。
SK29	土坑(S-4内)	7世紀前葉	S-4の3層除去後	大きく上中下3層に分かれる。	SK25を切る。	上層 須恵器片(坏蓋2、坏身1、高坏1、甕2)、土師器片(壺1、甕13、甗2)、平たい土製品、鉄鏝、滑石製紡錘車	なし。	TK209須恵器出土
						中層 須恵器片(坏蓋、坏身、高坏、壺、甕)、土師器片(高坏、甕、甗)、平たい土製品、壁土、滑石製紡錘車	なし。	SK43、TK209、TK217須恵器出土
						下層 須恵器片(坏蓋、壺、甕)、土師器片(高坏、甕、甗)、平たい土製品、壁土	なし。	—
SK30	小土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の4層除去後	単層：S-4の4層土で、埋没。	SK23Aに切られる。	なし。	なし。	浅い土坑土で底面に凸凹ある。
SK31	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	SK17掘り下げ中に検出。	—	SK32を切り、SK17に切られる。	須恵器片(坏蓋、坏身、壺、甕)、土師器片(坏、甕)、刀子、砥石、壁土	なし。	壁土が廃棄され、土師器甕がほぼ完形で潰れて廃棄。その西横に刀子
SK32	土坑(S-4内)	6世紀末～7世紀前葉	S-4の3層除去後	—	SK17に切られる。	須恵器(坏身、甕)、土師器(甕)	なし。	—

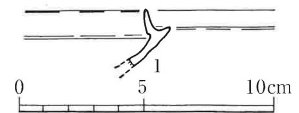
基本層序（第2-3・4図） 水田として利用されている現在の地表面から、遺構の発見される基盤層までの基本層序に触れておきたい。厚さ20cmほどの現在の水田耕作土の下には二枚の水田床土が形成されており、その下層は固い黄赤色土である。この2枚の床土



第2-3図 A地区の基本層序 (1/30)

が認められる現水田は、現地の聞き取りによれば、1950年代に水田化されたものであるという。その下に部分的に水田化以前の畑時代の耕作土が厚さ30センチほど堆積している。そのうち柔らかくてほくほくした黑色軟質土を第1層とし、下部の暗茶褐色粘質土を第2層とした。いずれも炭や焼土はほとんど含まない。その土層をばぐと硬くしまった黄色粘質土の基盤層がひろがり、この層を第3層とした。

以下に報告する古代の遺構はことごとくこの第3層上面で検出された。近現代の畑地に伴う遺構は第1ないし第2層上面で発見されている。第2-4図の1はC3区第3層上面において遺構検出時に発見された須恵器坯身の口縁部破片である。受け部の立ち上がりの形状から陶邑編年のTK43型式あるいはTK209型式にあたるものである。

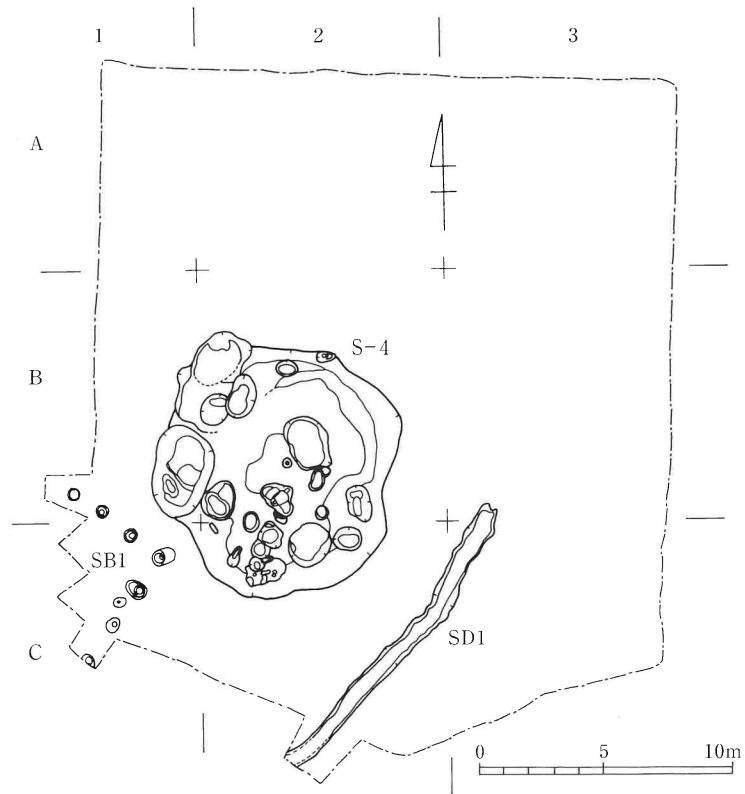


第2-4図 A3区出土遺物 (1/3)

第3節 古墳時代後期の遺構と遺物

3-1 遺構の配置 (第2-5図)

この狭い調査区の中から、掘立柱建物1棟と溝1条さらに大型の特殊土坑が1箇所発見された。この3種類の遺構は、その配置を観察すると相互に密接な関係があるものと推定される。まず掘立柱建物SB1の長軸方向と溝SD1の方向が一致する。さらに特殊土坑S-4（以下S-4遺構と称する）を囲むように溝SD1が湾曲している。そして三つの遺構は近接しながらも重複しないという関係を考慮すると、この三遺構は遺跡の存続していた期間のある時期には並存していた可能性が高い。この点は後に述べる遺物の時期からも検証できるものであった。

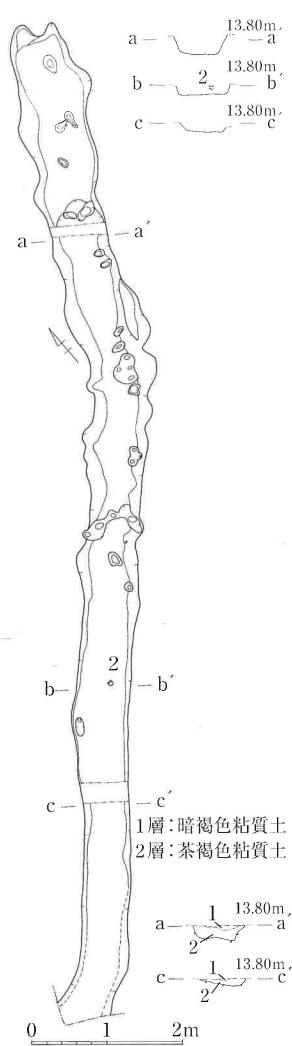


第2-5図 古墳時代後期の遺構配置図 (1/300)

3-2 溝

SD1 (第2-6・7図) A区調査区の南部(第3層上面)で発見された幅1m弱の溝

で、先端がやや西側に屈曲している。底部の断面形態は角の取れた台形に近く、深いところで20cm程度の深さがあった。なお南から北に向かって次第に深くなりa-a'断面あたりがもっとも深くなっている。その部分から北に向って一段をつけて浅くなり消失する。底面は凸凹がひどく、水路や溝として機能していたものではないことは埋土の内容からみても明らかで、生垣などを植えるための布掘りのようにも考えられる。断面土層は二層にわかれ、上部の第1層は遺物を含まない黄褐色粘質土で、底部に堆積した第2層は少量の炭片を含む茶褐色粘質土となり、この第2層に須恵器などの遺物が多い。遺物の出土状況はいずれも土師器と須恵器の細片である。2の



第2-6図 SD1 (1/100)

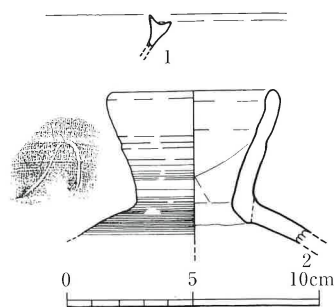
須恵器提瓶の口縁のみは打ち欠いた破片を廃棄された状態で第2層中から出土している。

出土遺物のうち、**1**は須恵器坏身口縁部で、陶邑編年TK209型式にあたる。**2**は提瓶の口縁部で口径6.8cm、口縁部の高さは5.5cmほどで、外面にはカキ目の後、逆V字形のヘラ記号が施されている。口縁端部はやや内傾し丸く収まる。6世紀後半から7世紀の製品である。

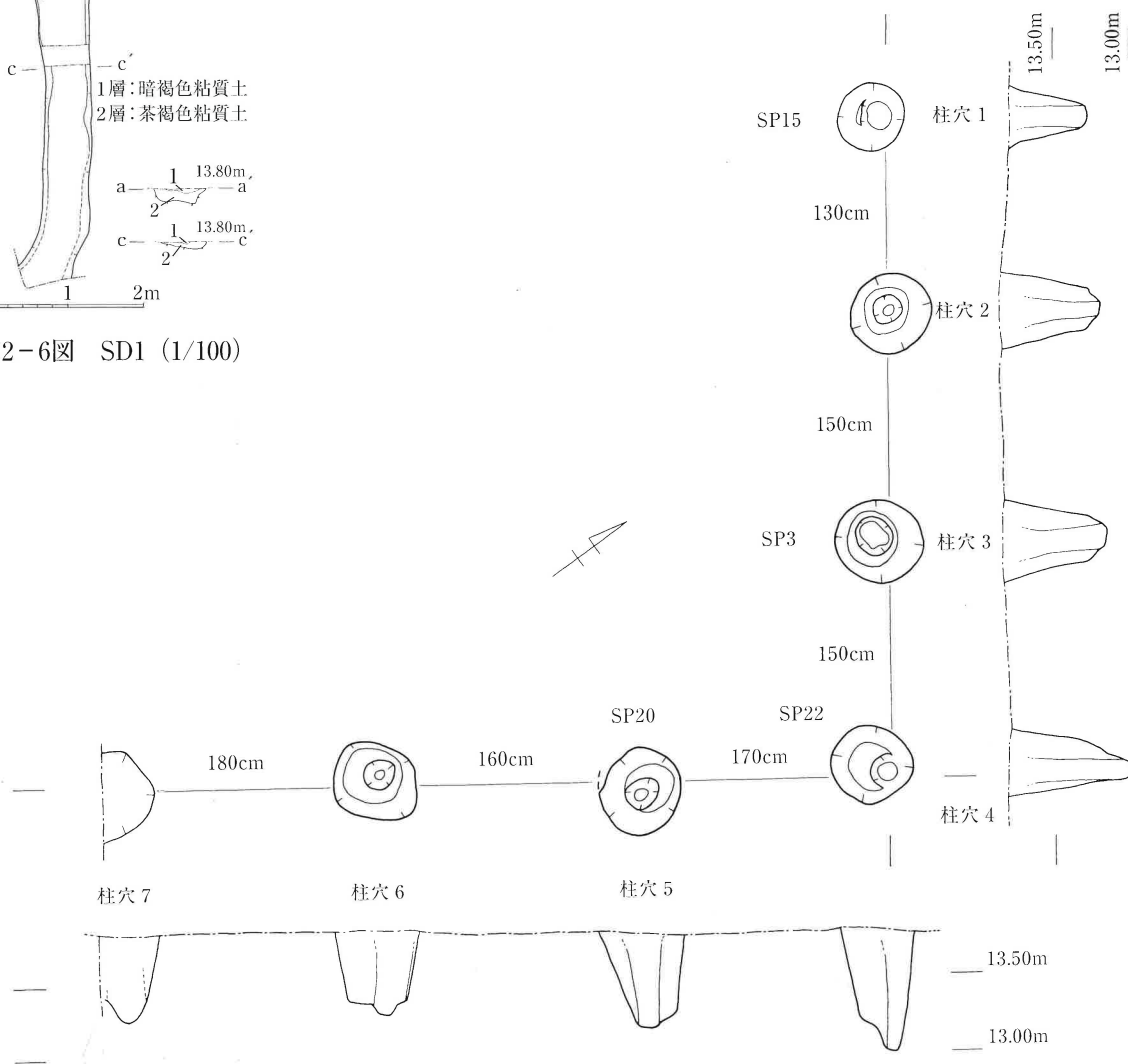
1は碎片の流れ込みであるから、溝SB1の掘削時期は**2**の須恵器提瓶が破壊され廃棄された時点、すなわち須恵器型式TK209以後の7世紀前葉と考えられる。

3-3 掘立柱建物

SB1 (第2-8図) 第3層(基盤層)上面で検出された、遺構のなかばは調査区域外に伸びる梁間3間以上、桁行3間以上の掘立柱建物である。S-4遺構とは近接するが切り合わず、本来同時併存していたものと考えられる。桁行きの方向は方位角35度前後で、長軸を東に振る。柱の芯々距離は梁間が130cmから150cmと

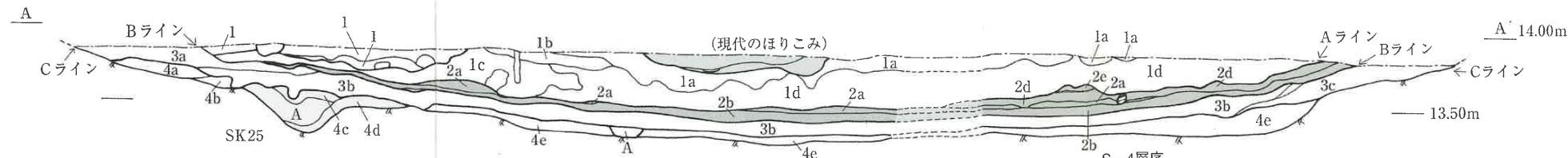


第2-7図 SD1出土遺物(1/3)



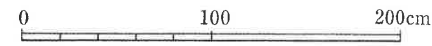
第2-8図 SB1 (1/50)

第2-9図 S-4遺構の層序 (1/40)



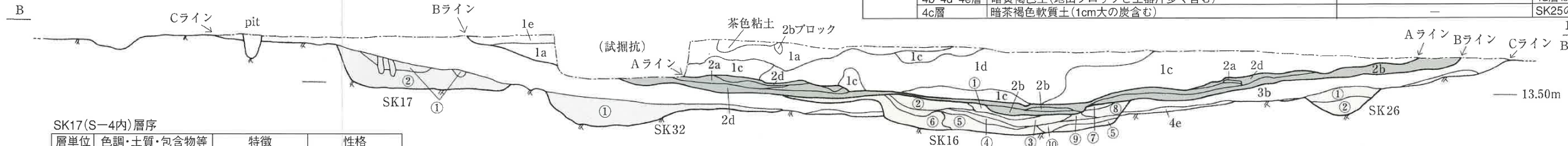
SK25(S-4内)層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
4C層	暗茶褐色粘質土(1cm大の炭含む)	—	—
A層	暗褐色粘質土(1cm大の炭を多く含む)	S-4の4層土と同じ。	埋め戻されたもの。
4b層	暗黄褐色土(地山ブロックと土器片多く含む)	—	—



S-4層序

取り上げ	層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
上層	1a層	暗茶褐色土と黒色土ブロックの混層(0.5cm大の炭を多く含む)	—	土器片が多い。 人為的な埋め戻し土。
	1b層	暗茶褐色土と黒色土ブロックの混層(0.5cm大の炭を多く含む)	1a層とほぼ同じ。	
	1c層	黒褐色軟質土(炭・焼土少量含む)	きめが細かい。暗黄褐色土のブロック多い。	
	1d層	暗茶褐色軟質土(炭・焼土少量含む)(1cm大の黄色土ブロックを含む)	—	
中層	2a層	茶褐色軟質土(やや硬く、炭焼土土器等はほとんど含まない)	—	凹凸しているが、人為的にはられている。この面の直下からSK16とSK28が掘られている。
	2b層	灰茶色粘質土(硬く、炭焼土土器等はほとんど含まない)	—	
	2c層	茶褐色軟質土(やや硬く、炭焼土土器等はほとんど含まない)	2a層と同じ。	東側のみで検出。上面は凹凸が激しい。
	2d層	明茶褐色土(粘りが柔らかく、2ab層ほどしまっていない礫を含む)	—	
	2e層	暗茶粘質土	2層のブロック。	下部に行くほど黒色は薄くなる
	3a層	黒茶色軟質土(1層ほど細かくなく、粘りがある)	—	
下層	3b層	暗茶色軟質土(粘りがあり、0.5cm大の炭・焼土と土器片多い)	3b層と4a層との間の漸移層	4d層はSK25の埋土 SK25の埋土
	3c層	暗茶褐色軟質土	—	
	4a層	茶褐色土(硬く、0.5cm大の炭焼土多い)	—	
	4b・4d・4e層	暗黄褐色土(地山ブロックと土器片多く含む)	—	
	4c層	暗茶褐色軟質土(1cm大の炭含む)	—	—



SK17(S-4内)層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
①層	暗黄褐色軟質土(1cm大の炭を含む)	S-4の3b層との境界は漸移的である。	S-4掘削直後に掘られ祭祀に使用した土器・焼土等を廃棄された後埋め戻された可能性高い。
②層	茶褐色軟質土(1cm大の炭焼土多く、土器片を多量に含む)	掘られてすぐ埋められた土	—

SK32(S-4内)層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
①層	暗黄褐色軟質土(1cm大の黄色土ブロックを多く、土器片、炭焼土を含む)	S-4の4層土類似。S-4の3b層との境界は漸移的。	掘削後埋めずに放置されていた可能性高い。

SK16(S-4内)層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
①層	暗褐色粘質土(1cm大の黄色土ブロックを多く、土器片、炭焼土を含む)	—	人為的に埋め戻されている。掘ってすぐS-4の2層をはる直前に掘られている。
②層	明黄色粘土(地山土)ブロックの集合	掘ったばかりの土。	
③層	明褐色粘土	S-4の2b層に類似。	
④層	暗褐色粘質土(1cm大の黄色土ブロックを含む)	①層と同じ土	
⑤層	明黄色粘土(地山土)ブロックの集合に、暗褐色土がまじった	土器片含む。	
⑥層	明黄色粘土(地山土)ブロックの集合。	—	
⑦層	明黄色粘土(地山土)ブロックの集合に、暗褐色土がまじった	—	
⑧層	暗褐色粘質土(1cm大の黄色土ブロックを含む)	—	
⑨層	硬い暗褐色粘	③層と同じ。	
⑩層	硬い暗褐色粘	③層と同じ。	

SK26(S-4内)層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
①層	暗黄褐色軟質土(1cm大の炭を含む)	S-4の3b層との境界は漸移的である。	S-4掘削直後に掘られ埋め戻された可能性高い。
②層	黄褐色硬質土(1cm大の地山に由来する黄色土ブロックを多量に含む)	掘られてすぐ埋められた土	



A-A' 左半



A-A' 右半



B-B'

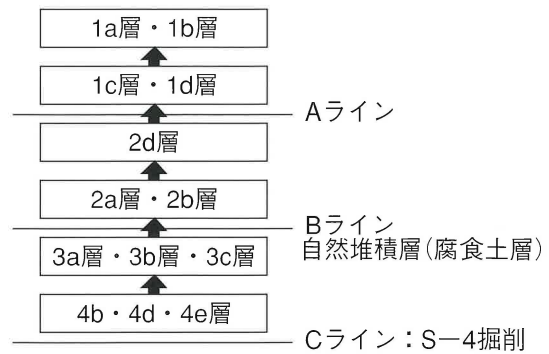
狭く、桁行きは160cmから180cmで長く取られている。柱穴はいずれも円形で径40ないし60cmで、多くの柱穴からは円形の柱痕が検出され、使用された柱の径は15cm前後と推定される。柱痕はさくさくした軟らかい暗色土で、いずれも空洞が残る。柱をしめた埋土は暗褐色あるいは黒褐色の軟質土で、柱穴を掘削したときの排土である5～10cm大の黄色土ブロックが多く含まれる。掘形埋土は全体として後述するS-4遺構の第3ないし第4層の様子と似ている。出土遺物の時期から7世紀前葉に下る築造時期を考える。

柱穴内からの出土遺物は極めて少なく、柱穴5の柱痕内から土師器小片1点、柱穴1・3・4の掘形埋土内から須恵器と土師器の小片1点のみが出土している。柱穴1からは須恵器の甕片が出土し、その破片はS-4遺構内の土坑SK29下層に破壊されて廃棄されていた須恵器の甕45(第2-29図)の破片(接合資料13)であり、この掘立柱建物がSK29掘削以後まもなくして掘られたことを物語っている。柱穴3からは須恵器甕片と土師器甕頸部小片が出土し、柱穴4からも土師器片が1点出土している。

3-4 S-4遺構(第2-9・10・12・15図、第2-2表)

基本層序の第3層(基盤層)上面で検出され、調査区のはほぼ中央で発見された不整形の大型土坑である。南北約11m東西約10mほどの規模である。当初は浅い窪みとみられたが、掘り進むにつれて、複雑な状況となった。大別4層の層序にわかれ、各層の面上に数多くの土坑が掘られている。出土須恵器からTK43型式からTK209型式をへてTK217型式にいたる時期に機能していた土坑と推定される。

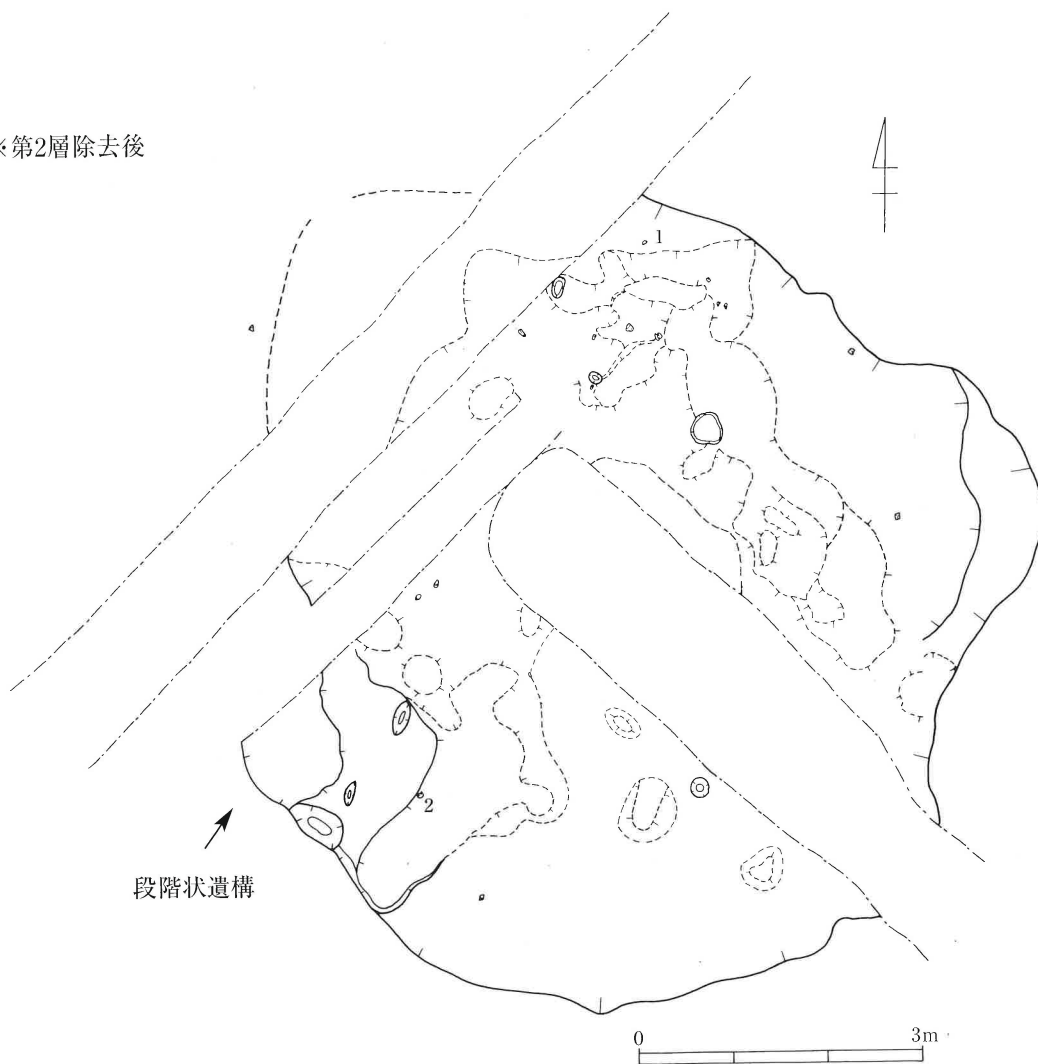
S-4遺構の層序と堆積過程を簡単に記す。第1層はもっとも厚く堆積している。この層の上面は近世・近代の遺構と接しているために、第1層出土遺物の中には近世の遺物が混入している。特に1d層とした暗茶褐色土は厚く、この中には基盤層のブロックが数多く含まれており、あきらかに人為的な埋め戻し土である。第2層は粘質の強い土層で全体に薄く堆積しているが、乾燥すると硬くしまり、色調もまったく異なって明確に第1層と区別できる。この第2層の上面は比較的凸凹しており、その後断面観察から故意にS-4遺構全体に皿状に貼られたものであると判明した。この第2層の上面(この面をAラインと呼ぶ)を精査した結果、まったく掘り込まれた遺構はなく、この第2層はS-4遺構全体を埋める前に、粘土を貼って下部の遺構を封じたものと考えられる。この第2層上面の凸凹を丹念に露出させると、第2-10図の矢印で示したS-4遺構の南側に階段状の段差が2段ほど出現した。断定はできないが、S-4遺構を第2層で封じる際の中央に下りるための施設であろうと推定される。おそらく柱SP28を抜いたり、土坑SK16を掘るためにそこを通ったものと思われる。掘立柱建物SB1に近接する位置にあることも示唆的である。



第2-2表 S-4遺構内層序相関図

この第2層を除去するとその層で封をする直前の遺構が見つかる(第3層上面=Bラインと呼ぶ)。とくに中央部で発見した土坑SK16は断面観察の結果、第2層と同質の土で埋め戻されていることが判明した。つまり第2層土で封をする際に掘られた土坑であるといえる。また同じく中央に近い柱穴SP28の抜き取り痕がこの第2層土と接し、その直前と推定される。その下の第3層と第4層は漸移的で、面あるいはラインとして明確に区別することができない。第3・4層が堆積する期間を見積もると、須恵器型式でTK43型式からTK217型式までの約半世紀ほどであるから、その間にわずか10～20cmほどの第3層と第4層が堆積したものである。その堆積中に15箇所ほどの土坑が、最初に掘られた柱穴SP28を取り巻くように特に南側を中心に、掘りこまれていく。その間には各土坑間に二度以上の切りあい関係があるので、同時に掘られることは少なかったものと考えられる。その中で、土坑SK17とSK29はS-4遺構をはみ出すように、第4層土が堆積した後の第3層堆積中に掘りこまれている。後述するような土器の出土状態から見て、いずれの土坑も単なる廃棄土坑ではなく、なんらかの祭祀儀礼に使われた焼土や土器を廃棄されたもので、それらを埋納するために掘られた土坑であると考えられる。さて第4層を除

※第2層除去後



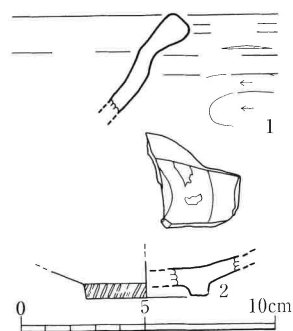
第2-10図 S-4上層 (1/80)

去したS-4遺構当初の皿状の掘り窪みを精査すると、中央部にほとんど出土遺物がない柱穴SP28が掘られていた。この遺構は後述するように、本来四方に支えを入れた1本柱の柱穴と考えられる。この最初にほられた柱穴SP28と最後に封をする直前に掘られた土坑SK16の2つの遺構には出土遺物がほとんどないか、ほかの祭祀土坑に比べて少ないのは、あきらかにほかの土坑とは遺構の性格が異なっているためと推定される。すなわち柱穴SP28は本来S-4遺構のほぼ中心にトーチンポールのように立てられた1本柱であり、その周囲に以後半世紀にわたって祭祀土坑が掘られていくのである。そして最後にこのS-4遺構を閉じるに当たって、SP28の柱穴を抜き取り、土坑SK16を掘りこんで何らかの最終的祭祀行為をおこない、第2層の粘土を貼って封じ、その上に第1層土で埋め戻したものと考えられる。

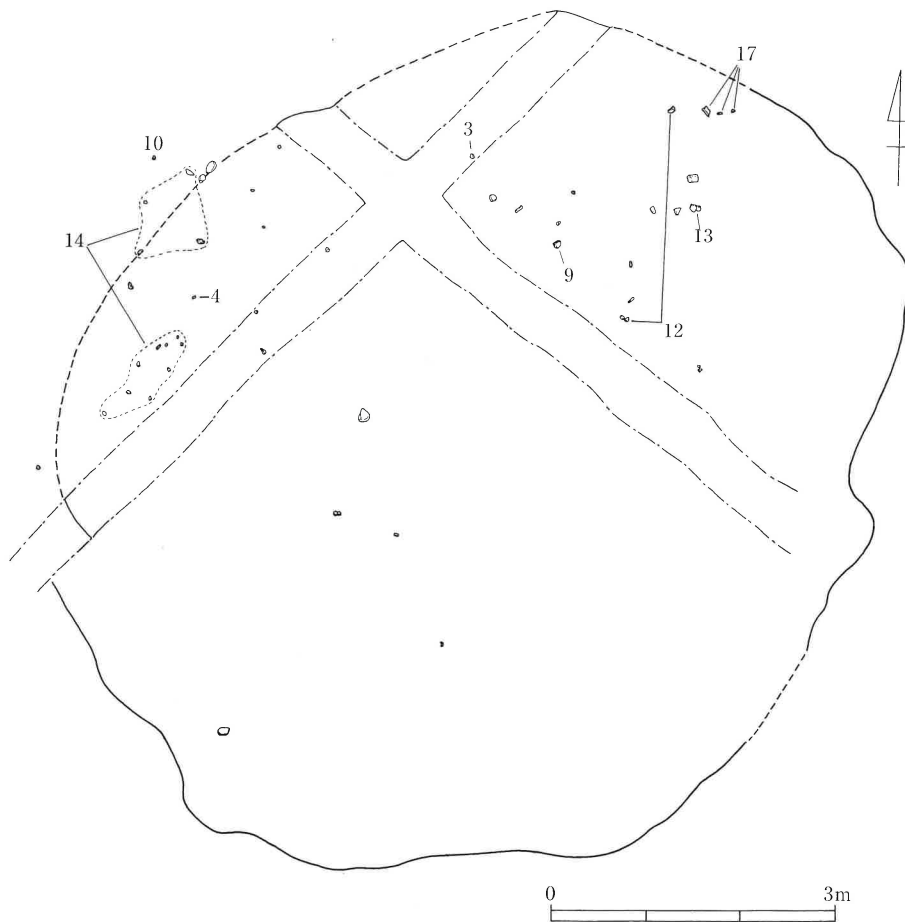
ちなみにS-4遺構が作られたのは、須恵器TK43型式が使われていた6世紀末、祭祀が終了したのはSK217型式が使われるようになった7世紀中ごろと推定される。

上層 (第2-10・11図)

第1層出土遺物 1は瓦質土器の鍋の口縁部片。胴部外面は横方向のヘラ削りで調整し、全体に煤が付着する。15ないし16世紀の製品である。2は肥前内野山窯系



第2-11図
S-4第1層中出土遺物
(1/3)

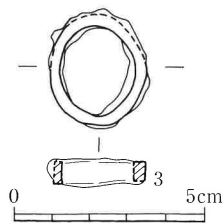


第2-12図 S-4中層 (1/80)

陶器の緑釉皿。外底部は露体、内面には蛇の目釉剥ぎの上に胎土目がのこる17世紀末から18世紀前半の製品である。1と2はいずれも上部から混入と推定される。

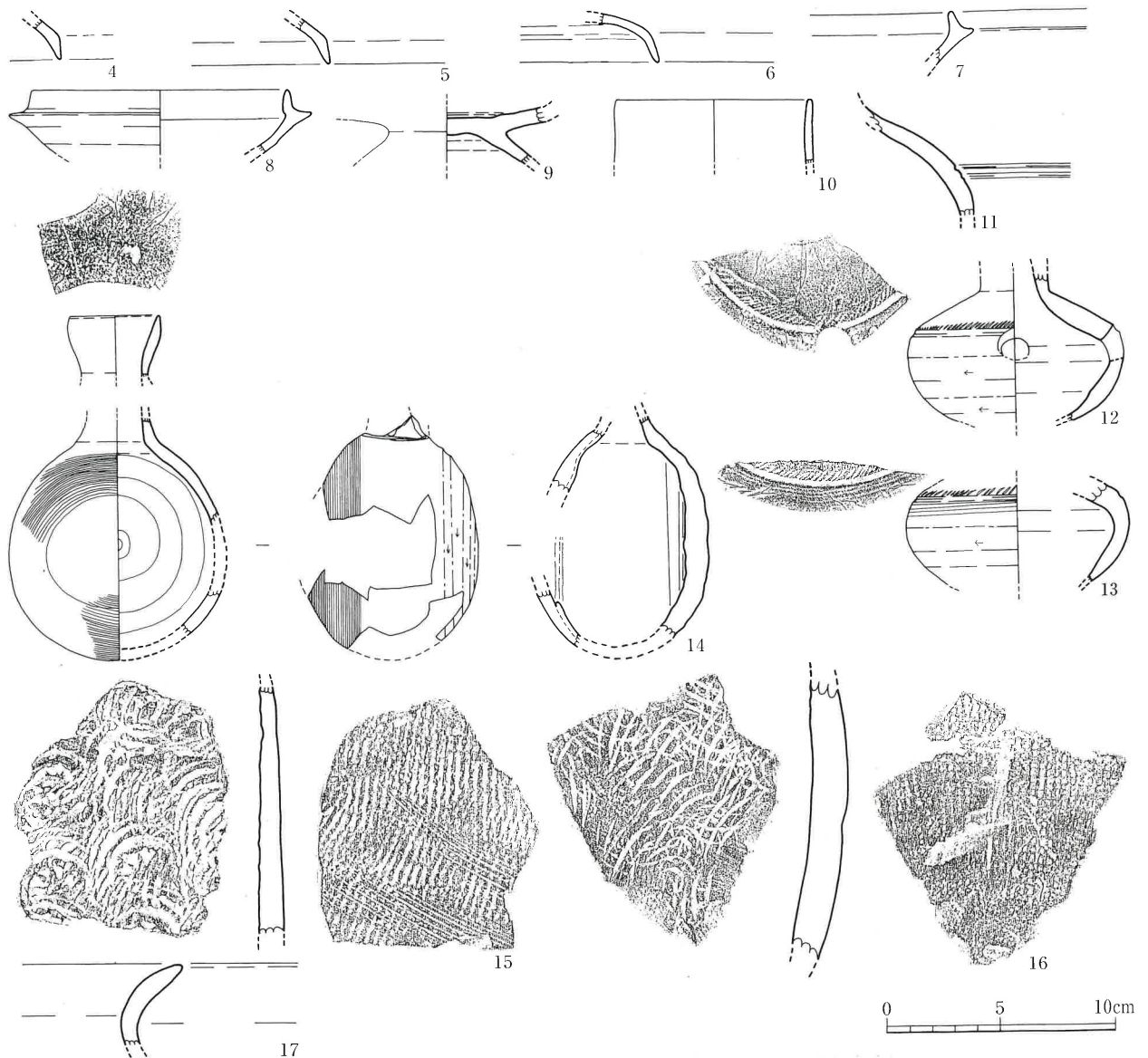
中層 (第2-12図)

第2層出土遺物 (第2-13図) 3は鉄製の輪、ややゆがんだ長円形で、長軸3.2cm、短軸2.6cm。断面は長方形で、重さ5.4g。錆の剥離状態をみると、新しい時代の製品が偶然混ざりこんだものとも考えられるが、3層から2b層で確実に出土していることから7世紀のものである可能性も残る。



第2-13図 S-4第2層中出土遺物 (1/2)

第3層出土遺物 (第2-14図) 4は須恵器坏蓋の口縁部片、生焼けである。5と6はいずれもTK209型式の須恵器坏蓋の口縁片。7と8は同じくTK209型式の須恵器坏身口縁片。8は口径11.2cm、受部径13.2cmに復元でき、体部外面にヘラ削りが残り、口縁には1箇所故意に打ち欠いたと思われる割れ口が残る。9は短脚の須恵器高杯の接合部片。10は須恵器の直口壺の口縁だろうか。復元口径8.6cm。11は須恵器の生焼けの壺胴部片。胴部外面に2条の沈線がめぐる。12と13は同一個体と観察される須恵器の甕胴部片。外面下半はヘラ削りで整形し、肩部に1条の太い沈線をめぐらし、その上に細かいカキ目を施し、カキ目工具で刻み目を入れている。破片の一部は第1層でも出土している。14は小型の須恵器提瓶。口縁と体部は接合していないが、同一個体である。肩部に×印のヘラ記号を施す。口径は3.4cmに復元でき、片面はカキ目、片面は回転ヘラ削りで仕上る。胴部径は約9.6cm。破片は第3層内のみで発見された。15と16は須恵器の甕胴部片。ともに内面に同心円の当て具痕、外面に平行タタキ痕とカキ目が残る。17は図示できる唯一の第3層出土の土師器の甕口縁部である。稜をもたずに外反する。ほかに大型の肩部片が出土している。

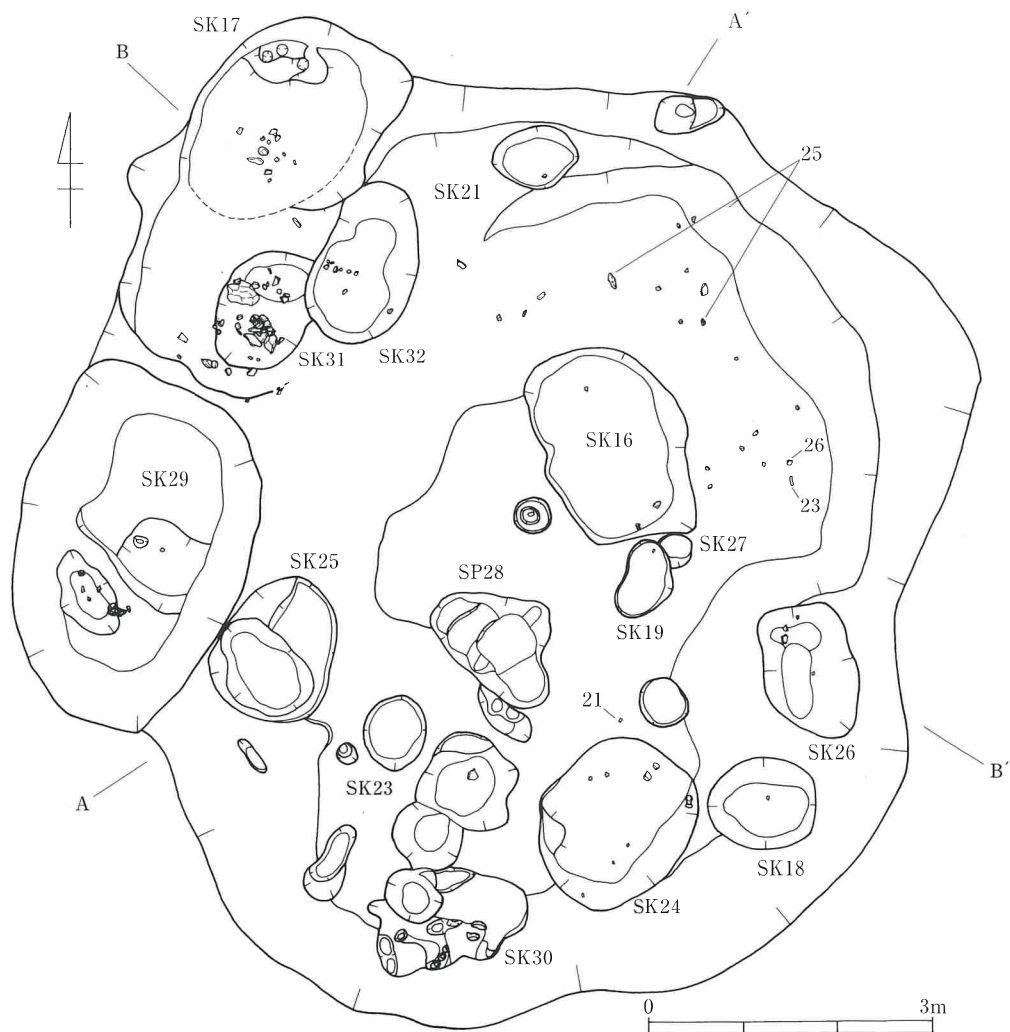


第2-14図 S-4第3層=中層出土遺物 (1/3)

下層 (第2-15図)

第4層出土遺物 (第2-16図) 18は須恵器の蓋の口縁部で受け部は小さい。19はTK43型式に当たると推定される須恵器坏身口縁部で、薄いつくりであるが、外面には回転ヘラ削りが見えない。20は須恵器坏身片。21は外面に浅い段の残る須恵器台付き鉢の口縁部で、桃崎氏の研究(註)によれば、須恵器TK209型式以後に出現する型式とされている。第4層除去後に発見されたものである。22は須恵器の甕の胴部片。肩部に2条の沈線が残る。胴部の復元径は12.9cm。なお22は第4層ではなく遺構検出時の第1層ないし第2層中に遺物である。訂正しておきたい。23は須恵器提瓶片。カキ目が残る。24は須恵器甕の口縁部片。端部直下に三角の突帯がめぐる。25は須恵器甕胴部片、外面に格子目のタタキ痕とカキ目が残る。破片は第2層と第3層にも散乱している。26は土師器の甕口縁部である。稜をもたずに外反する。胎土は精良で、砂粒は少ない。17と同一型式である。27は出土した層は不明の須恵器高坏脚端部片。28は縄文早期の鋳形鍬の完形品。偶然残留した遺物である。

註) 桃崎祐輔2006「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学先史学考古学研究』17、筑波大学人文社会科学研究所歴史人類学専攻



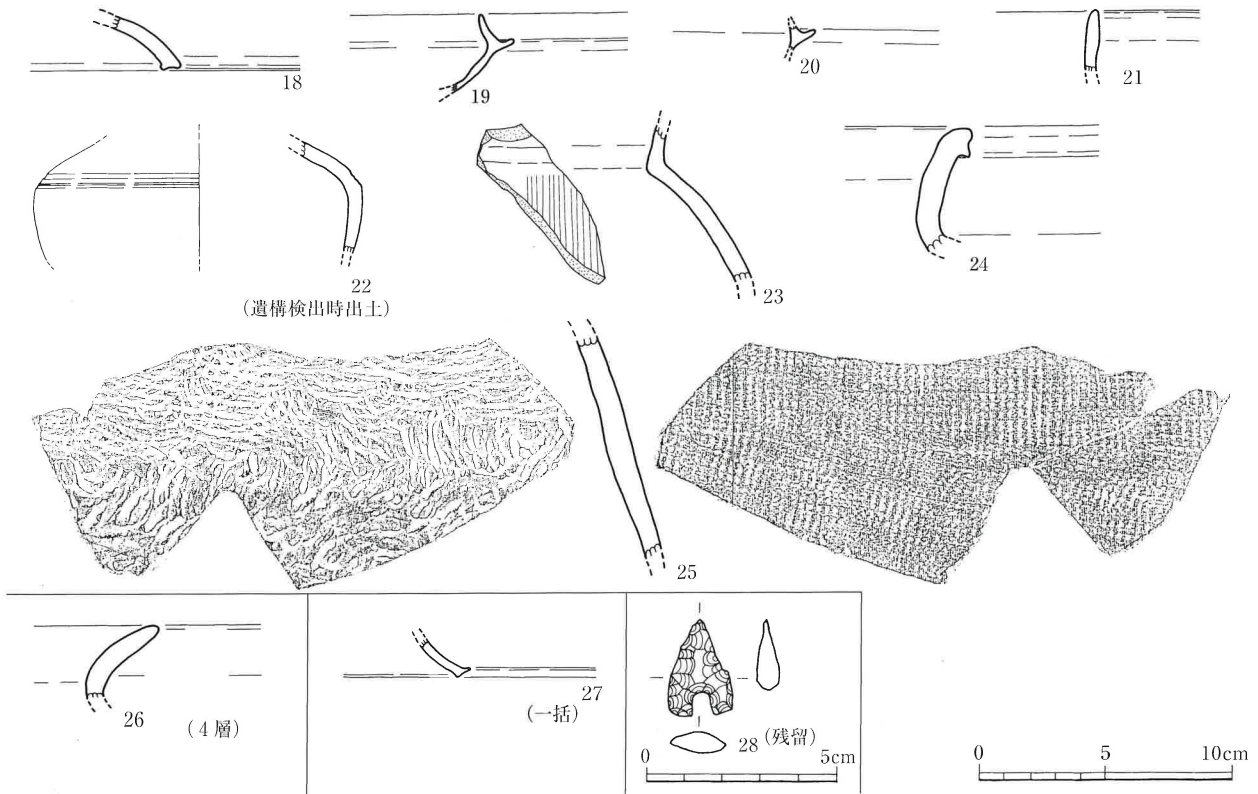
第2-15図 S-4下層 (1/80)

つぎにS-4遺構の内部に掘りこまれた遺構を記述するが、遺構の配列はおおむね新しいものから古いものの順でおこなう。

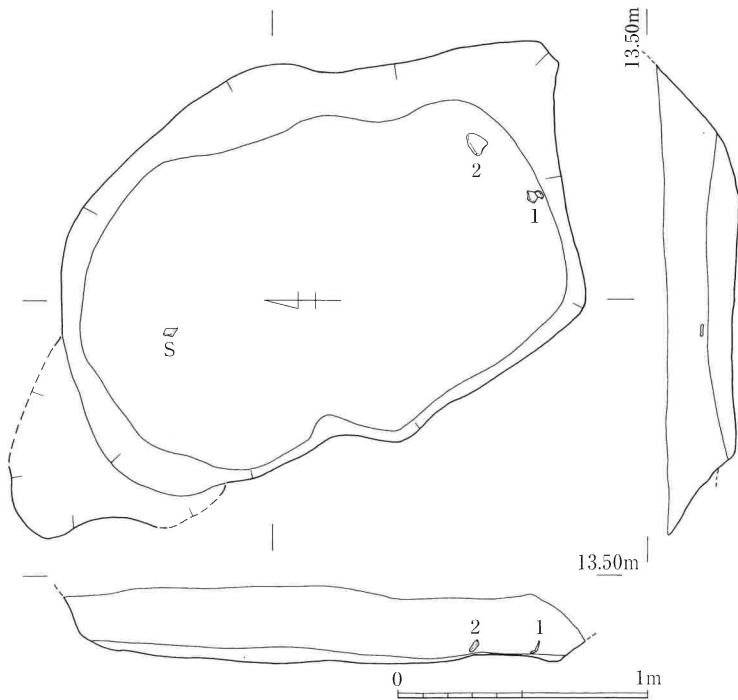
SK16 (第2-17・18図)

S-4遺構の第2層除去後に検出した不整長方形の土坑である。底面は平坦であるが、一部に鋤で掘った痕跡のような凸凹が観察された。長さ約2.1m、幅約1.5m、深さ約0.3m。S-4遺構の第3層を切って第2層土を被覆する直前に掘りこまれ、人為的に埋め戻されたと考えられる。内部からは数点の土器片が小片で混ざりこむ状態で出土している。第2-9図断面図にみられるように埋土は10層に分層可能であるが、基本的にすべて第2層土のバリエーションであり、北西方向から埋土が舌状に堆積している。つまりS-4遺構の第3層を切って掘りこまれS-4遺構の第2層土で埋め戻されていることになる。出土遺物はいずれも碎片で少なく、埋没時に混ざりこんだもので、意図的な廃棄ではない。

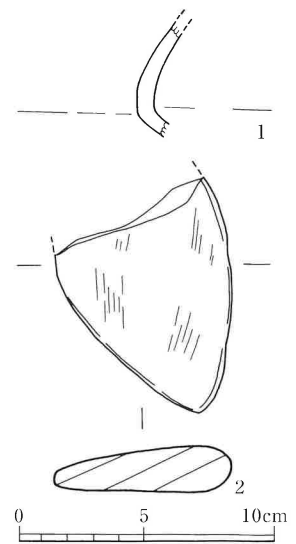
1は須恵器提瓶の頸部片である。2は一部を欠いた安山岩の川原石を利用した磨り石。被熱している。ほかに同一個体の土師器壺の破片が2点あり、1点は精良な胎土に沈線が施されている。



第2-16図 S-4第4層=下層出土遺物 (18~27=1/3、28=1/2)



第2-17図 SK16 (1/30)



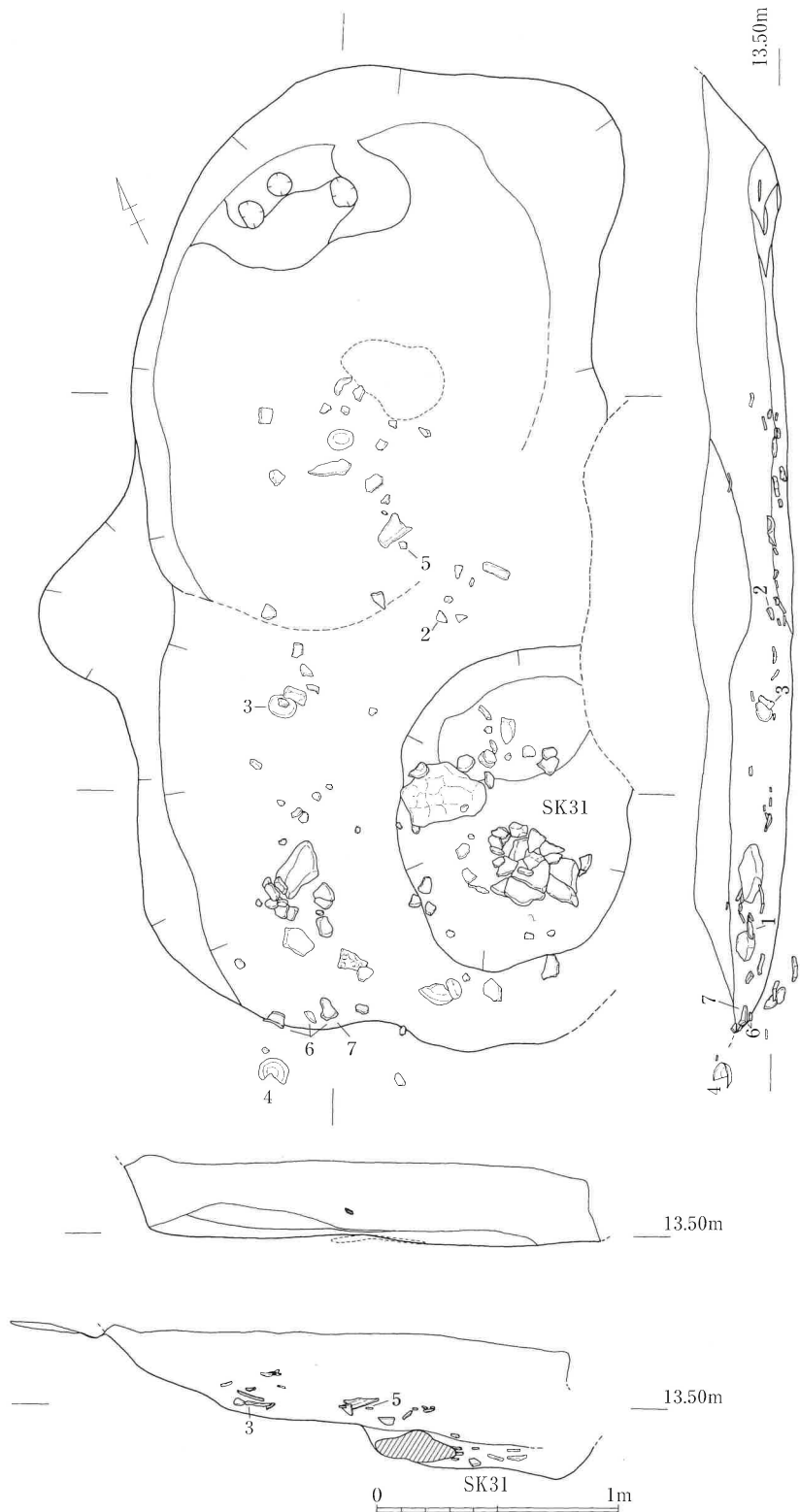
第2-18図
SK16出土遺物 (1/3)

SK17 (第2-19・20図)

S-4遺構の第3層除去後に検出した長方形の土坑である。断面は箱型である。土坑SK29と土坑SK32をきり、土坑SK31に切られる。埋土は上下二層からなり、2つの土坑が切りあっているようにも見えるが調査中に分離することはできなかった。長さ3.0m、幅1.5m、深さ0.25m。第2層に多量の遺物を廃棄した上で第1層で埋め戻しており、祭祀土坑といえる。1層中では外側から廃棄されたような流れ込み状態で大量の炭焼土・被熱礫が混在し、その中には3や4の高坏のように故意に打ち欠いたり破碎して廃棄したような遺物が多く、4の高坏のように焼ひずみで実用に供せない遺物もあり、祭祀用に用いられたと考えられる。あとで述べる土坑SK29でも同様であるが、祭祀に利用された須恵器のなかにTK43型式のものがかかなり含まれている。比較的長期間使われたものが廃棄されたものと考えられる。

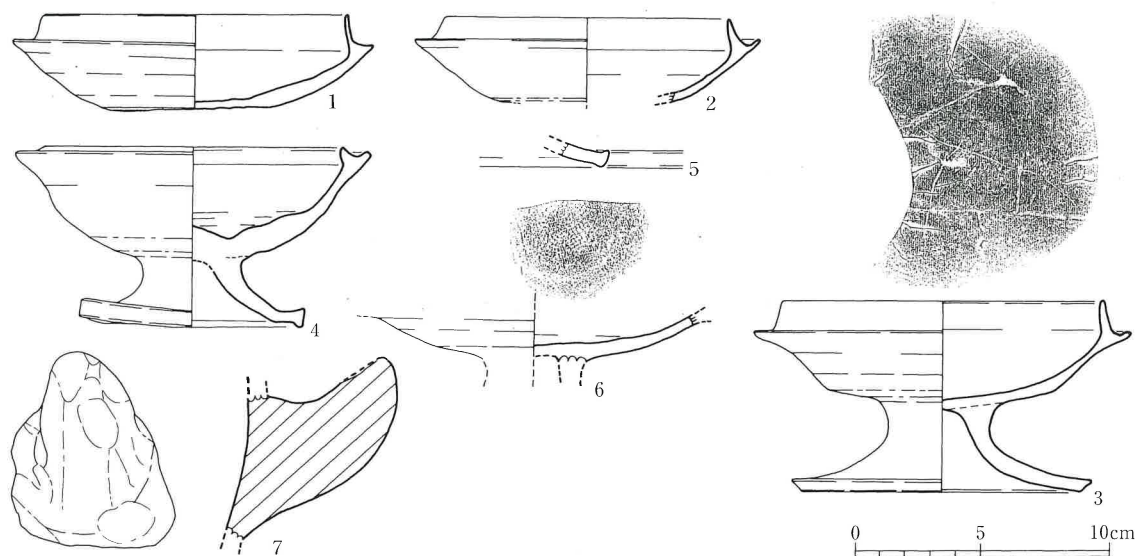
1は須恵器TK43型式の須恵器坏身で、数点に割れて出土し、土坑SK17のほか土坑SK29からも破片が出土している(接合資料10)。復元口径12.1cm、受け部径14.2cm、器高3.2cm、口クロ右回りで受け部直下まで回転ヘラ削りが施される。薄手のつくりで焼成は甘く灰白色である。

2もTK43型式の須恵器坏身口縁片である。薄手であるが1とことなり回転ヘラ削りは底面にのみ施される。復元口径は11.2cm、受け部径13.4cm。3はTK43型式の坏身に短い脚をつけた高坏。坏内面には×印のヘラ記号が施されている。復元口径は12.8cmで、受け部径15.0cm、器高7.5cm、底径11.8cm。口縁には故意に打ち欠いた痕があり、破片の半分は正位に置かれたように出土した。数点に破碎して出土したが、破片はいずれも土坑SK17内で出土し、1点のみS-4遺構の第2層上面で出土した。4の須恵器高坏も台坏の鉢といってよい形態であ



第2-19図 SK17 (1/30)

るが、坏身はTK209型式ないしTK217型式にあたり、脚部も矮小化しており明らかに3より後出の型式である。一番大きな坏部の破片が正位でおかれ、ほかの脚部以下の破片は土坑SK29内に散乱していた。受け部には重ね焼の痕跡があり、口縁には1箇所打ち欠きの痕がある。破片は土坑SK17とSK29に大きく分かれて出土した(接合資料2)。口径11.8cm。受け部径14.0cm、器高7.1cm。坏外面には回転ヘラ削りが施され、脚部は分割成形されて接合されている。焼けひずみが激しく、脚部を故意に追って廃棄されているところからみて、祭祀用に用意されたものと推定される。5は3や4と同一形式の須恵器の脚端部片。6は須恵器高坏の破片で、内面に布痕のような痕跡が残る。7は土師器の甑把手である。ほかに須恵器の甕、やけて固まった家屋の壁土と考えられる粘土塊、土師器の甕の破片が出土している。



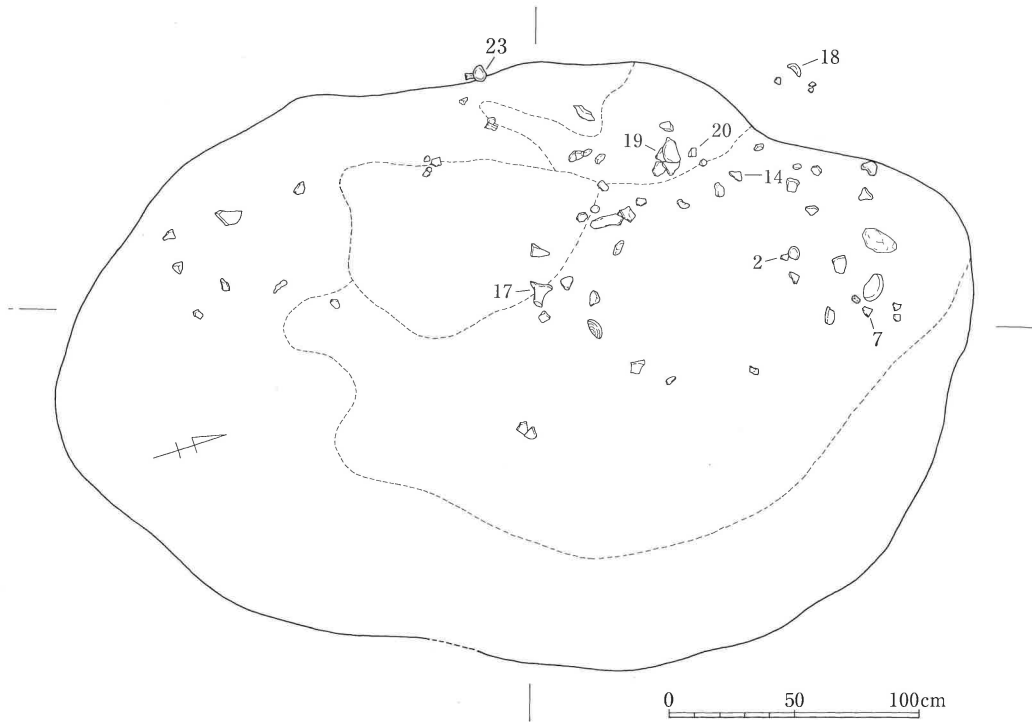
第2-20図 SK17出土遺物 (1/3)

SK29 (第2-21~29図)

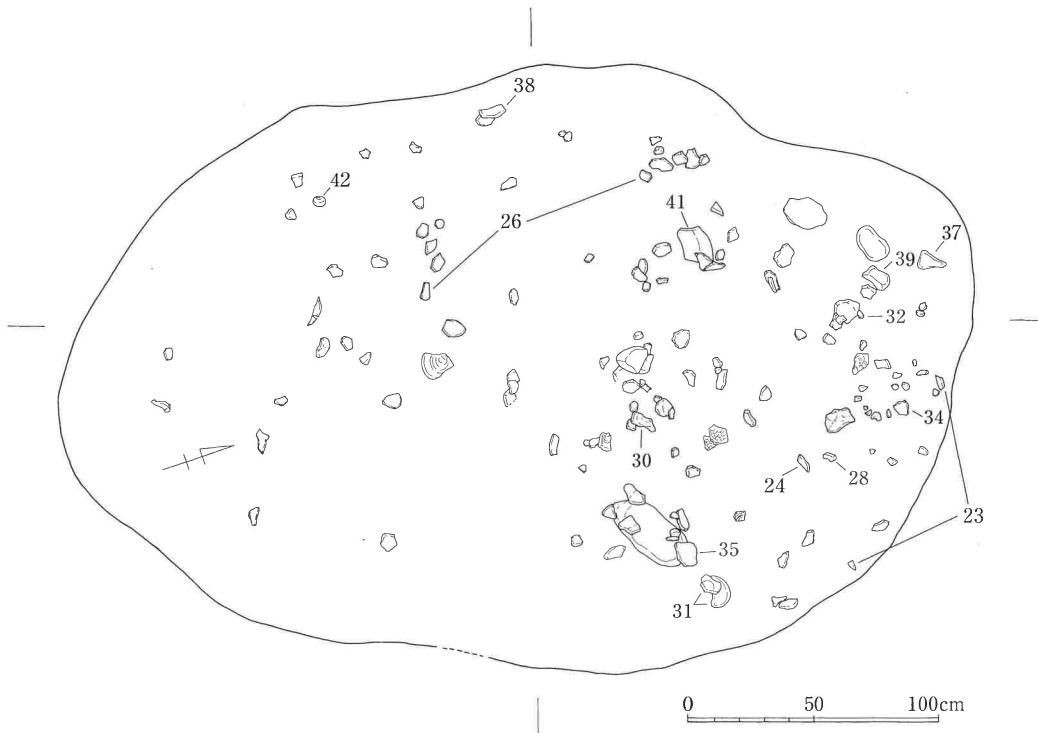
S-4遺構の第3層除去後に検出した楕円形の土坑である。土坑SK25をきる。長さ3.5m、幅2.7m、深さ0.7m。断面も半円形である。埋土は大きく上中下三層からなる。底面に多数廃棄されていた須恵器の甕の破片と土坑底面の間には隙間が残っており、調査した際に驚かされた。このことは土坑SK29掘削直後に須恵器甕の破碎との廃棄が行われたことを物語っている。底部は平坦ではなく二つの窪みがあるが、断面層序を観察する限り二つの土坑が重複しているわけではない。底面が平坦でないことから廃棄することを目的に掘られた穴である。甕の破片は南の方角から流れ込んだような状態である。

底面に廃棄された須恵器の甕2個体分の破片がほぼ第10層のなかに堆積している。この層は黄色土の粘質土で、須恵器を埋めるための土である。その上に大量は土器片などを含む炭焼土の多い第9層、炭焼土の少ないきれいな第8層、汚れた第6・7層、きれいな第4層、汚れた第2・3層と交互に廃棄され、汚れた層の中には多量の土器や焼土、灰層の集積が混じっている。しかし焼土は多いがそこで直接火を焚いた痕跡はない。本来何らかの祭祀行為に使われた須恵器の大甕を破碎してそれを廃棄するための土坑としてSK29は掘られ、そのあとで埋め戻す際に周囲で焼かれた廃棄物をいっしょに埋め戻されたものと推定される。また遺物の中には、最上層と中層から完形の石製紡錘車出土しており、須恵器甕の祭祀との深い関係をうかがわせる。埋没後はS-4遺構の第3層が堆積しているが、土坑SK29に廃棄された土器の破片がS-4遺構の第3層中から発見されるので、S-4遺構の第3層堆積中に掘りこまれた遺構である。廃棄物の堆積状態は西側から廃棄された状況を示し、それは土坑SK17と同じである。

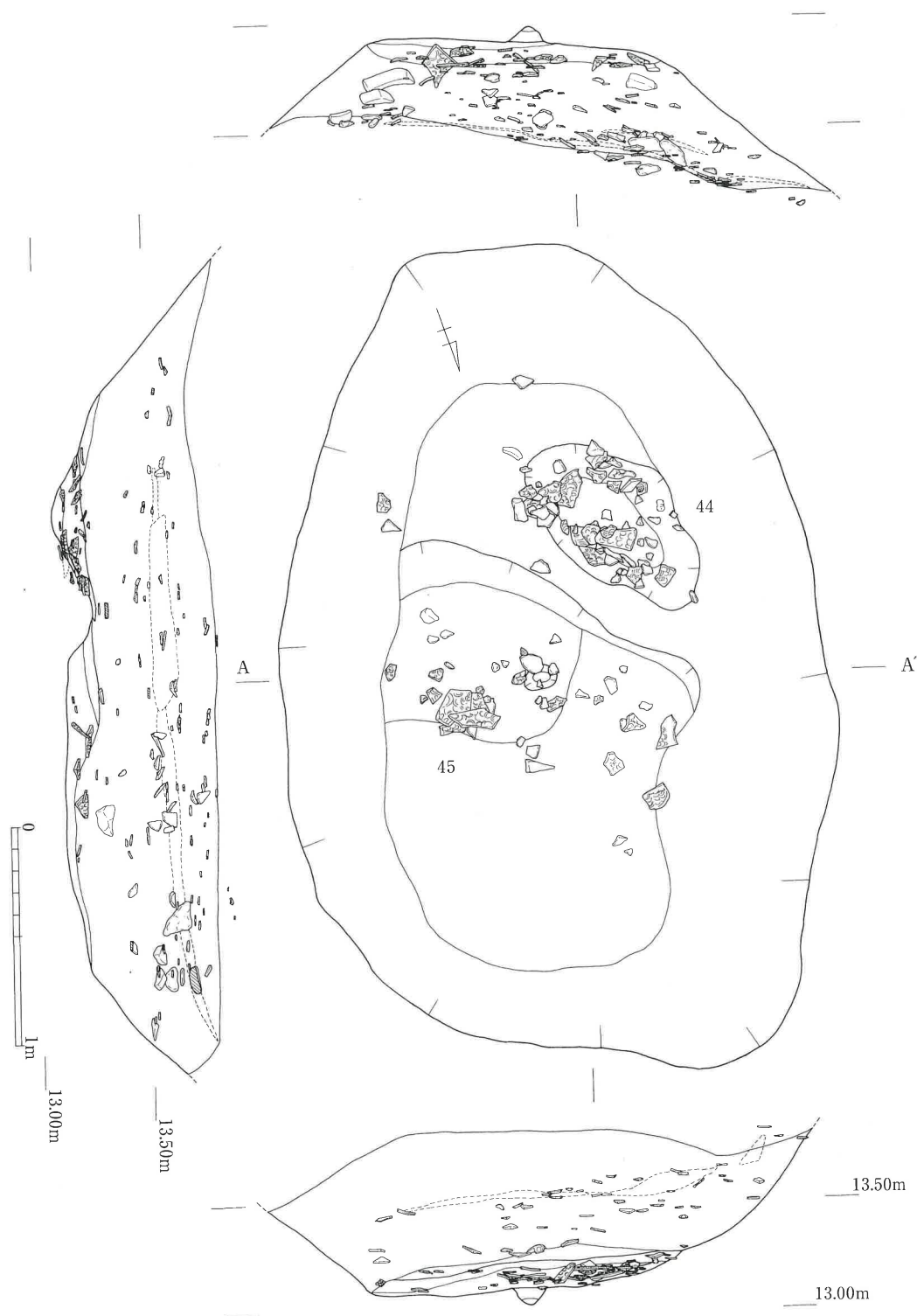
須恵器のなかには17や30、31のように打ち欠いたり、破碎して伏せたりしたものがああり、土師器の多くは被熱していることと考え合わせても、甕を埋設する祭祀行為のあとと考えられる。



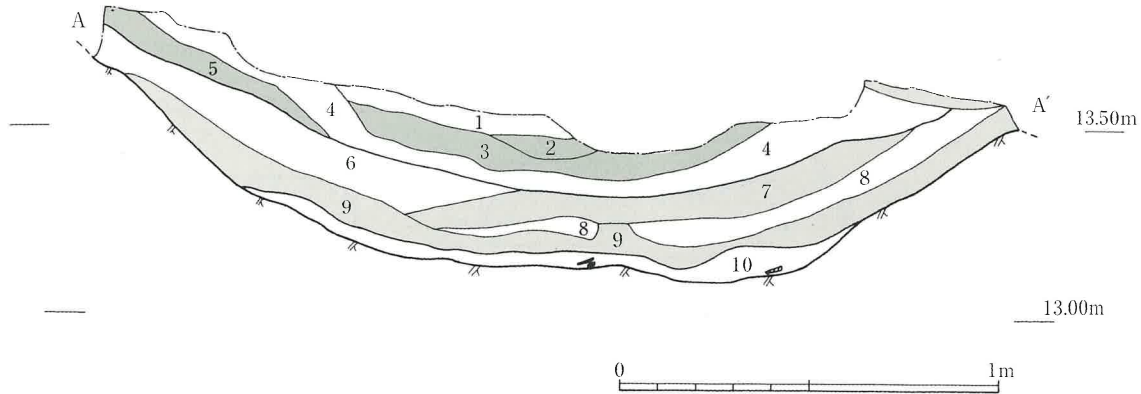
第2-21図 SK29上層 (1/30)



第2-22図 SK29中層 (1/30)



第2-23図 SK29下層 (1/30)

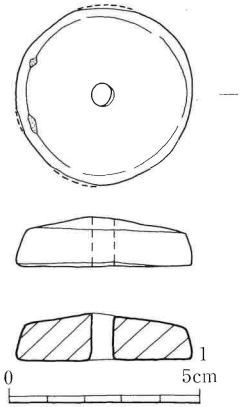


第2-24図 SK29断面土層図 (1/20)

SK29層序

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
1層	茶褐色軟質土（土器片や5～10ミリ大の炭焼土を含む）	—	上層とする
2層	黄色土粘土ブロック混じり炭焼土層（1cm大の炭片と2～3cm大の焼土ブロックからなる）	焼土廃棄層	
3層	炭焼土層（1～2cm大の炭片と2～3cm大の焼土ブロックが充満）		
4層	暗黄褐色粘質土（部分的に1cm大の炭焼土を含む）	—	
5層	暗色炭焼土層（1cm大の炭、1～2cm大の焼土ブロック多く含む）	—	
6層	暗茶褐色軟質土（1cm大の炭、1～2cm大の焼土ブロック多く含む）	—	下層とする
7層	6層土と4層土が混じった軟質土	—	
8層	暗黄褐色粘質土（炭焼土を含むが少ない）	4層と同じ	
9層	黒褐色土（1cm大の炭片多いが焼土少ない）	須恵器破片集中層、土師器ほとんどなし。	
10層	暗黄褐色粘質土（炭焼土なし）	—	

最上層出土遺物（第2-25図） 1は18トレンチ試掘時にS-4遺構を発見した際に出土した完形の滑石製の紡錘車である。土坑SK29の最上層に含まれていたものと推定される。径4.6～4.7cmの円形で断面は中心の穿孔部がやや厚い台形をなし厚さ1.3cm。重さ43.8グラムで、全面をよく研磨している。



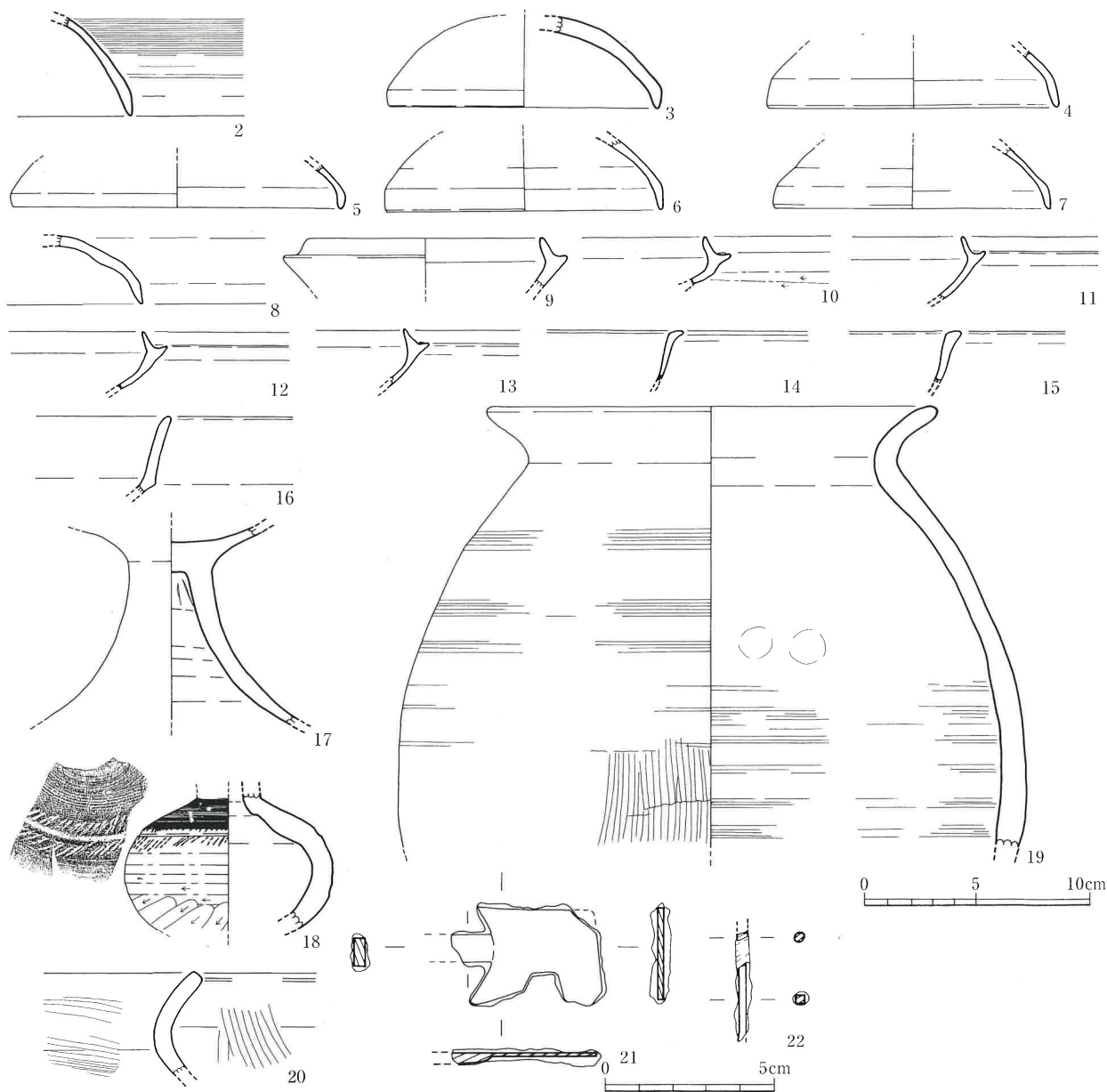
第2-25図 SK29最上層出土遺物 (1/2)

上層出土遺物（第2-26図） 2は須恵器坏蓋の口縁部片。端部は丸く収め外面にはカキ目がめぐる。3～8も須恵器坏蓋でいずれもTK209型式にあたるものと考えられ、黄灰色を呈する。3は復元口径12.0cm、4は口径13.0センチ、5は口径14.6センチ、6は口径12.4cm、7は口径12.2cm、破片のかたわれは土坑SK17で出土した(接合資料3)。8にはわずかに回転ヘラ削りの痕がみえる。9～13は須恵器の坏身の口縁部であり、いずれもTK209型式に相当する。いずれも坏蓋同様灰黄～灰色を呈す。9は復元口径10.4cm、受け部径12.6cm。11と12は同一個体である。14と15は器種不明の須恵器の端部片。16は須恵器高坏の口縁部片。17は須恵器高坏の頸部。長脚だが透かし穴はない。口縁部と脚端部はすべて故意に打ち欠かれたような割れ口をなしている。18は須恵器の甕体部片、肩部に1条の沈線をめぐらしその上にカキ目を周回させ、同じ工具で刻み目状の文様を入れる。胴部中央は回転ヘラ削り、外面底部は手持ちヘラ削りで成形している。

以下は土師器。19は土師器甕の上半部である。頸部の稜は鈍く、長胴である。復元口径19.2cm。内面は指頭圧痕、外面はタテハケで調整しそのうえから内外ともカキ目状の回転利用のヨコハケを施す。潰れた状態で土坑SK29に廃棄されていた。20は土師器口縁で頸部は鈍くハケ調整が端部直下まで残る。

21と22は鉄器である。21は一部が欠損した用途不明の鉄器。長さ4.5cm、幅3.1cm。22は鉄鏃の茎部で接合材の樹皮が残る。

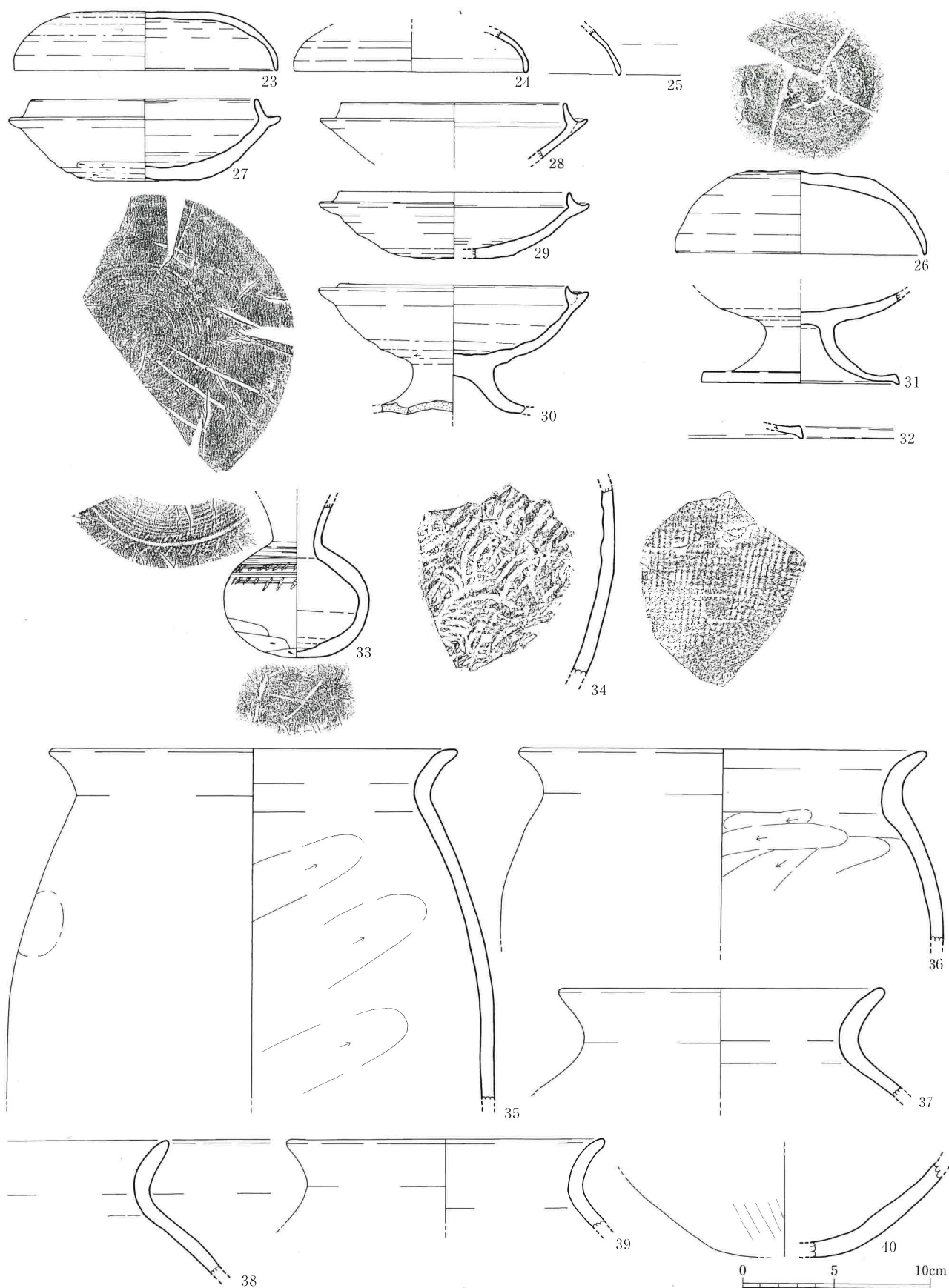
ほかに上層からは土師器の甌の破片が出土している。



第2-26図 SK29上層出土遺物 (2~20=1/3、21・22=1/2)

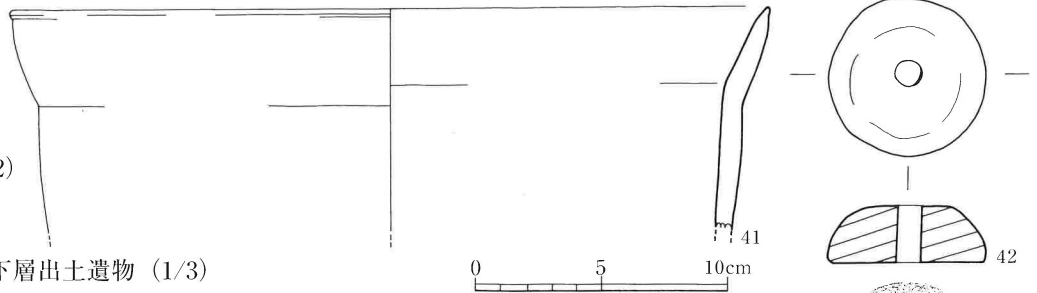
中層出土遺物 (第2-27・28図) 23~34は須恵器である。23は口径14.0cm、器高3.1cmの須恵器坏蓋。ロクロ右回転の回転ヘラ削りが広く施されている。土坑SK17にも破片が出土している(接合資料11)。TK43型式にあたるか。24は復元口径12.4cmの須恵器坏蓋。25も生焼けの須恵器坏蓋片。26はヘラ切り未調整の須恵器坏蓋。口径13.4cm、器高4.4cm。ロクロは右回転。一部の破片は土坑SK17でも出土した(接合資料9)。型式はTK217に当たるとだろうか。27~29は須恵器の坏身、いずれもTK209型式にあたる。27は口径11.8cm、受け部径14.4cm。ロクロは右回転で、きれいな回転ヘラ削りで底面を調整している。焼成は良好で、外面に三本線のヘラ記号が施される。破片の一部は土坑SK17から出土した(接合資料5)もので、TK43型式にあたると思われる。28は口径12.0cm、受け部径14.3cmの須恵器坏身で、TK209型式に相当する。29も口径12.2cm、受け部径14.4cmの坏身であるが、底面はヘラ削りを施さないヘラ切り未調整である。破片の一部は土坑SK17から出土した(接合資料6)もので、TK209型式~217型式に相当する。30は破碎された後土坑SK29で伏せて置かれた状態で発見された須恵器の台付坏である。脚端部が花卉状に打ちかかっている。口径12.2cm、受け部径14.4cmでTK209型式~217型式に相当する。一旦回転ヘラ削りを施して坏身として成形した後脚部を接合している。割れた破片は土坑SK17

からの出土片と接合した(接合資料1)。31はおなじく須恵器台付坏の下半部。低脚である。口縁全体を打ちかか
 れている。32は須恵器の脚端部片。33は須恵器の甕で口縁部が失われている。胴部最大径は7.8cmと小型である。

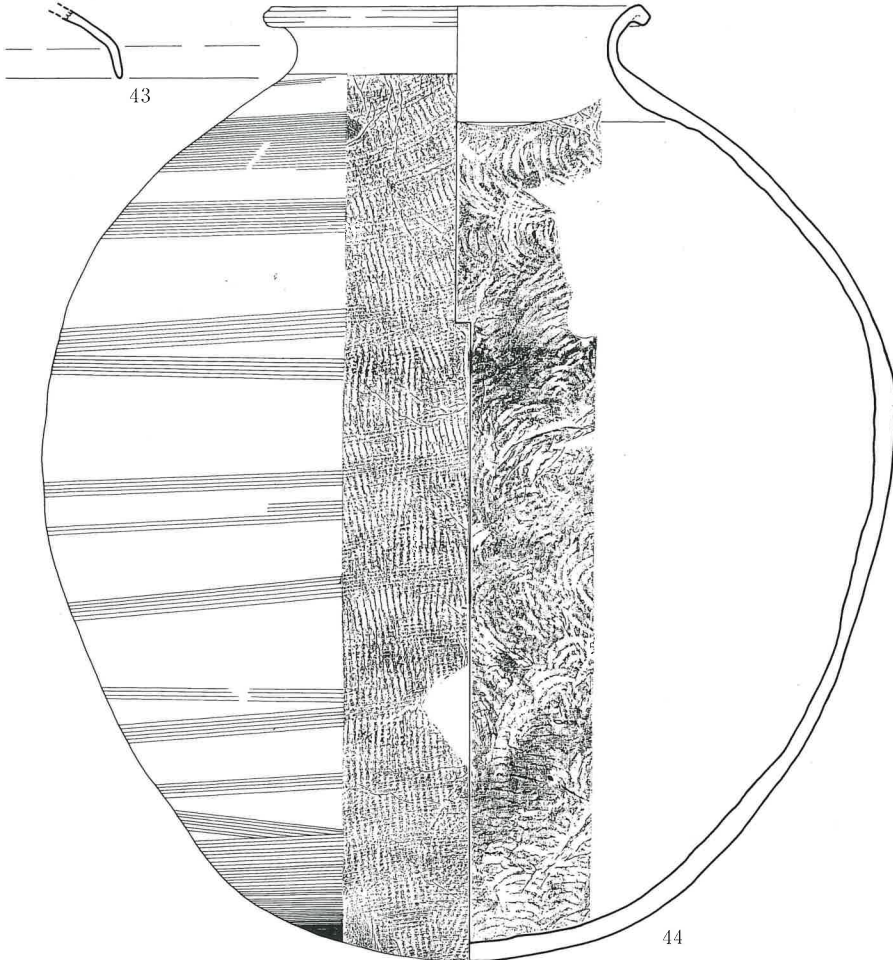


第2-27図 SK29中層①出土遺物 (1/3)

第2-28図
SK29中層②
出土遺物
(41=1/3、42=1/2)

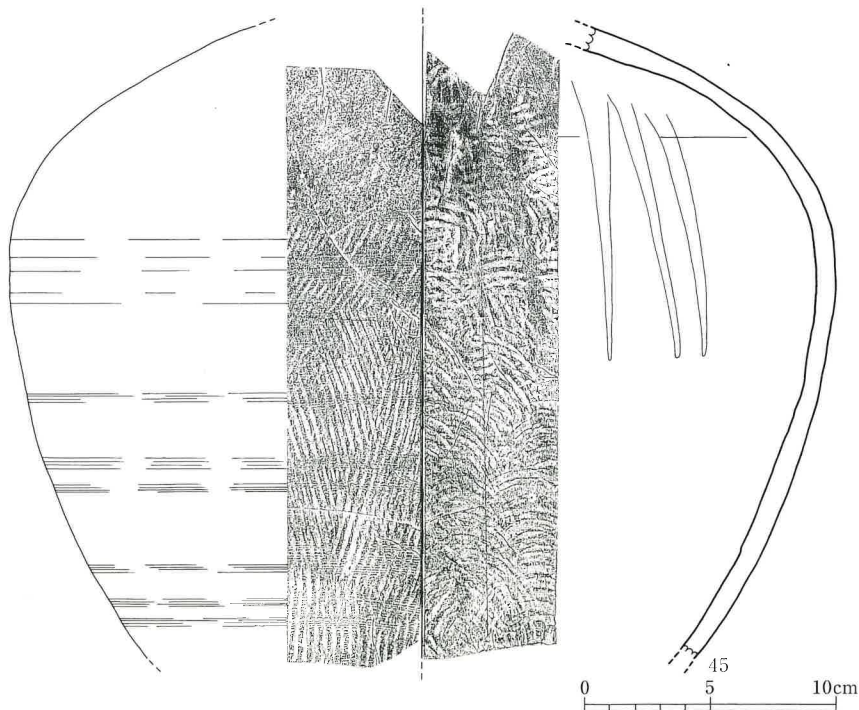


第2-29図 SK29下層出土遺物 (1/3)



肩部に1条の沈線をめぐらしその上にカキ目を周回させ、同じ工具で刻み目状の文様を入れる。外面底部は手持ちヘラ削りで成形している。底部外面にゆがんだH字形のヘラ記号が施される。焼成は甘く黄灰色を呈す。破片の一部は土坑SK17から出土した(接合資料7)。**34**は須恵器の甕胴部片、外面は格子目タタキにカキ目をほどこす。

35から41はS-4遺構中層出土の土師器である。**35**は長胴の土師器甕で頸部の稜は不明朗で口縁は緩やかに外反する。口径21.2cm。胎土には砂粒が多く、外面はナデ内面はヘラ削りで調整している。外面には広く煤が付着し、二次的加熱特有の赤色への変色が見られる。**36**は35と同一個



体と推定される土師器の甕で口径21.1cm、調整は同じである。土坑SK29の壁に張り付くように出土している。35と36の破片は十数片にわかれて出土したが、いずれも土坑SK29の中層で発見されている。37も土師器甕の口縁部で、口径16.8cmとやや小ぶりである。38も甕口縁片、37によく似ている。39は小ぶりの土師器甕で口径16.6cmと37とほぼ同じ。40は土師器甕底部である。土坑SK17出土片と接合した（接合資料12）。41は浅鉢と形容したい土師器の口縁部、内外ともナデ調整でしあげる。胎土には大型の砂粒を多量に混ぜた煮沸用の鍋であろう。

42は滑石を加工した石製紡錘車。直径4.2cm厚さ1.5cm重さ41.9gの完形品である。全面研磨され、広いほうの片面には不定方向の線痕が多数入る。

ほかに中層からは土師器の甕や甑、焼けた壁土の破片が出土している。

下層出土遺物（第2-29図） 43は5cm大の破片の須恵器坏蓋口縁片で、TK43あるいはTK209型式にあたる。44は底面にしかれたように廃棄されていた須恵器の甕である。復元すると口径19.5cm。器高50.2cm。胴部最大径44.8cm。口縁は玉縁状に外に折り込んで成形する。胎土には砂粒が少なく、外面には平行タタキの上にカキ目が施されている、内面は同心円の宛て具痕が残る。破片は数十点に破碎されており、一部の破片がS-4遺構の埋没土中から見つかったものの、大多数は土坑SK29の最下層底面にしかれるように出土した（接合資料14）。45は同じく須恵器甕で口縁部と底部を欠く。胴部最大径は43.8cmで、44と同大で調整も同じであるが胴部の厚さが異なり別個体である。破片の大多数は土坑SK29から44の甕と混じるように底面から出土したが、その一部はS-4遺構の下層さらに掘立柱建物SB1の柱穴SP15の掘形埋土から出土している（接合資料13）。

SK19（第2-30図）

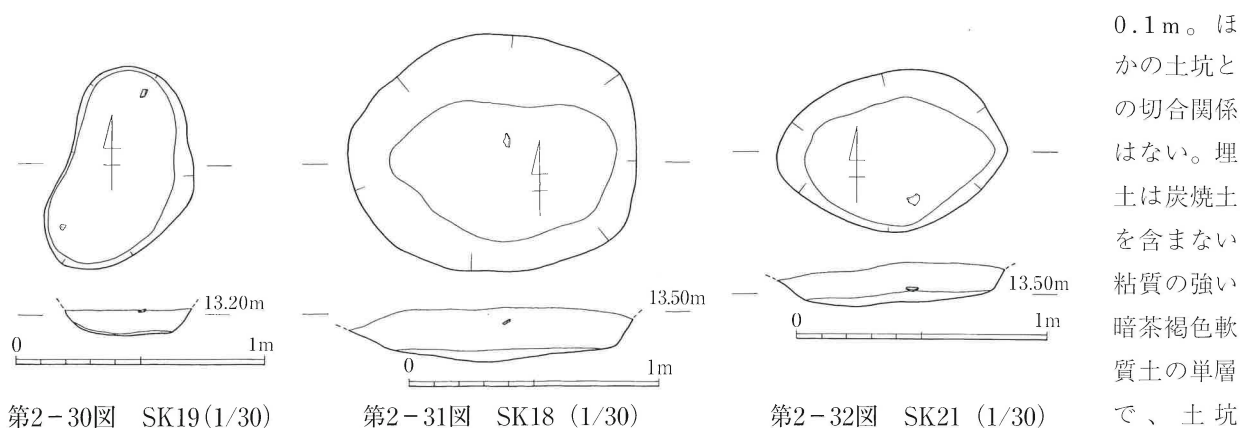
S-4遺構の第3層除去後に検出した不整長円形土坑で、断面は皿状である。長さ0.85m、幅0.5m、深さ0.1m。土坑SK27をさる。埋土は黄色土ブロックを含むが、炭焼土を含まないやや硬い暗黄褐色土の単層である。人為的に埋め戻された可能性高い。図示できる遺物はないが、須恵器の壺胴部と坏口縁の破片が出土している。そのうち壺片はS-4遺構の第2層出土の破片と同一個体である。

SK18（第2-31図）

S-4遺構の第4層除去後に検出した不整円形の土坑で、断面は浅い皿状である。長さ1.1m、幅0.95m、深さ0.2m。ほかの土坑との切合関係はない。埋土は炭焼土を含まない粘質の強い暗茶褐色軟質土の単層であるから、S-4遺構の第4層土で埋没していると考えられる。人為的に埋め戻した可能性高い。図示できる遺物はないが、須恵器の高坏の破片と土師器の細片1点ずつ出土している。

SK21（第2-32図）

S-4遺構の第4層除去後に検出した不整長円形の土坑で、断面は皿状である。長さ0.9m、幅0.65m、深さ

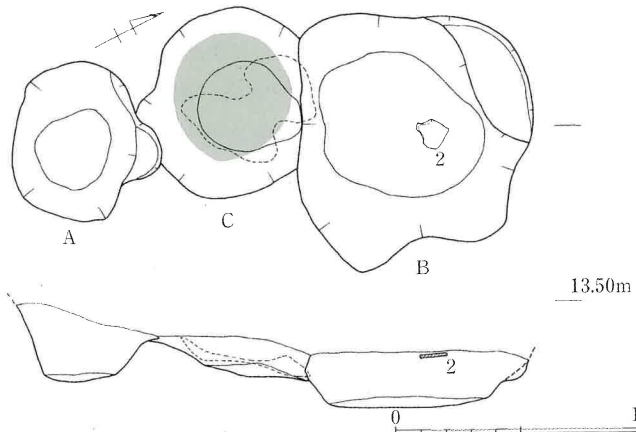


第2-30図 SK19(1/30)

第2-31図 SK18(1/30)

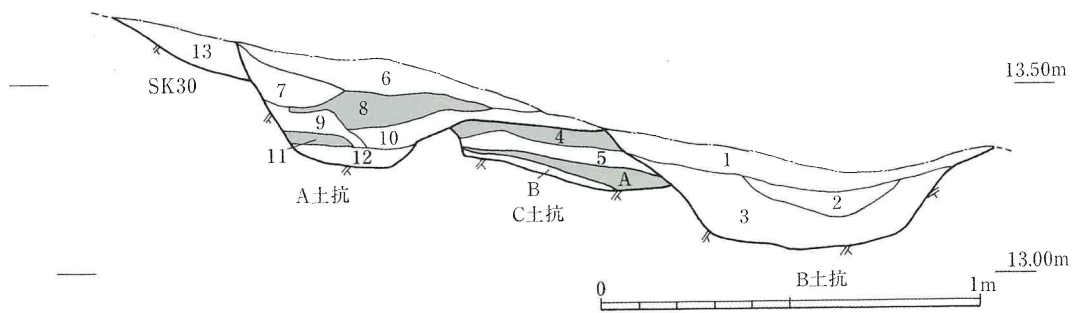
第2-32図 SK21(1/30)

SK18の埋土とまったく同一であるから、S-4遺構の第4層土で埋没していると考えられる。人為的に埋め戻した可能性高い。図示できる遺物はないが、土師器の細片が2点出土している。



第2-33図 SK23 (1/30)

SK23 (第2-33・34・35図)
 S-4遺構の第3層除去後に検出された3つの小土坑からなる。切り合いがありC土坑→A土坑→B土坑の順で掘られている。そのうちA土坑は土坑SK30を切る。A土坑は長さ0.65m、幅0.6m、深さ0.3m。B土坑は長さ0.75m、幅0.7m、深さ0.15m。C土坑は長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.2m。C土坑の底面にはA層とした

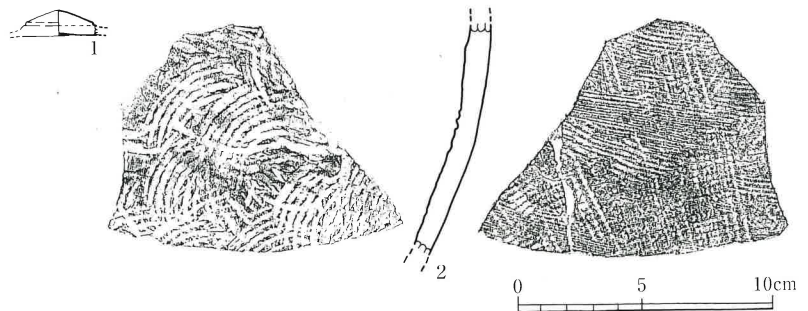


第2-34図 SK23断面土層図 (1/20)

はA層とした5cm大の炭が集中する炭層が円形に広がり、それをはぐとB層とした3cm大の焼土ブロックと炭層の混層があり、被熱した焼土面ではないがこの面で火を使っ

層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
1層	暗褐色軟質土 (5mm大の炭焼土多く、土器片混入。)	S-4の第3層土にあたる。	B土坑埋土
2層	淡褐色軟質土 (5mm大の炭焼土多く、土器片混入。)	—	
3層	やや硬い暗黄褐色土 (1cm大の炭焼土多く、土器片混入。下部に黄色土ブロック多い)	S-4の第4層土にあたる。	
4層	黄色粘土と暗褐色土との混層 (1cm大の炭片多い)	C土坑を覆うように堆積。人為的に被せた土。	C土坑埋土
5層	暗黄褐色粘質土 (1cm大の黄色土ブロックと2~3mm大の炭片多い)	A層 (炭層) 上部にあたる。	
A層	炭層 (5mm大の炭片の集中)	—	
B層	3mm大の焼土ブロックと炭層の混層	この層の上面は被熱面	A土坑埋土
6層	硬くしまった暗黄褐色土 (1cm大の黄色土ブロックを多量に含むが、炭片はほとんどない)	—	
7層	暗茶褐色軟質土	—	
8層	暗黄褐色土 (全体に汚れているが、ブロックを含まない)	11層と同じ	
9層	暗褐色軟質土 (炭片を少量含む)	—	
10層	暗褐色軟質土 (粘質あり、1~3cm大の黄色土ブロック少量含む)	12層と同じ	
11層	暗黄褐色土 (全体に汚れているが、ブロックを含まない)	8層と同じ	A土坑埋土
12層	暗褐色軟質土 (粘質あり、1~3cm大の黄色土ブロック少量含む)	10層と同じ	

ているのは確実である。さらにその上の第4層は黄色粘土ブロックを混じる土で、自然堆積したものではなく短期間に埋没もしくは、人為的に埋め戻されたものと考えられる。最初に掘られたC土坑は明らかにそこで火を使ったと思われる焼土ブロックと炭層の混ざったB層があり、その上に炭層であるA層が広がり、何ら



第2-35図 SK23出土遺物 (1/3)

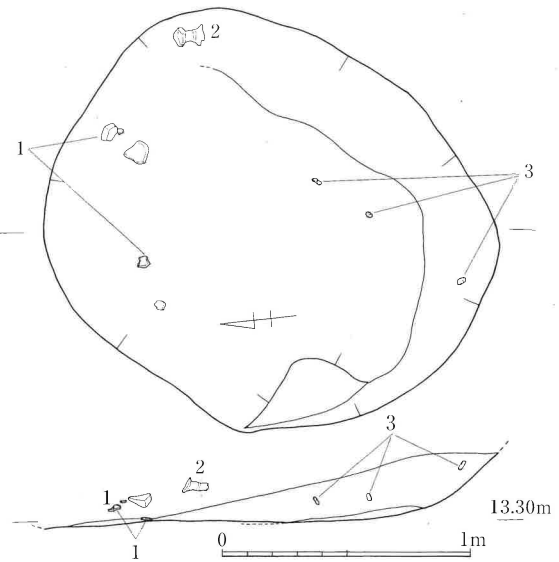
かの炉として使われている。さらに第4層は地山から掘り出したきれいな黄色土混じりの土を含み、人為的に被せた土であるので、炉として使用した後埋め戻したものと考えられる。つぎにそのC土坑を切って掘りこまれたA土坑は、C土坑を埋めるために掘られたと考えるのが合理的な穴である。掘られてすぐに炉などに使われることもなく、埋め戻されている。第7～12層の互層はその埋め戻しの鋤に載せた単位であったとも見られる。最上部の第6層のみがきれいな黄色土ブロックの層であるので、埋め戻しの最後に封じたものと考えられる。以上のA土坑の上にS-4遺構の第3層が堆積しているので、二つの土坑は第3層堆積以前の遺構である。いっぽう最後にC土坑を切って掘りこまれたB土坑はA・C両土坑にくらべて大きいにもか

かわらず層序は三層にしか分かれな。3層はS-4遺構の第4層土と1層はS-4遺構の第3層土に対応する。この層序は掘削後埋め戻されることなく放置され自然に埋没していったからであると考えられる。それを裏付けるかのように、C土坑とA土坑からは出土遺物はなく、B土坑からのみ以下の数点の破片が出土しているのみである。そのなかには土坑SK24の2の須恵器高坏（第2-37図）と接合する破片が出土している。

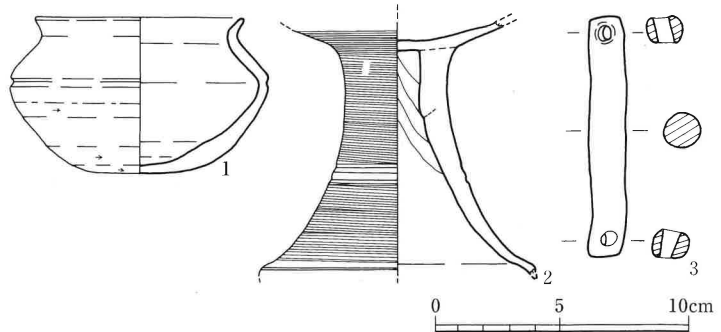
出土遺物はいずれもB土坑から出土したもので、1は須恵器坏蓋のつまみで扁平である。径は2.6cm。2は須恵器の甕胴部片、厚手でS-4遺構下層の出土片と接合した。ほかにB土坑からは須恵器の高坏の破片1点と土師器片3点が出土している。

SK24（第2-36・37図）

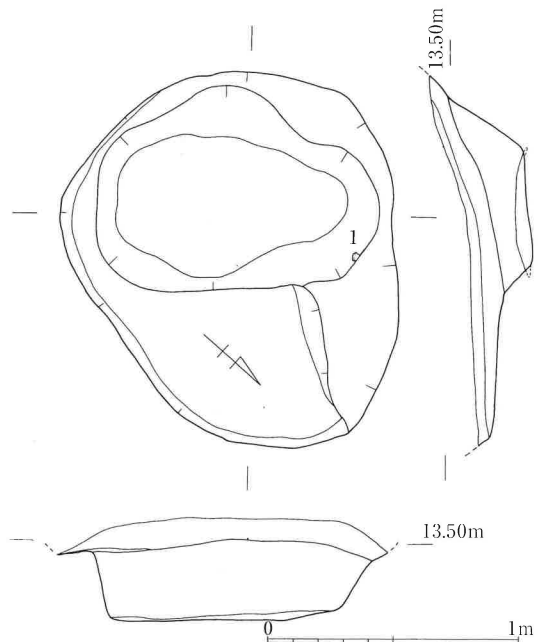
S-4遺構の第3層除去後に検出した不整形の土坑で、断面は半円形である。長さ1.75m、幅1.5m、深さ0.25m。ほかの土坑との切合関係はない。埋土は上下2層からなり、下層は炭焼土をほとんど含まない暗黄色軟質土で、S-4遺構の第4層土そのものである。また上層は第3層と区別できない。その内部からの出土遺物は多く、とりわけ須恵器高坏2は故意に打ち欠かれ、SK23B土坑とS-4遺構の第3層（中層）から出土した破片と接合している。棒状土錘も三つに折れた状態で出土し接合した。SK23B土坑や土坑SK30と一連の遺構で何らかの祭祀行為に使用された後、故意に破損して廃棄されたものと推定される。また遺物の中に被熱した礫が含まれることや、SK23B土坑では火を焚いた痕が見つ



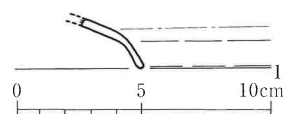
第2-36図 SK24 (1/30)



第2-37図 SK24出土遺物 (1/3)



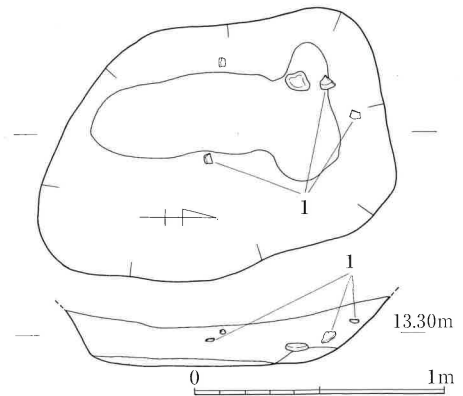
第2-38図 SK25 (1/30)



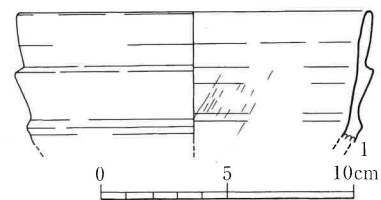
第2-39図 SK25出土遺物 (1/3)

っており、その祭祀行為には、火を使う行為が行われたものと推察される。祭祀遺物を廃棄した埋めたものと推定される。

1は須恵器の短頸壺、接合してほぼ2分の1まで接合した。復元口径8.1cm。器高6.1cm。底部は小さな平底をなす。胴部最大部に一条の沈線をめぐらす胴部下半は回転ヘラ削りで調整する。破片の半分は土坑SK24からS-4遺構内にひろがって出土した。2は須恵器の長脚高坏で、口縁と脚端部を故意に打ちかかれて失っている。坏部と脚部は分割成形をして接合しており、外面中央に2条の沈線を施しその上下にひろくカキ目を施している。内面には絞り痕が残る。本体は土坑SK24に廃棄されていたが接合した破片は、土坑SK23とSK30それとS-4遺構の下層と中層から出土している(接合資料8)。3は土師質の棒状土錘である。両端に穿孔があり、長さ9.5cm、重さ23.3グラム。3つに割れて出土し接合すると完形になった。おられて廃棄された可能性が高い。このほかにS-4遺構第2層出土の須恵器壺と同一個体の破片2点、個体の異なる壺片1点、須恵器坏片1点、土師器の甕胴部片1点と器種不明の土師器小片3点が出土している。



第2-40図 SK26 (1/30)

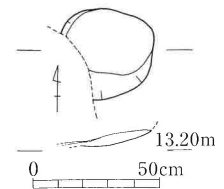


第2-41図
SK26出土遺物 (1/3)

SK25 (第2-38・39図)

S-4遺構の第3層除去後に検出した不整円形の土坑で、断面は皿状である。長さ1.5m、幅1.35m、深さ0.5m。土坑SK29に切られる。埋土は炭焼土を含まない粘質の強い暗茶褐色軟質土の単層であるから、S-4遺構の第4層土で埋没していると考えられる。人為的に埋め戻した可能性高い。埋土中からは数点の須恵器と土師器の小片が散在した状態で出土した。

1は須恵器坏蓋の口縁部片、須恵器TK209型式にあたるか。ほかに須恵器の甕など2点、土師器の甕胴部片2点の破片が出土している。

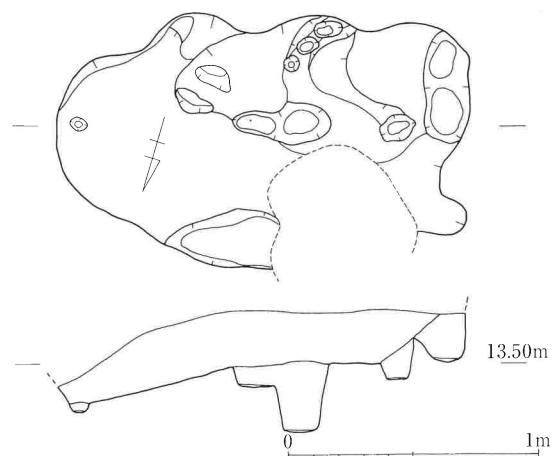


第2-42図
S-27 (1/30)

SK26 (第2-40・41図)

S-4遺構の第3層除去後に検出した不整長円形の土坑で、断面は半円形である。長さ1.5m、幅0.95m、深さ0.2m。ほかの土坑との切合関係はない。埋土は上下二層からなり、下層は炭焼土をほとんど含まない暗黄色軟質土で、S-4遺構の第4層土そのものである。S-4遺構掘削当初に掘られてすぐ埋め戻されたと推定される。土坑内からは円礫1点と須恵器の破片数点が出土している。

1は須恵器の台付碗の口縁部片、外面に二条の段をつける。口径14cm、色調は灰白色。桃崎氏の研究(註)にいう金属器模倣須恵器の一形式にあたり、そうであればTK209型式期以後の製品となる。ほかに土師器口縁の破片1点が出土している。



第2-43図 SK30 (1/30)

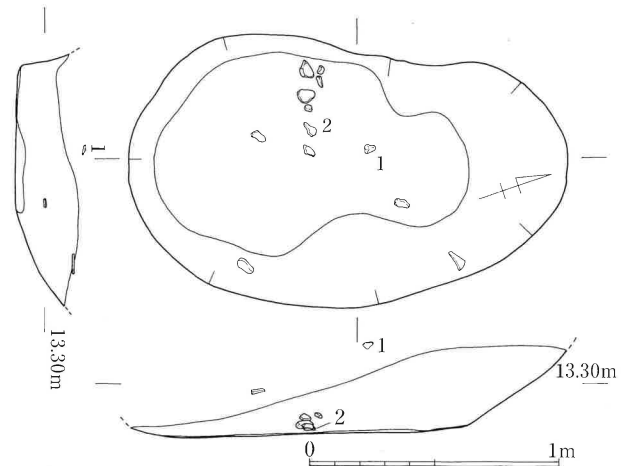
註) 桃崎祐輔2006「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学先史学考古学研究』17、筑波大学人文社会科学部研究科歴史人類学専攻

SK27 (第2-42図)

S-4遺構の第3層除去後に検出した不整円形の小土坑で、断面は皿状である。長さ0.4m、幅0.35m、深さ0.1m。土坑SK19に切られる。埋土はS-4遺構の第4層土で埋没している。人為的に埋め戻した可能性高い。出土遺物はなかった。一連の祭祀の中で掘られたが、すぐに埋め戻されたために遺物が混じりこまなかったものと推定される。

SK30 (第2-43図)

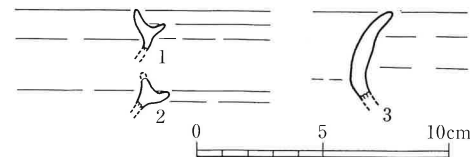
S-4遺構の第4層除去後に検出した不整長円形の小土坑で、底面は浅い皿状であるが、凸凹している。長さ1.65m、幅1.0m、深さ0.2m。SK23A土坑に切られる。埋土はS-4遺構の第4層土で埋没している。人為的に埋め戻した可能性高い。一連の祭祀の中で掘られたが、すぐに埋め戻されたために遺物が混じりこまなかったものと推定される。出土遺物は須恵器高坏の脚端部片が2点出土しているのみである。



第2-44図 SK32 (1/30)

SK32 (第2-44・45図)

S-4遺構の第3層除去後に検出したゆがんだ長円形の土坑で、断面は半円形である。長さ1.7m、幅1.0m、深さ0.3m。土坑SK31を切り、土坑SK17に切られる。埋土は1cm大の基盤層土のブロックを含む暗褐色軟質土の単層で炭焼土、土器片を含み、S-4遺構の第4層土で埋没している。上位の第3b層との境界が不明瞭なので、掘削後人為的に埋め戻されることなく放置されていた可能性が高い。そのため出土遺物は小片ながら20点近く出土している。いずれも細片が偶然埋没した状態である。



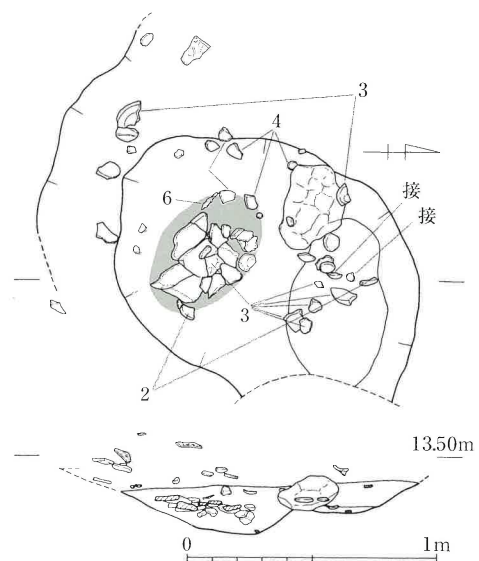
第2-45図 SK32出土遺物 (1/3)

1と2は須恵器坏身の口縁片で、いずれもTK209型式にあたる。3は土師器甕の口縁部片である。胎土はほくほくした軽い胎土である。ほかにS-4遺構の第2層から出土した須恵器甕口縁(24)と接合した破片が出土している。さらに須恵器坏蓋・坏身片、甕片など。土師器甕口縁片などが出土している。

SK31 (第2-46・47図)

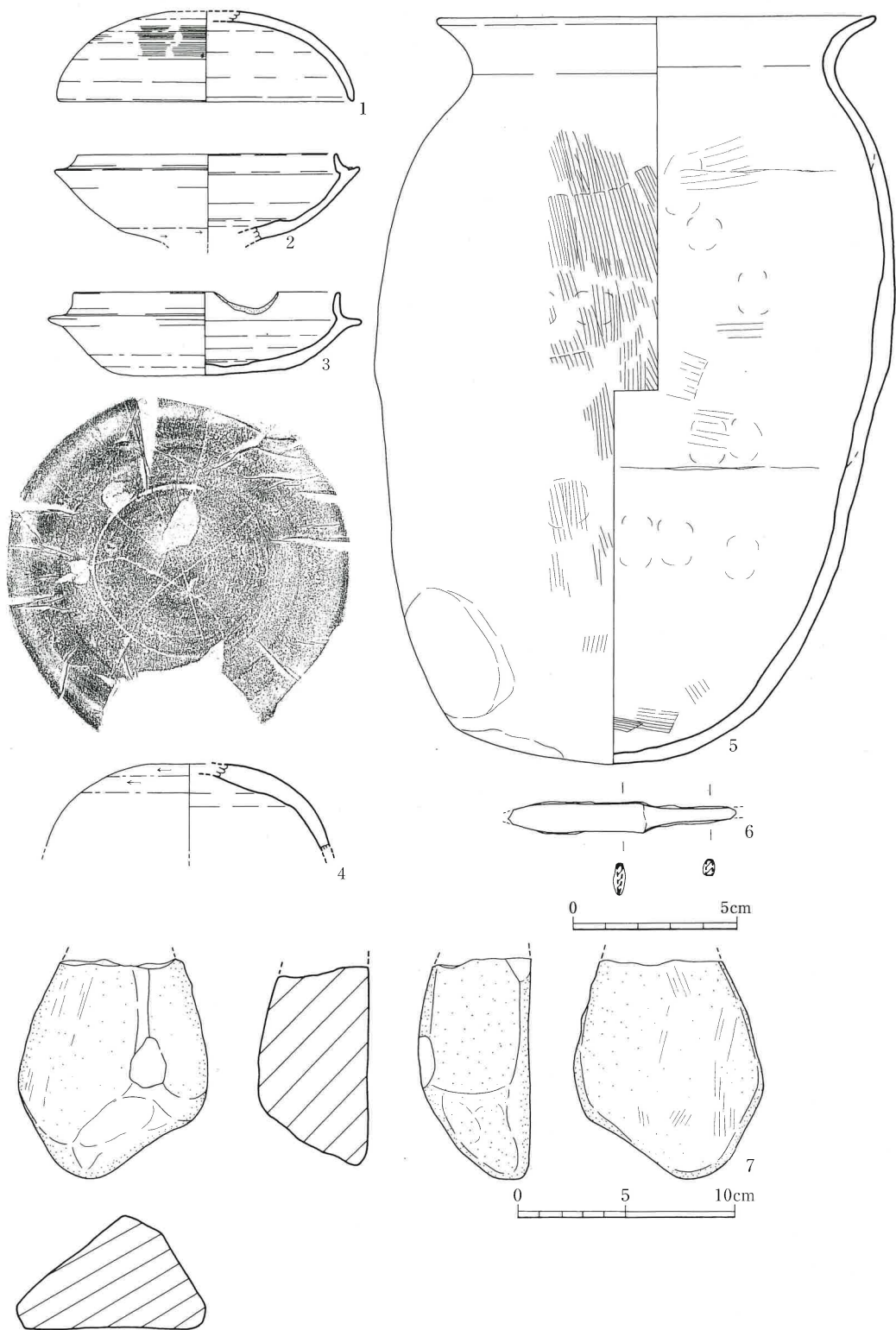
S-4遺構の内部に存在する土坑SK17の掘下げ中に検出した長円形の土坑で、断面は半円形である。長さ1.7m、幅1.0m、深さ0.3m。土坑SK32を切り、土坑SK17に切られることが判明した。底面には厚さ1cmほどの炭の堆積があり、内部には壁土が廃棄され、土師器甕4がほぼ完形で横倒しに潰れて廃棄されている。その西横に刀子1点(6)完形のまま出土している。祭祀に使われた土器を廃棄して埋没している。

1は須恵器坏蓋で復元口径13.6cm。外面には回転ヘラ削りの上からカキ目を施す。2は須恵器の坏身だが高坏の可能性も高



第2-46図 SK31 (1/30)

い。復元口径12.0cm、受け部径14.0cmで、底部外面下部にロクロ右回転の回転ヘラ削りがある。TK209型式に相当する。破片の1点はS-4遺構の第3層から出土している。3はTK43型式に相当する須恵器坏身、接合するとほぼ完形になる。底部外面には×形のヘラ記号がある。光景12.0cm、受け部径14.4cm。器高3.8cm底部外面は回転ヘラ削りで調整し、焼ひずみが激しい。口縁に一箇所故意の打ち欠きがあり、その後破碎して廃棄され、土坑SK31のみならず土坑SK17にも約半分の破片が



第2-47図 SK31出土遺物 (1~5・7=1/3、6=1/2)

出土している(接合資料4)。焼ひずみがはげしく実用品としては不便であるので、祭祀用に利用されたものと推定される。

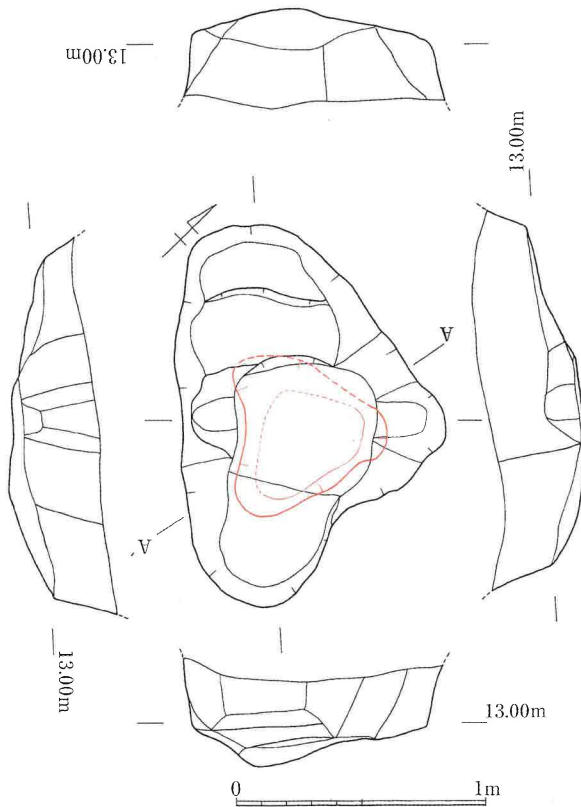
4は土師器の坏蓋で、回転ヘラ削りが施されている。5は薄手の土師器甕ほぼ完形近くまで復元できた。口径20.2cm、器高34.0cmを図り、全体にいびつにゆがんでいる。砂粒は比較的多く外面は粗いタテハケの後、指圧

で調整する。内面にもハケ目が残るが大半はナデで仕上げる。胴部から底部全体に煤が付着し、下半は赤く被熱し、一部円盤状の剥離が見られる。破片の大半は土坑SK31で出土したが、一部は土坑SK17からもまとまって出土している(接合資料15)。6は鉄製の刀子で先端を欠いている。残長は10.5cmほど。7は折れた砥石である。安山岩製の川原石を利用している。

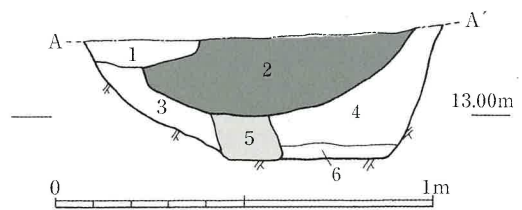
SP28 (第2-48・49図)

S-4遺構の第4層除去後に検出した不整形の土坑であるが、調査の結果大型の柱穴であることが判明した。S-4遺構のほぼ中央に位置している。長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.4mの3方向に飛び出したような掘形、三角形の抜き取り痕、さらに柱痕を区別することができた。掘形の底面は方形で、断面土層図から見るとまず中央に一本の柱を据えて埋めたものであるが、比較的浅い掘形を安定させるため東北-南西の二方向に支柱をいれた痕跡がある。おそらく西北-南東方向にも同様な支柱を入れたと推定されるが、その痕跡は抜き取りの際に壊されている。さらに柱が立って機能していた間に、S-4遺構内に第4層と第3層がしかれ、その後その層の上から柱の抜き取りが行われ、抜き取りに入っていた土はS-4遺構の第3層をほぐした土であり、第2層上から掘りこむと必ず

入る黄色土ブロックが見出されないので、柱の抜き取りはS-4遺構の第2層で埋める直前に行われたものと考えられる。したがってS-4遺構掘削当初に掘られ、第2層を貼る前に柱を故意に抜き取るという行為が行われたことになる。出土遺物はなかった。



第2-48図 SP28 (1/30)



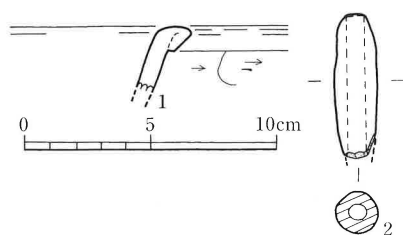
第2-49図 SP28断面土層図 (1/20)

SP28層序

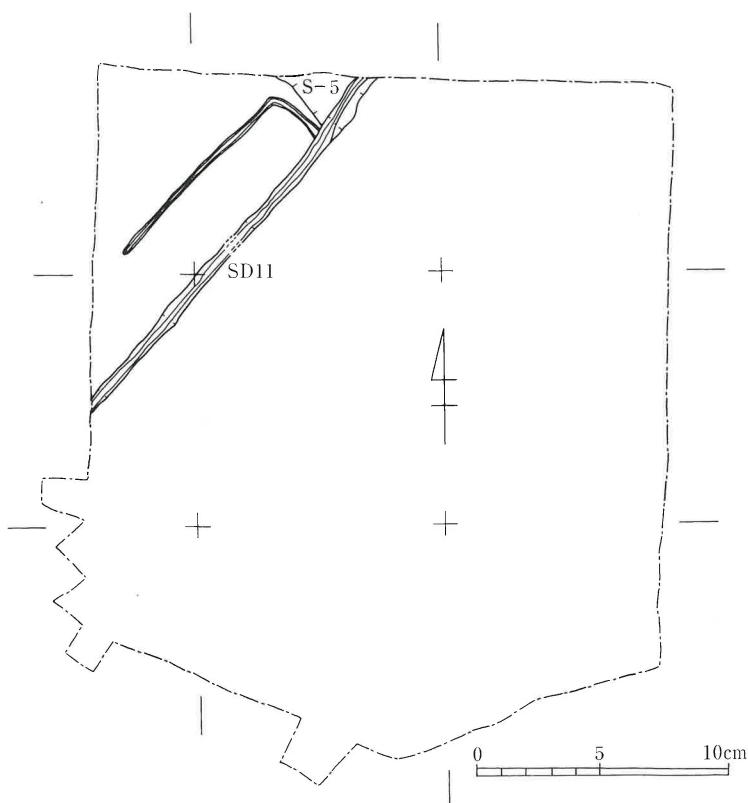
層単位	色調・土質・包含物等	特徴	性格
1層	硬くしまった暗褐色粘質土 (2~3cm大の黄色土ブロック多く含む、炭・焼土なし)	柱穴を立てた時点でかぶせて固めた土	掘形埋土
2層	軟らかい暗褐色軟質土 (1cm大の炭片多く含む。S-4第2層の粘土は含まれない)	S-4第3層土と同じ。	S-4第2層土を貼る以前にふき取られたことを示す
3層	暗褐色粘質土 (炭含むが、黄色土ブロック含まず)	-	掘形埋土
4層	茶褐色粘質土	-	
5層	ぼさぼさした暗茶褐色粘質土 (1cm大の黄色土ブロック多く含む)	-	柱痕埋土
6層	軟らかい暗褐色軟質土	-	掘形埋土

第4節 近現代の遺構（第2-50図）

S-5（第2-51図） 第1ないし第2層上面で検出した水田遺構である。水路である溝SD11と接続している。**1**は口縁を外に折り返して成形した瓦質土器の鍋口縁部である。外面はヘラ削りで調整している。**2**は土師質の管状土錘の完形品。長さ5.7cm、最大幅1.7cm、重さ13.1cm、手づくねで両端は未調整である。



第2-51図 S-5出土遺物（1/3）



第2-50図 近世遺構配置図（1/300）

SD11 水田遺構S5から接続する直線的な溝で、水路と考えられる。出土遺物は近現代のもののみである。

第5節 小結—古墳時代後期の一本柱を立てた祭祀遺構について（第2-3・4表）

5-1 S-4遺構の性格と変遷（第2-52図）

さて第2-3表には諸田南遺跡A地区での全遺構の関係を、切合関係と出土遺物の接合関係から復元したものである。第2-4表は遺構の併行関係復元と基礎となった接合関係の一覧表である。この第2-3表をもとに、この遺構群を復元しておこう。

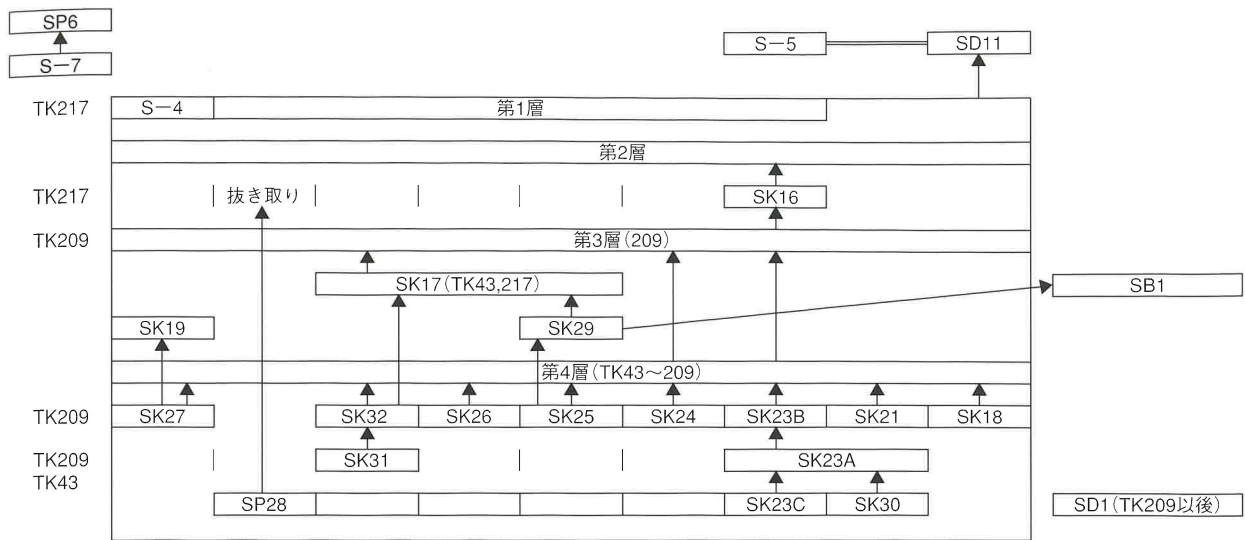
まず①6世紀末の須恵器TK43型式の時期に、おおよそ円形のS-4遺構が掘りこまれる。その中央には1本柱のSP28が設置され、祭祀の場が設けられる。とりあえず「一本柱祭祀」と呼んでおこう。S-4遺構の北側には同時代の遺構が存在しないことから、この祭祀の場は集落域の北端に設けられたものと推定される。

次に②柱の周囲のS-4遺構の斜面上に、祭祀遺物の破片が混じりこむ土坑が次々と掘られて行く。中でも柱SP28のすぐ南に掘られた土坑SK23Cには炉が設けられすぐに埋め戻されているので、あるいは①の立柱の時点で火を焚く行為が伴った可能性もある。多くの土坑はあまり多くの土器を含まないまますぐに埋め戻された土坑（SK18, SK19, SK21, SK25, SK26, SK27, SK30）と放置されて自然埋没したと推定される土坑（SK32, SK23B）、祭祀に使われた遺物を廃棄した土坑（SK31, SK24）に分けることができる。以上の土坑は立柱の周囲特に南側に多い。

④廃棄された土器型式から見ると須恵器TK43からTK209型式の間にあたり、短く見積もっても30年ほどの時間の経過の中で10基程度の祭祀土坑が掘られているのに過ぎず必ずしも多くないから、土坑の掘削をともなう祭祀は日常的な行為ではなかったことを示唆している。

その後④S-4遺構の西部に土坑SK17と土坑SK29の大型の祭祀土坑が掘りこまれる。この二つの土坑は廃棄

第2-3表 諸田南遺跡A地区の遺構相関表



第2-4表 接合資料一覧表

No.	挿図番号	遺物		型式	主に出土した遺構		従に出土した遺構		備考
接合資料1	SK29-30	須恵器	台付坏	TK209型式~217型式	SK29	SK17	—	—	破碎された後SK29で伏せて置かれた状態で発見された。脚端部が花弁状に打ちかけられている。
接合資料2	SK17-4	須恵器	台付坏	TK209型式~TK217型式	SK17	SK29	—	—	一番大きな坏部の破片が正位でおかれ、ほかの脚部以下の破片はSK29に散乱していた。口縁には1箇所打ち欠きの痕がある。
接合資料3	SK29-7	須恵器	坏蓋	—	SK29	SK17	—	—	—
接合資料4	SK31-3	須恵器	坏身	TK43型式	SK31	SK17	—	—	接合するとほぼ完形になる。底部外面にはX形のヘラ記号がある。焼ひずみが激しい。口縁に一箇所故意の打ち欠きがあり、その後破碎して廃棄され、SK31のみならずSK17にも約半分の破片が廃棄されている。焼ひずみがはげしく実用品としては不便であるので、祭祀用に利用されたものと推定される。
接合資料5	SK29-27	須恵器	坏身	TK43型式	SK29	SK17	—	—	焼成は良好で、外面に三本線のヘラ記号が施される。破片の一部はSK17から出土した。
接合資料6	SK29-29	須恵器	坏身	TK209型式~217型式	SK29	SK17	—	—	底面はヘラケズリを施さないヘラきり未調整である。
接合資料7	SK29-33	須恵器	甕	—	SK29	SK17	—	—	口縁部が失われている。H字形のヘラ記号。
接合資料8	SK24-2	須恵器	長脚高坏	—	SK24	SK23	S30	S-4下層	口縁と脚端部を故意に打ちかけられて失っている。
接合資料9	SK29-26	須恵器	坏身	TK217型式	SK29	SK17	—	—	ヘラきり未調整
接合資料10	SK17-1	須恵器	坏身	TK43型式	SK17	SK29	—	—	数点に割れて出土している。
接合資料11	SK29-23	須恵器	坏蓋	TK43型式	SK29	SK17	—	—	口縁部が失われている。H字形のヘラ記号。
接合資料12	SK29-40	土師器	甕	—	SK29	SK17	—	—	土師器甕底部。
接合資料13	SK29-45	須恵器	甕	—	SK29	SK17	SB1 柱穴1	S-4下層	口縁部と底部を欠く。胴部最大径は43.8cmで、44と同大で調整も同じであるが胴部の厚さが異なり別個体である。破片の大多数はSK29から44の甕と混じるように底面から出土した。
接合資料14	SK29-44	須恵器	甕	—	SK29	SK17	—	—	底面にしかれたように廃棄されていた。復元すると口径19.5cm。器高50.2cm胴部最大径44.8cm。口縁は玉縁状に外に折り込んで成形する。
接合資料15	SK31-5	土師器	甕	—	SK31	SK17	—	—	薄手の土師器甕ほぼ完形近くまで復元できた。全体にいびつにゆがんでいる。胴部から底部全体に煤が付着し、下半は赤く被熱氏、一部円盤状の剥離が見られる。

された遺物の接合資料も多く、同時に掘られたものである。また掘られた時期はS-4遺構第3層堆積中の須恵器TK209型式期にあたる。しかも接合資料の存在と位置関係から、掘立柱建物SB1がS-4遺構の南に建てられたのは、この時期であると考えられる。掘立柱建物SB1は全体が不明ながら竪穴建物からなる集落に伴う倉庫等の遺構ではなく、おそらく祭祀に関連する建物と考えられる。さらに溝SD1もその際に掘立柱建物と祭祀の場を区画するために設けられた可能性が高い。

⑤この時点で祭祀の性格が異なってくる。特に土坑SK29には完形の須恵器甕2個体を破碎してその破片を、多数の須恵器・土師器や炭焼土などの焼却廃棄物といっしょに土坑の底部にまとめて廃棄する行為が行われている。これは集落や古墳の墳丘上で頻繁に発見される祭祀行為と共通する。供膳形態の須恵器である高坏・坏などが多く、事後に打ち欠いたり、破損して廃棄している。土器や焼却物などの祭祀の残骸は土坑の外の西側から捨てられている。かなりの人数が参加する儀礼が行われたものと考えられる。また同時に土器の構成をみると古墳の副葬品とかなり共通していることがわかる。

⑥最後に須恵器TK217型式が使われていた7世紀中葉に「一本柱祭祀」の場が閉鎖される。具体的には柱SP28を抜き取り、その北側に土坑SK16を掘って祭祀場の閉鎖に伴う儀礼を行い、埋め戻す。さらにその埋め戻し行為は土坑SK16だけにとどまらず、S-4遺構全体を第2層土を貼って封じるという行為を行っている。さらにその上を第1層土で埋め戻して、祭祀の痕跡は最終的に完全に消されている。

⑦この「立柱祭祀」が継続した6世紀末から～7世紀中葉には、この遺跡のさらに北の諸田遺跡において、まったく同時期の集落が、同じように前後の時期の遺構を伴わず展開しており、「一本柱祭祀」の始まりと終焉は、集落そのものの始まりと終わりに対応するものと考えられる。

5-2 一本柱祭祀遺構

S-4遺構の整理からわかったことは、その後西海道豊前国下毛郡となるこの場所で、6世紀末から7世紀中葉までの約半世紀間、1本柱の立柱遺構が設けられ、その周囲で何らかの儀礼・祭祀が継続的に行われていたことが判明したことである。かりに「一本柱祭祀」と呼んで、以下その関連を調べておこう。

日本列島においては縄文時代前期以来、北陸地方を中心として東日本各地において、木柱列と単独の柱を設ける祭祀遺構が発見され、特に晩期に盛行する(註1)。その後弥生時代の1本柱の大柱遺構の存在が指摘されている(註2)。境氏によると弥生時代中期から後期末にかけて、墓前祭祀の一形態として一本柱の大柱を立てる遺構が存在する。縄文時代からの立柱祭祀が、弥生時代の大柱祭祀とどのような関係があるのか不明であるが、以後このような立柱祭祀は古墳時代にも引き続き継続するようであるが、管見では明確な一本柱祭祀遺構は見当たらない。

一方奈良時代の磐城の夏井廃寺(註3)や武蔵国府(註4)などの古代寺院や国府には幢竿支柱と呼ばれる1本柱あるいは2本柱の立柱が存在する。また古代の神社遺構の中にも中央に一本柱を立てる遺構が鳥取県青木遺跡などで存在する。

このように弥生時代と古代に一本柱祭祀が存在したようであるので、その間に完全に途絶えたとは考えられない。当然古墳時代にも存在していたことが予想される。今回諸田南遺跡A地区で発見されたS-4遺構の一本柱祭祀遺構は集落内に存在するという点で、その後の神社遺構に連なる集落祭祀遺構である可能性が高い。このような6世紀末から7世紀前半の一本柱祭祀遺構が確認されたことは特筆に値しよう。

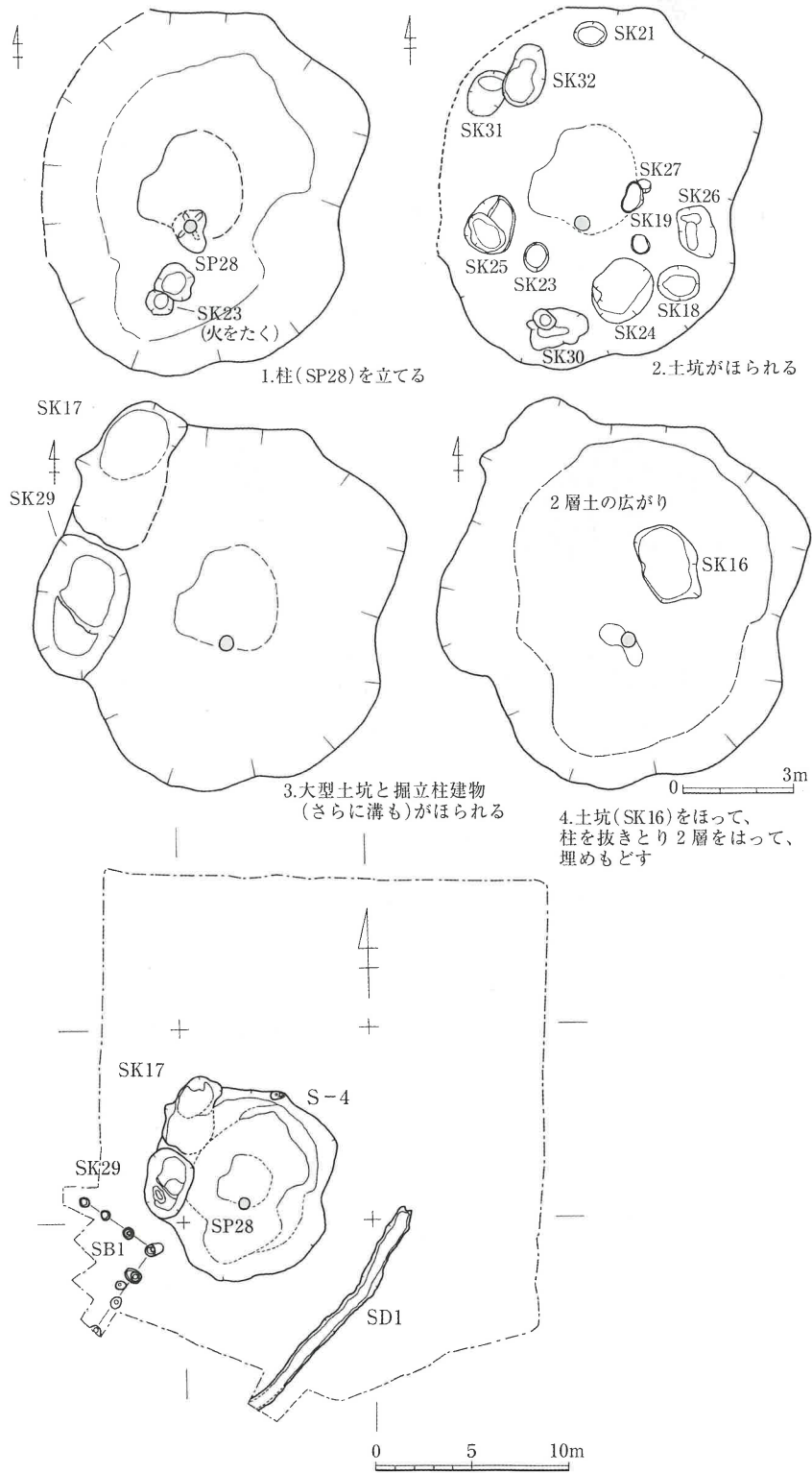
[註]

註1) 植田文雄2005「立柱祭祀の史的研究」『日本考古学』19、日本考古学協会

註2) 境靖紀2001「弥生時代大柱祭祀の一例」『古文化談叢』47、九州古文化研究会

註3) いわき市教委2004『夏井廃寺跡』いわき市報告107

註4) 府中市教委2004『武蔵国府の調査』26



第2-52図 S-4遺構の変遷 (上 S=1/200、下 S=1/400)

写真図版1



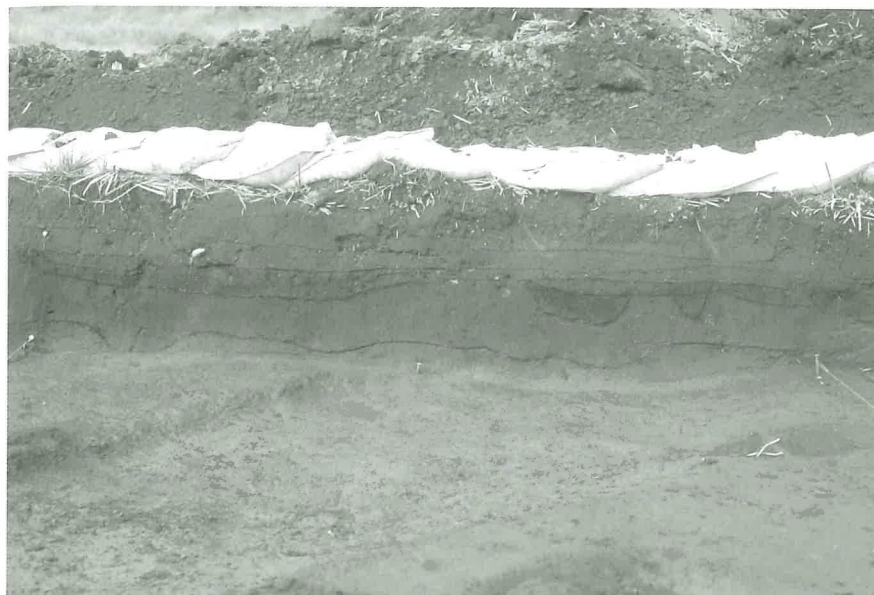
諸田南A地区遠景（北から）



諸田南A地区遠景（南から）



S-4遺構が姿をあらわす



A地区の基本層序



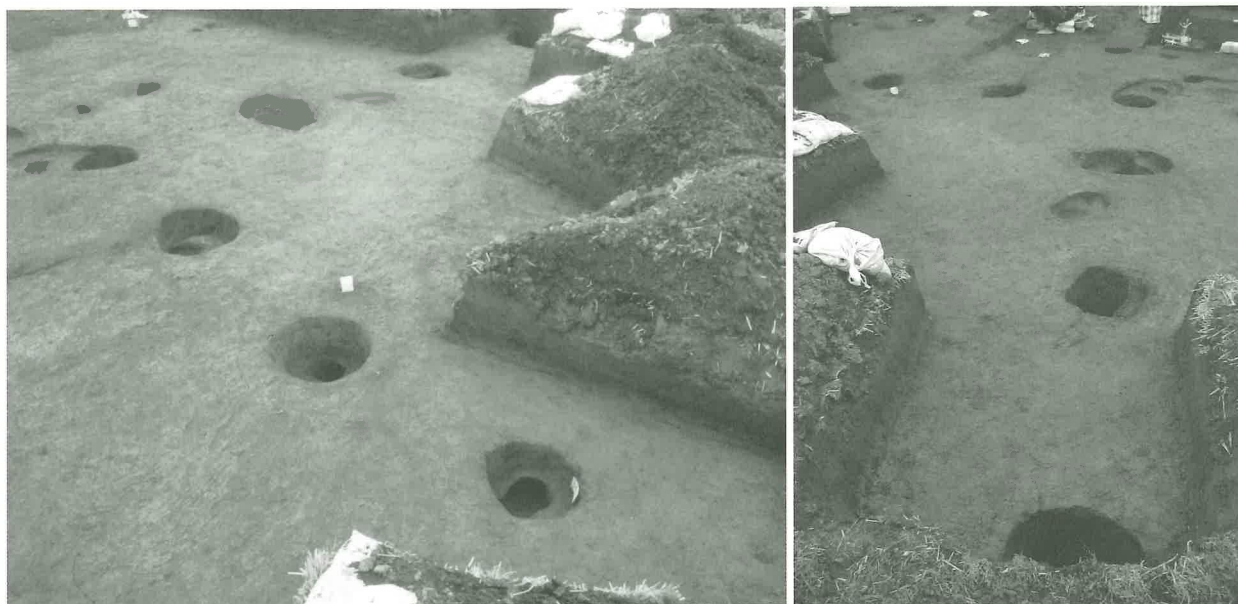
溝SD1



SD1細部



SD1 No-1 出土状況



掘立柱建物SB1



S-4遺構検出状況



S-4遺構第1層除去後



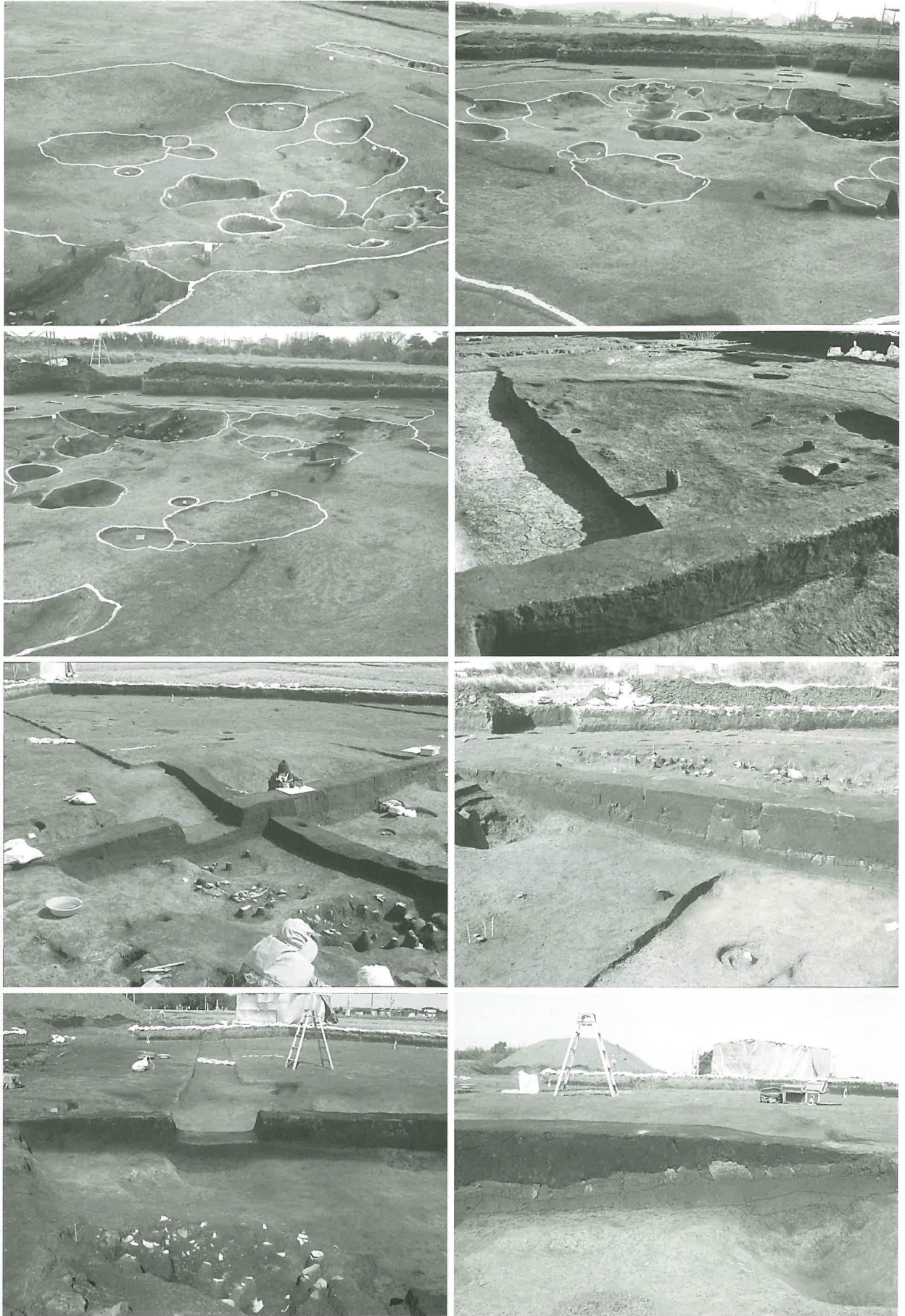
S-4遺構完掘状況（北から）



S-4遺構完掘状況（西から）



S-4遺構完掘状況（東から）



S-4遺構各部

S-4遺構第2層上面

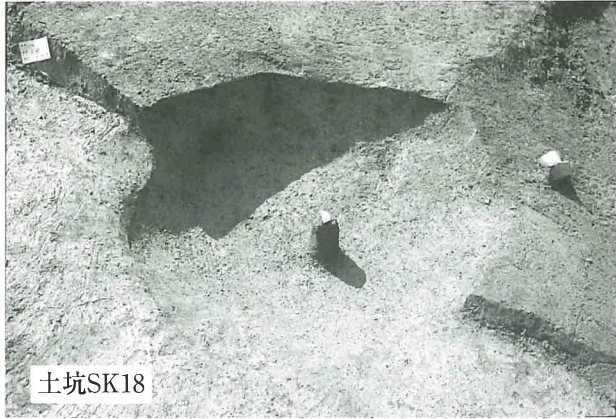


土坑SK16



土坑SK17

写真図版7



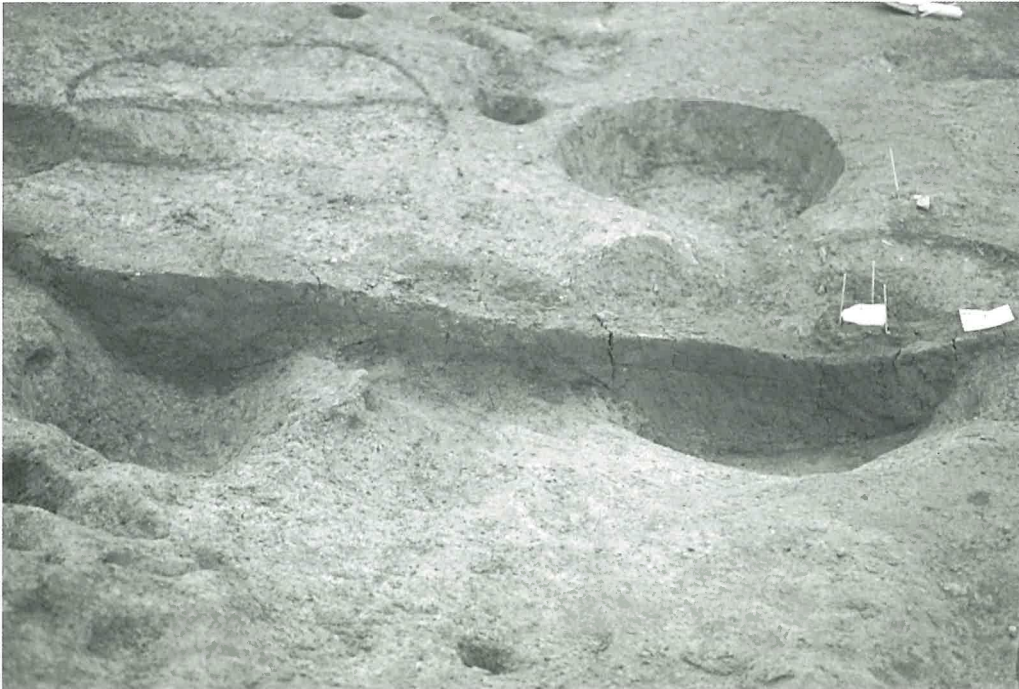
土坑SK18



土坑SK19



土坑SK23



土坑SK23断面



土坑SK24



土坑SK25



土坑SK26

写真図版9



柱SP28



土坑SK29





土坑SK31



土坑SK32

写真図版11



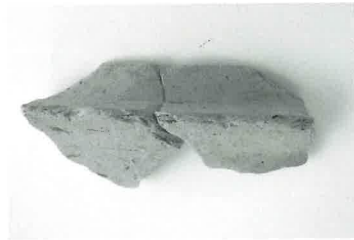
2-4図2 A3区



2-7図2 溝SD1



2-13図3
S-4遺構第2層



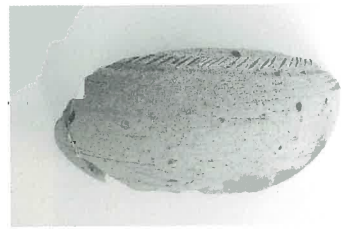
2-14図7 S-4遺構第3層



2-14図8



2-14図12



2-14図13



2-16図19 S-4遺構第4層



2-16図22 (遺構検出時)



2-16図23



2-16図24



2-16図28



2-20図1 SK17



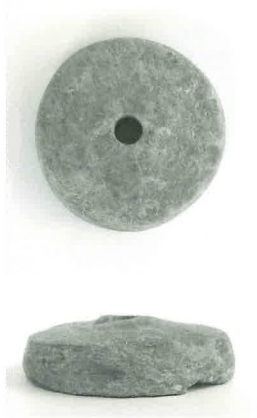
2-20図3 SK17



2-20図4 SK17



2-20図 5 土坑SK17



2-25図 1
土坑SK29最上層



2-26図 2 土坑SK29上層



2-26図 3



2-26図 4



2-26図 5



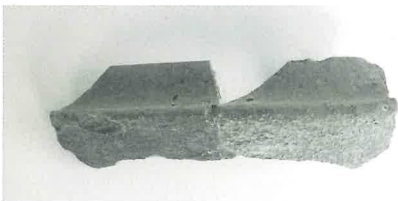
2-26図 6



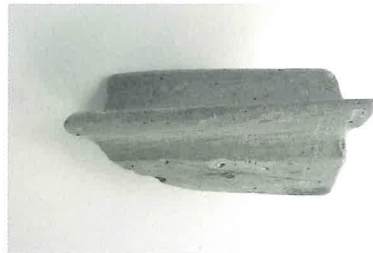
2-26図 7



2-26図 8



2-26図 9



2-26図 10



2-26図 13



2-26図14



2-26図 18

写真図版13



2-26图 19 土坑SK29上層



2-26图 21



2-26图 22



2-27图 23
土坑SK29中層



2-27图 24



2-27图 26



2-27图 27



2-27图 28



2-27图 29



2-26图 30



2-27图 31



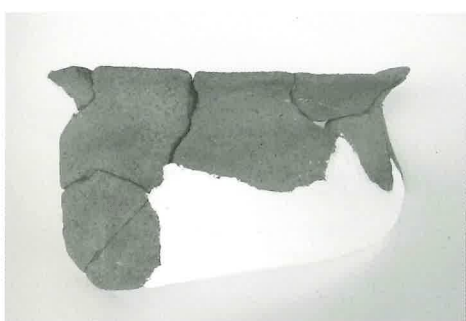
2-27图 33



2-27图 34



2-27图 35



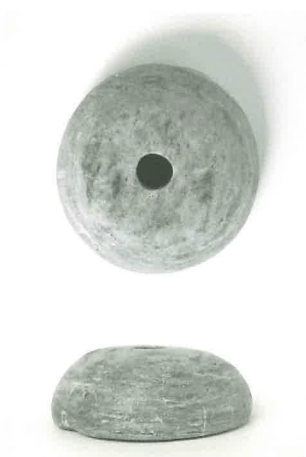
2-27图 36



2-27图 37



2-28图 41



2-28图 42



2-29图 43 SK29下層



2-29图 45



2-29图 44

写真図版15



2-35图 1 土坑SK23



2-35图 2



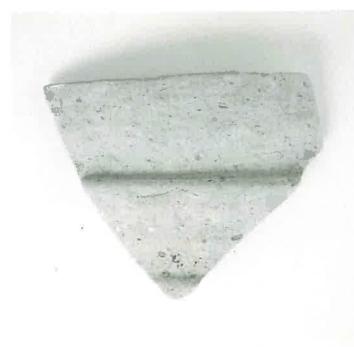
2-37图 1 土坑SK24



2-37图 2 土坑SK24



2-37图 3



2-42图 1 土坑SK26



2-47图 1 土坑SK31



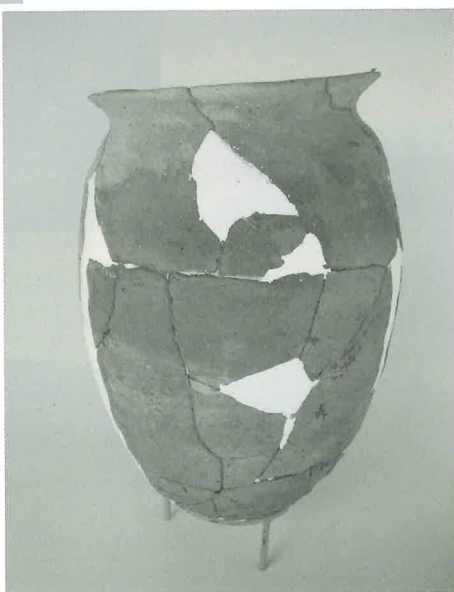
2-47图 2



2-47图 3



2-47图 4



2-47图 5



2-47图 6

第3章
諸田南遺跡B地区



台風来襲

第3章 諸田南遺跡B地区

第1節 調査の経緯（第3-1図）

発端 中津日田道路の一環として県道中津港線の建設が計画され、その路線に定留遺跡、諸田南遺跡などの周知の遺跡が存在した。そのため遺跡の立地する段丘地形から見て、周知遺跡の範囲内に限らず遺跡の存在する可能性の存する地点を試掘して、工事以前に遺跡の保護をはかる必要が生じた。

試掘調査 2002(平成14)年末におこなった諸田南遺跡隣接地区の試掘調査において、土坑と溝が検出され近世以前に遡る遺物が採集されたところから、この部分を本調査することにし、諸田南遺跡B地区とした。

本調査 2003(平成15)年1~2月に表土剥ぎと遺構検出をおこない、5~9月の夏季に発掘調査をおこなった。現状は水田であり、まず水田耕作土と水田の床土を重機ではぐと、水田造成の際に盛られた暗茶色粘質土が全体に広がり、その下から基盤層に当たる黄色粘質土が存在し、すべての遺構はその面上において検出された。調査はまずその基盤層上で検出されたあらゆる痕跡にしるしをつけ、半裁してほりさげて、人為的遺構かどうかを判定し、遺構のみにSの通し番号をふして調査を進めた。遺構の記録は現地で行い、実測と写真撮影を完了した。整理作業は県埋蔵文化財センターで2007(平成19)年度に行った。

なお整理作業において、瓦質土器および土師質土器については山本哲也氏(大分市教委)の教示をえた。



第3-1図 諸田南遺跡B地区の位置 (1/3000)

第2節 遺構の概要と基本層序

どんな遺構が発見されたか（第3-2図、第3-1表） 遺構としてはまず水路と推定される溝が10条ほど発見された。特にSD1～3、SD8からSD26にかけて屈曲する溝は、何度も同じ場所に掘られた溝である。調査の結果14～15世紀の水路と判明している。さらに調査区の南西部でもSD53からSD56の数条の溝が重複して、発見された。この溝群の周囲には、水路とは異なる区画の溝や土坑、柱穴を含むピット群が集中している。

基本層序 現在の水田層の床土をはぐとすぐに遺構検出面となる。大部分の遺構は上部を削平された状態で、近世以後に削平あるいはならされて水田として整えられたものと推定される。



第3-2図 諸田南遺跡B地区遺構配置図 (1/400)

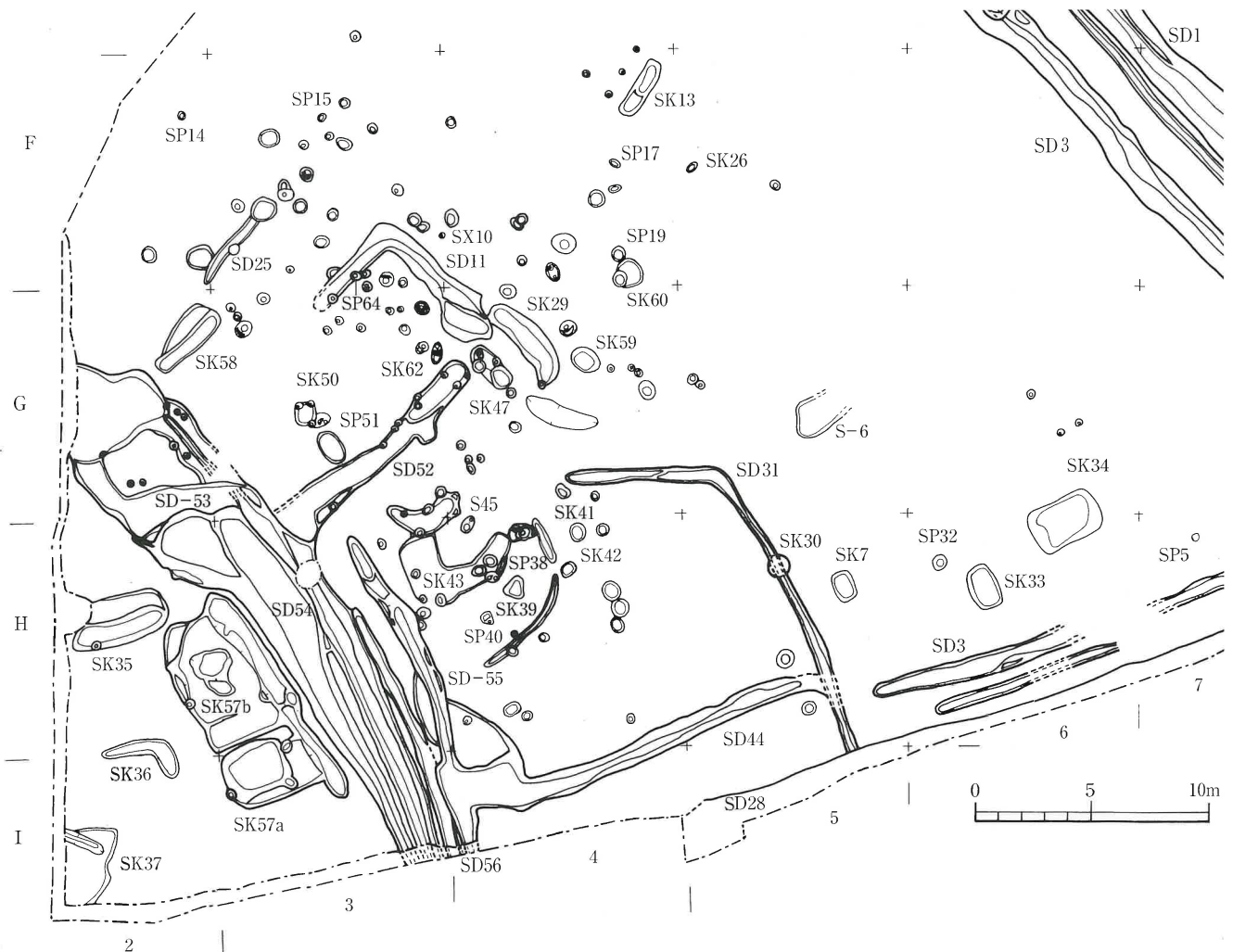
第3-1表 諸田南遺跡B地区遺構一覧表

遺構	性格	グリッド位置	層位	構成遺構・層序	切合関係	出土遺物	残留遺物	備考
SD1	溝(主水路)		上下2層	—	SD2に切られる 掘りなおしあり	—		
SD2	小溝(水路)		—	—	SD1を切る	—		
SD3	溝(脇水路)		—	—	—	土師質鍋 大型土鉢		
S-4	柱穴?		上下2層	—	—	—		
S-5	ピット		単層	—	—	—		
S-6	しみ(自然)		—	—	—	—	縄文土器深鉢片	後期
SK7	人為土坑		上下2層	—	—	須恵器甕片		
SD8	小溝(水路)		単層	—	SD1の上層を切る	土師質土器 瓦質土器	須恵器甕片	
SX9	焼土面	B5区	—	—	—	なし		
SX10	土師器鍋埋設遺構	F4区	土坑密着	—	—	土師器鍋正位で安置		鍋の底部に穿孔
SD11	区画溝		単層	—	SP64を切る	—		
S-12	ピット	F4区	単層	柱痕なし	—	—		
SK13	土坑	F4区	3層	底部2段	—	なし	なし	
S-14	ピット	F2区	単層	焼土・壁土ブロックあり	—	—		
SP15	柱穴	F3区	単層	—	—	土器片		
S-16	柱穴?	F4区	単層	柱痕か2つのピットの切りあい?	—	土器片、焼土片多い		
SP17	柱穴	F4区	単層	柱痕(焼土、壁土ブロック)	—	—		
SP18	柱穴?	F4区	単層(B土)	柱痕なし	—	瓦質鍋口縁		
S-19	ピット	F4区	単層	柱痕なし	—	土器小片		
S-20	ピット	F3区	単層	柱痕なし	—	土器小片		
S-21	ピット		単層	—	—	焼土炭、小土器片		
S-22	ピット		単層	—	SD25を切る	焼土、炭あり		
S-23	ピット		単層	—	—	瓦質土器片		
S-24	ピット	F4区	単層(A土)	—	—	瓦質土器片		
SD25	細い短い溝	F3区	単層	—	S-22に切られる	—		
SK26	土坑	F5区	単層	—	—	壁土		
S-27	ピット	F4区	単層(B土)	—	—	—		
SD28				—	—	—		
SK29	廃棄土坑	G4区	二層	二段になり、明灰色土の上に黒色土	—	土器片多い		
SK30	土坑	H5区	単層	黒色土	SD31に切られる	—		
SD31	区画溝(L字形)		単層	黒色土	SK30を切る	炭焼土土器片あり	7世紀の須恵器片多い	
S-32	ピット	H6区	単層	暗褐色土	—	—		
S-33	風倒木の可能性あり	H6区	—	—	—	—		
SK34	方形土坑	G6・H6区	単層	黒色土	—	土器片少し。		
SK35	土坑(祭祀行為あり)	H2区	二層	—	なし	土器片・青磁碗底部片	青磁碗片は打ち欠きあり	
SK36	土坑	I2区	単層	暗褐色土	なし	土器片あり。		
SK37	土坑(不整形)	H2区	単層	暗褐色土	なし	土器片あり。		
SP38	ピット(不整形)	H4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	13世紀の小皿		
SP39	土坑(円形)	H4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SK40	土坑(不整形)	H4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SK41	土坑(円形)	H4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SK42	土坑(円形)	H4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SK43	土坑(不整形)		単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	—	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SD44	溝		単層	黒色土	SD55に接続	土器片あり。		
S-45	ピット	H4区	—	—	—	—		湧水で底不明
S-46	風倒木痕	G4区	—	—	—	—	—	完掘せず。
SK47	土坑	G4区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SK48	土坑	H3区	単層	暗褐色土(軟質)炭焼土多い	なし	土器片あり。		
SP49	柱穴	G2区	単層	黒色粘質土	なし	土器片あり。		
SK50	土坑(不整形)	G3区	単層	淡茶褐色軟質土(炭焼土入る)	なし	土器片多い。		
SP51	ピット	G3区	単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	なし	土器片あり。		SP38と同じ埋土
SD52	溝		単層	黄色ブロック混じり暗褐色土	S-53と接続	土器片あり。		SK39と同じ埋土
S-53	溝?		—	—	—	土器片あり。		
SD54	溝		—	—	—	—		
SD55	溝		単層	暗褐色土(軟質)炭焼土多い	SD44に接続	土器片多い。		中央に土器片集中
SD56	溝		単層	暗褐色土(軟質)土	—	土器片あり。		
SK57	大型土坑 (ABに分かれる)		単層	暗褐色土(軟質)土	—	土器片あり		炭層、被熱礫多い
SK58	土坑		単層	黒褐色土(5~10cmの黄色ブロック多い)	—	土器片あり。		
SK59	土坑	G4区	単層	黒色土	—	土器片あり。		
S-60	土坑(円形)		上下二層	上層:黒色土、下層:黄色土混じり酷暑九度	なし	土器片あり。		
S-61	ピット	F4区	単層	—	なし	土器片あり。		
S-62	ピット	G3区	単層	黒色土	なし	土器片あり。		
SP63	柱穴	G3区	単層	黒色土	なし	土器片あり。		
SP64	柱穴	F3区	単層	黒色土(炭焼土含む)	SD11に切られる	土器片あり。		底に円礫
SK65	土坑	F6区	—	—	SD3に切られる	土器片あり。		
S-66	風倒木痕	F6区	—	—	—	—	—	完掘せず。

第3節 中世の遺構と遺物（第3-3図）

3-1 遺構の配置

溝SD53からSD56を挟んで、北東側に区画の溝SD11やSD52さらに土坑SK25やSK58に囲まれた場所がありその周辺にピットが集中する。その隣には溝SD31やSD44、SD55に囲まれた区画が存在し、やはり土坑やピットが多い。その2箇所の区画と溝SD1～3の間には空地地があり、遺構は極めて少ない。



第3-3図 諸田南遺跡B地区主要部遺構配置図（1/300）

3-2 溝

SD1、SD2、SD3、SD8（第3-4・5～8図）

SD1 水路として使用されたと推定される直線の溝で、溝SD2と重複するように切られている。長さ50m、幅1.5m、深さ0.7m。溝は当初底部を方形に突出させたV次溝としてほられ、その後浅い箱掘りに掘りなおされている。当初の溝の埋土を下層、掘りなおし後の埋土を上層として取り上げた。掘りなおし後の溝内すなわち上層からは10などの18世紀以後の遺物が多く、江戸時代中期以後の改修と推定される。下層の溝内から14世紀から16世紀の遺物が多く、中世後期に掘られ使用された溝と考えられる。ちなみに溝底部の絶対高を調べると、水は北西から南東方向に流れるように掘削されている。上層の埋土は人為的に埋められたような均一な土で、下層は暗褐色粘質土で水の流れたような土壌であった。

遺物は、いずれも碎片で、まとまった廃棄状態ではなく、長期間の使用中に少しずつ流れ込んだものと推定される北からa・b・c・d・e・f区の6区画にわけて掘下げ、上層と下層の上下に分けて取り上げた。

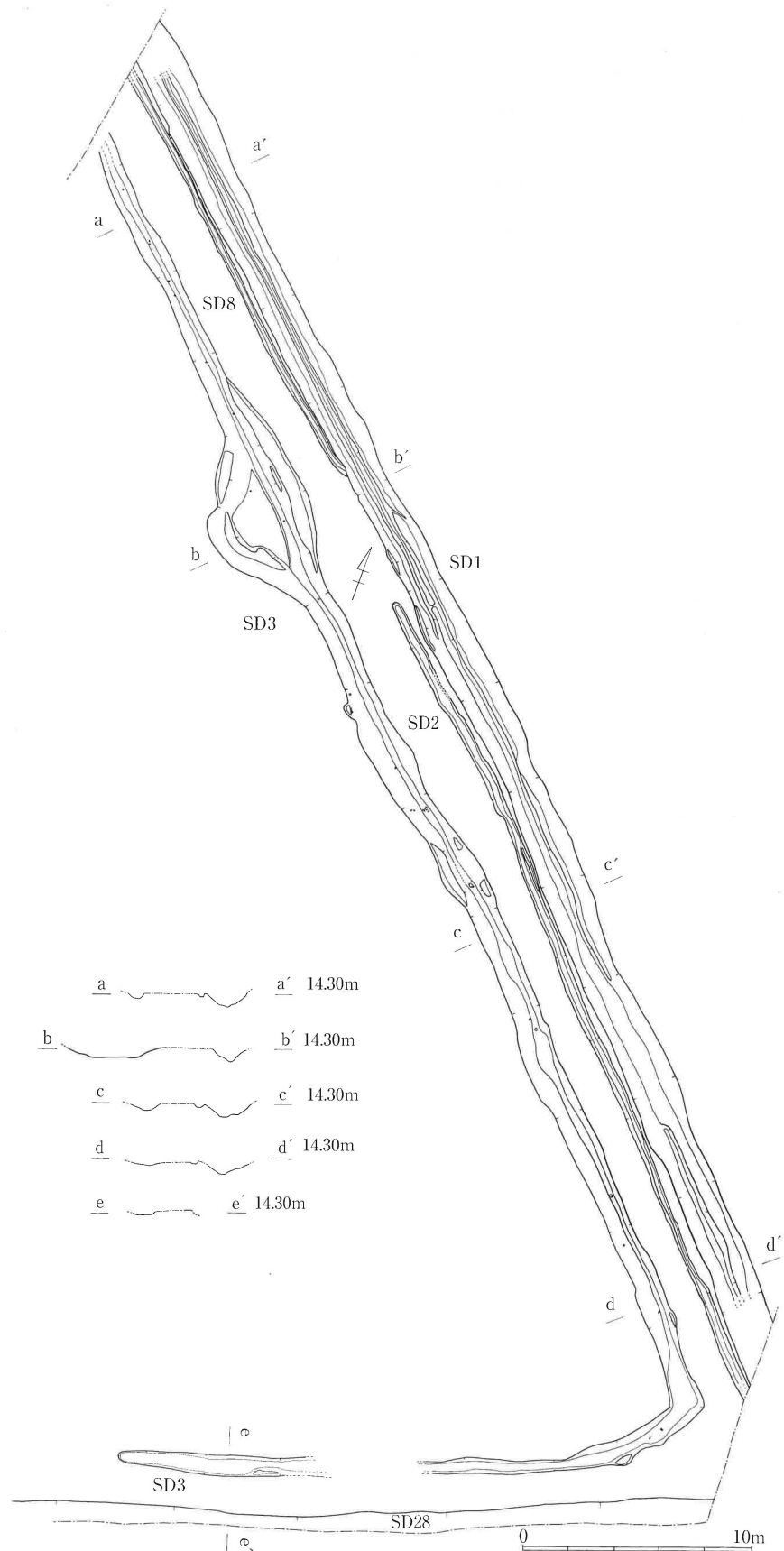
SD2・SD8 溝SD1を切って掘られた小溝で水路と考えられる。断面はU字形。溝SD1の下層に当たる部分を

切っている。溝SD1とSD8とは連続する可能性が高い。

SD3 逆L字状に掘削された水路遺構である。途中に水溜のような拡張部があり水深も深い。断面は逆台形からU字形である。出土遺物はいずれも偶然に混ざりこんだ土器片であり、土師質鍋の形態から見て14世紀後半ごろから使われていたものと考えられる。水流の方向は底部の深さから見て、北から南に流れていたものと推定される。

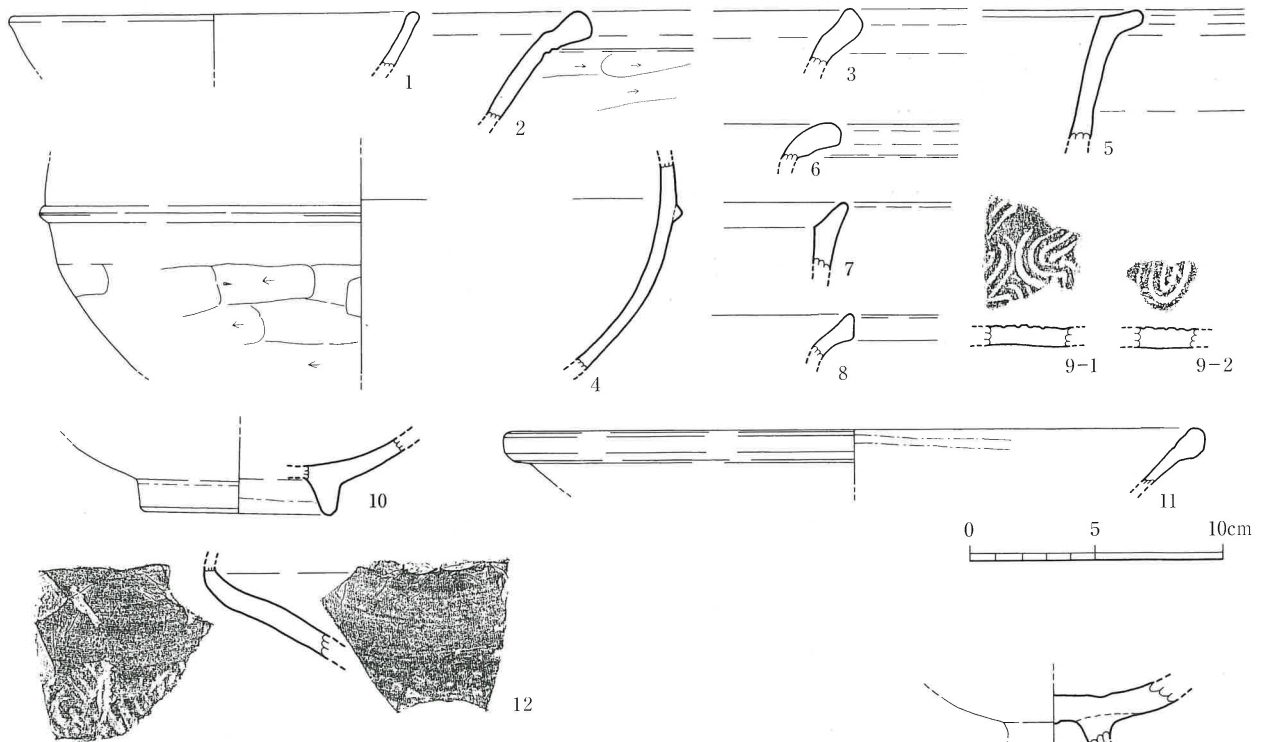
SD1出土遺物 (第3-5図)

1は口縁端部を丸くおさめた瓦質碗の口縁部片。復元口径は15.9cm。d区下層で出土した小片である。2は胴部外面をヘラ削りで仕上げた瓦質土器の鍋口縁部。内側に蓋を乗せる段をつけるために外反させる。3は軽く外反した瓦質鍋の口縁部。2と3は同一個体の可能性高い。4は胴部外面の下半を横方向のヘラ削りで調整した瓦質鍋の胴部で、胴部最大径は25.4cmで鈍い三角突帯が1条張り付く。下層出土。5~9は土師質土器である。5は土師質鍋の口縁片、内面に稜をもって鋭く外反する。6は遺構検出時に上層で発見された緩やかに外反する土師質鍋の口縁。7はd区下層出土の5とよく似たタイプの土師質鍋の口縁片。8はd区下層出土の玉縁状に肥厚する土師質鍋の口縁片。9はd区下層出土の土師質播鉢の底部片で、内面には太い櫛目によく波上のすり目が施されている。同一個体の2点が出土した。10と11は最上層の遺構検出時に発見された近世の遺



第3-4図 SD1~3, SD8, SD2 (1/300)

波上のすり目が施されている。同一個体の2点が出土した。10と11は最上層の遺構検出時に発見された近世の遺



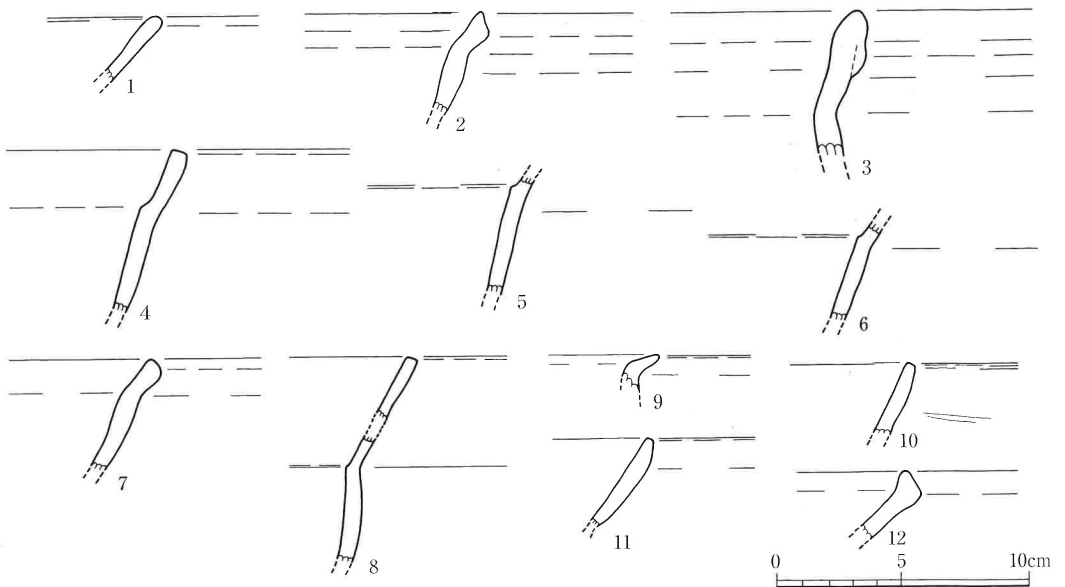
第3-5図 SD1出土遺物 (1/3)

物である。**10**は17世紀後半から18世紀に製作された肥前陶器碗の底部片である。復元底径7.4cm。**11**は玉縁状に肥厚する復元口径27.6cmの近世陶器の鉢口

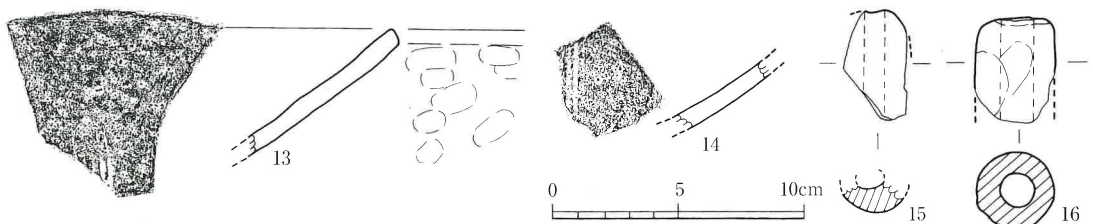
縁片。**12**はd区下層出土のほかのところから残留した古代須恵器の甕胴部、外面に格子タタキ痕が残る。

上層からは**10**や**11**のほかに17世紀後半の肥前陶器挿鉢片や18世紀以後の信楽焼の小片や、18世紀前半の肥前陶胎染付片などが出土している。

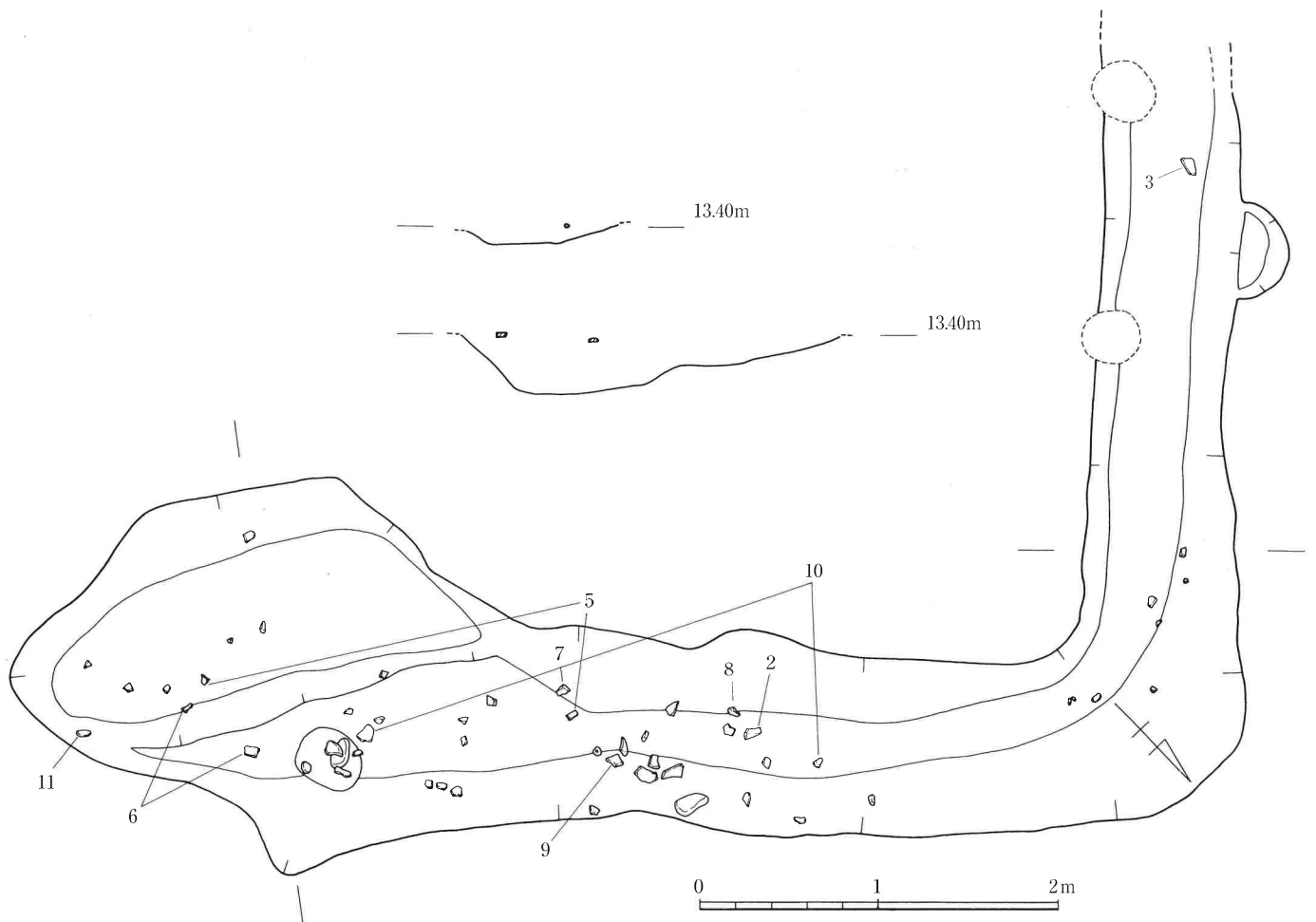
下層からは土師質の鍋などのほかに残留した



第3-7図 SD3出土遺物① (1/3)



第3-8図 SD3出土遺物② (1/3)



第3-9図 SD11 (1/40)

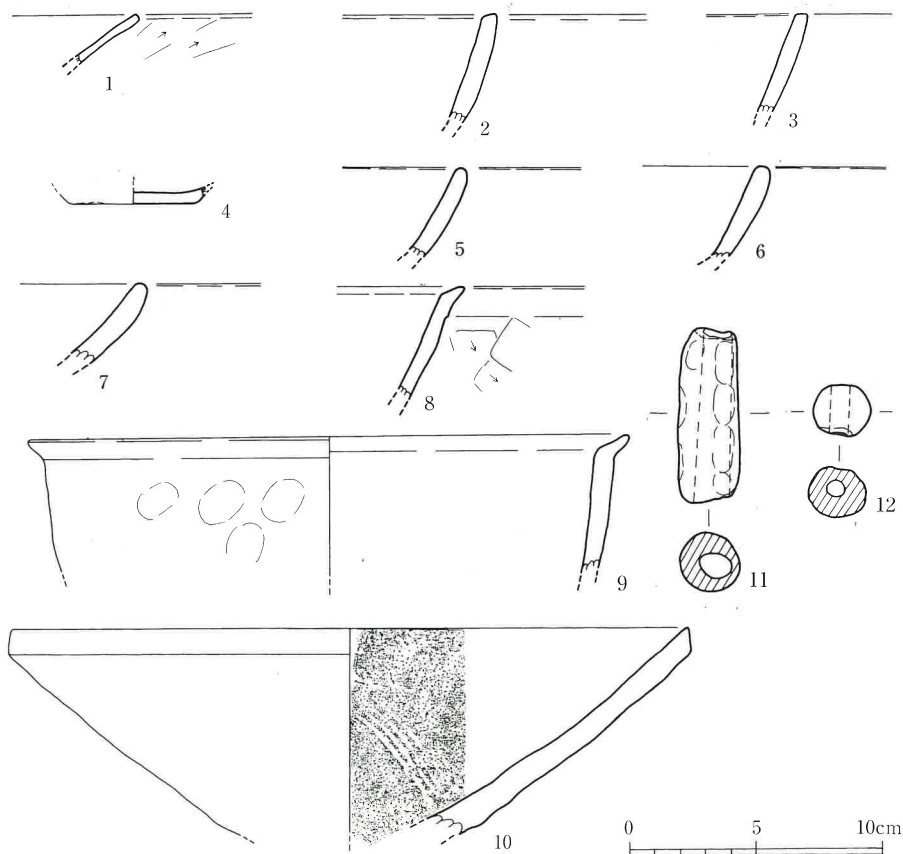
古代の須恵器などが出土している。

SD2 出土遺物

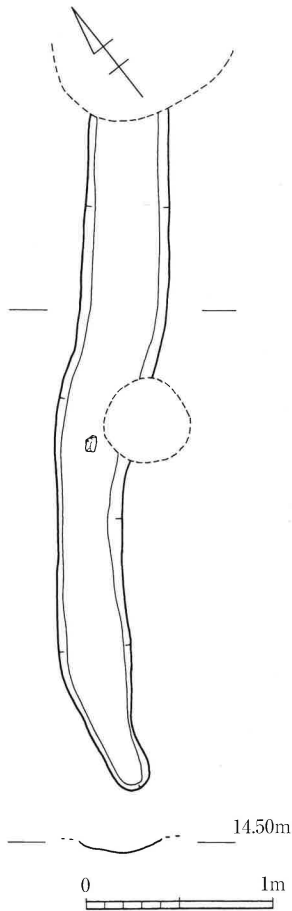
(第3-6図) 1は残留した須恵器高杯の頸部片である。ほかに図示できないが中世の土師質鍋の底部片が出土している。

SD3 出土遺物

(第3-7・8図) 1~3は瓦質土器である。1は口縁端部を丸くおさめた瓦器碗口縁片。口縁端部外面は黒灰色を呈する。2は生焼けの瓦質鍋



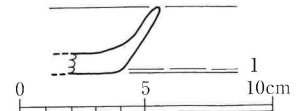
第3-10図 SD11出土遺物 (1/3)



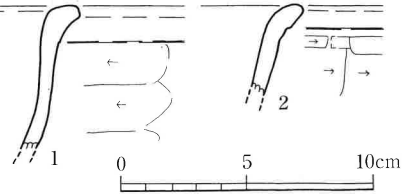
第3-11図 SD25 (1/40)

口縁部で石英の微砂粒を多量に含む。3は2と同じ胎土で作られた瓦質土器の甕口縁部で、口縁端部を外側に折り返している。4~14は土師質土器。同一個体の4と5と6は内面に蓋受けの段を作り出した土師質土器の鍋口縁片である。外面は指圧痕の残る粗いナデで調整し、内面は丁寧になでている。外面はあれて被熱の痕跡があり、使い込まれて廃棄されたものと推定される。14世紀後半から15世紀初めの遺物である。7は下部出土の生焼けの瓦質土器の可能性のある土師質鍋の口縁片、鈍く外に曲がる。摩滅が激しいので、流れ込みである。8は土師質鍋の口縁部、大きく外側に屈曲する。9は外に逆L字形に曲がる土師質鍋の口縁。10は8と

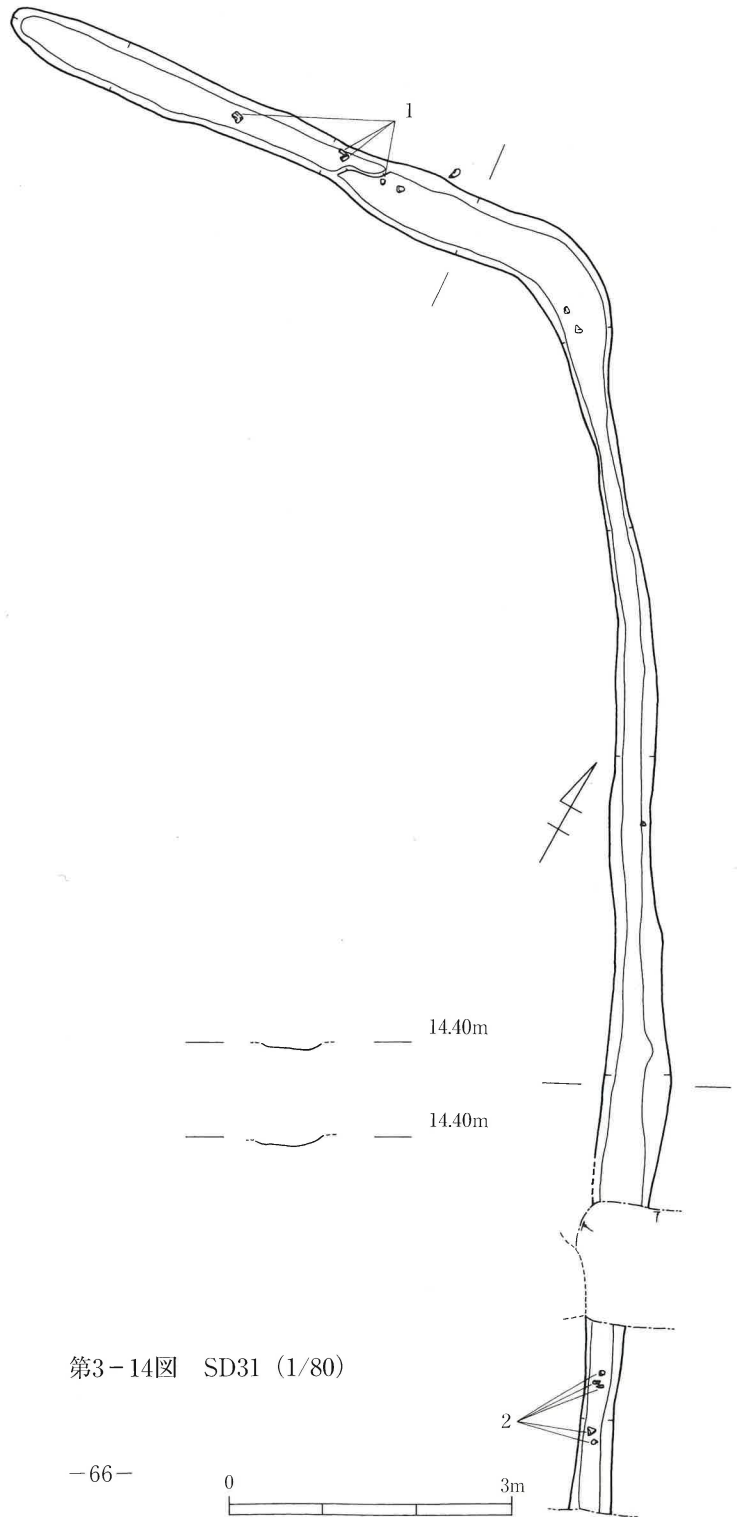
同一個体の下部出土の土師質鍋口縁片。11は溝がふくらむb区出土の土師質鉢の口縁部で、外面に煤が付着している。12は三角に肥厚してやや内湾する土師質鍋の口縁部。13は内面にすり目のみえる土師質播鉢の口縁片である。外面に指圧痕が残り、胎土には砂粒が多く、特に3~5ミリ大の青黒色の石英が多く含まれているので、同じ土師質土器でも播鉢の産地は異なっていた可能性が高い。14は13と同一胎土同一型式の土師質播鉢の破片。13と14とも磨耗がはげしくよく使用されている。15は破損した土師質の管状土錘である。径は2.4cmと太い。16も下部出土の破損した土師質の管状土錘である。径は3.1cmと太い大型品。15と16の胎土は土師質の鍋と同一である、またともに故意に破損したような不自然な割れ方をしている。ほかに土師質土器の坏、残留した須恵器坏蓋・甕の破片が数多く出土している。



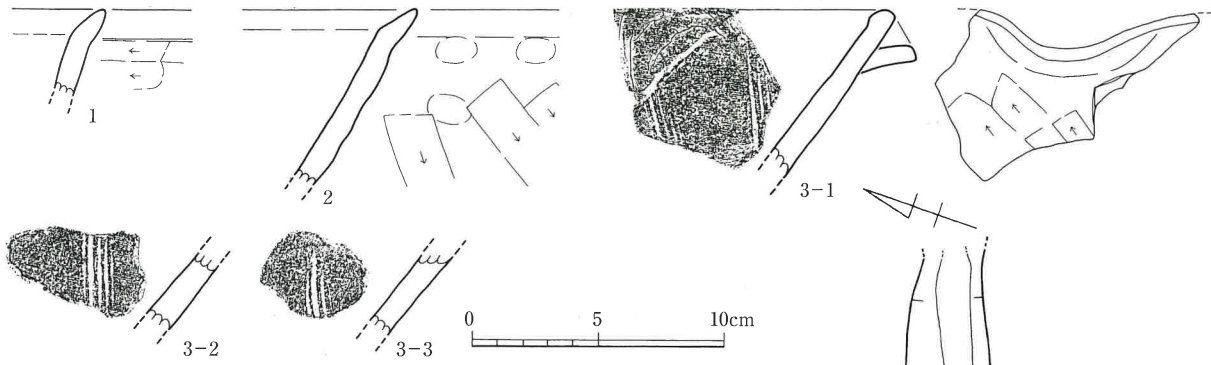
第3-12図 SD25出土遺物 (1/3)



第3-13図 SD28出土遺物 (1/3)



第3-14図 SD31 (1/80)



第3-15図 SD31出土遺物 (1/3)

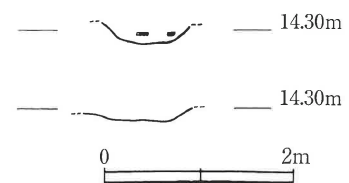
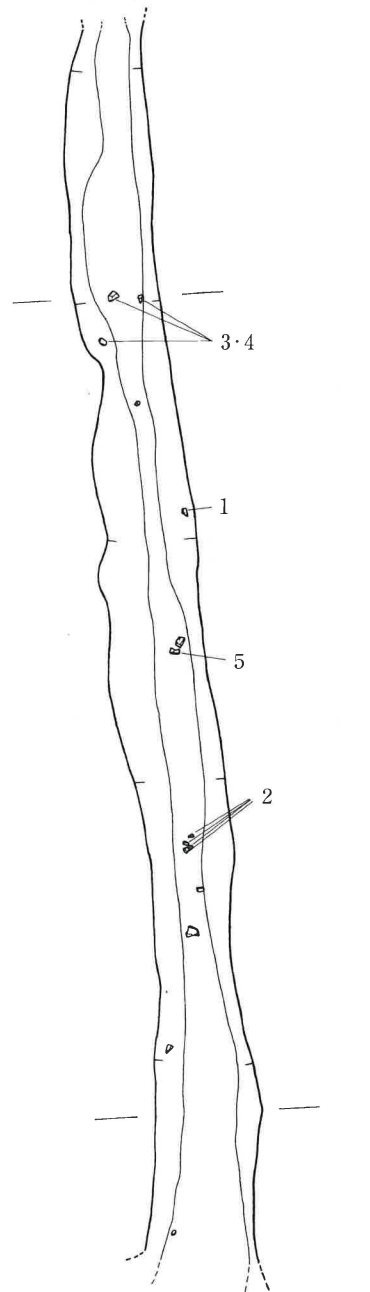
SD11 (第3-9・10図)

SP64を切って掘られたL字形の区画溝である。長さ7mと5m、幅1~1.5m、深さ0.3m。断面は浅い逆台形をなす。埋土は炭焼土を含む黒色土の単層。出土遺物は多量だが、いずれも細片がまとまって廃棄された状態である。土錘が混じっているのが特徴である。

1~3は瓦質土器である。1は薄手の瓦器碗口縁片で、外面にヘラ削りが施されている。2は瓦質鍋口縁、外面は磨耗し使用のあとが伺われる。3は同じく瓦質鍋口縁片。2と同一個体の可能性あり。4は回転糸切離しの土師器小皿底部、復元底径は5.0cm。5と6は外面に煤の付着した土師器鍋口縁片。7はもやや内湾する土師質鍋の口縁で、外面に煤が付着していた。8は口縁端部が外反し、外面を削って仕上げる土師質土器の鍋。9は口径が23.8cmに復元される土師器の口縁で、端部は外に屈曲する。外面は指圧痕が残る。10は土師質の播鉢で内面に散漫なすり目がのこる。胎土には石英が大量に含まれる粗い胎土を利用している。復元口径は26.8cmである。11は長さ6.8cm、最大幅2.4cm、重さ35.9gの土師質の管状土錘である。完形のまま出土した。軸に粘土を巻きつけて指で握って成形したと考えられる。12は土玉あるいは管状土錘と考えられる土製品。長さ2.0cm、幅2.2cm、口径0.7cm。重量は8.4gの完形品。ほかに残留した須恵器の甕片などが多い。



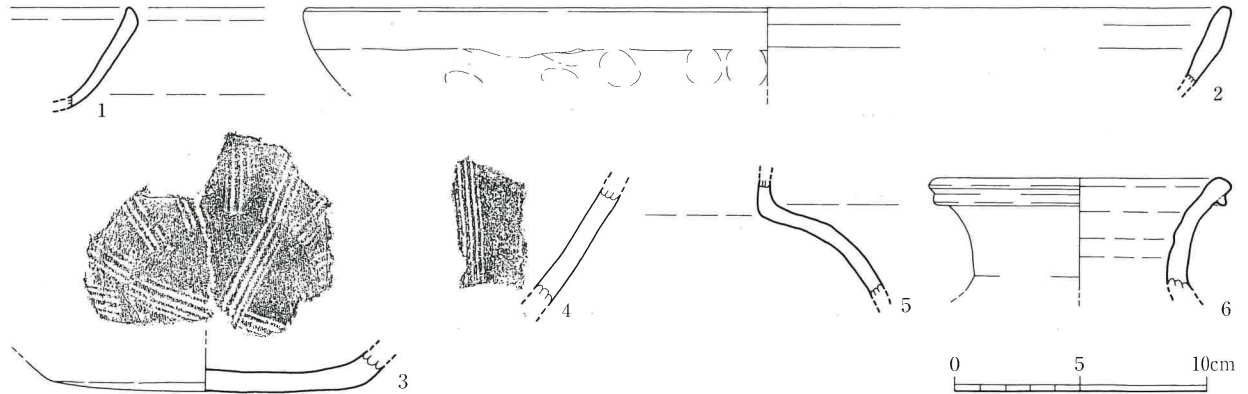
SD44



第3-16図 SD44 (1/80)

SD25 (第3-11・12図)

F3区で発見されたS-22に切られた長さ3.5m、幅0.4m、深さ0.1m断面皿状の細く短い溝である。埋土は黒色土の単層。1はこの溝中唯一の出土品



第3-17図 SD44出土遺物 (1/3)

である。底部回転糸切の土師質坏の破片。数点に割れて混入していた。

SD28 (第3-13図)

調査区の南端で一部を検出した溝で、時期は不明である。

1と2は口縁が外反し、外面を削って仕上げる土師質土器の鍋。ほかに瓦質土器の破片2点と土師器鍋の破片が数点出土している。

SD31 (第3-14・15図)

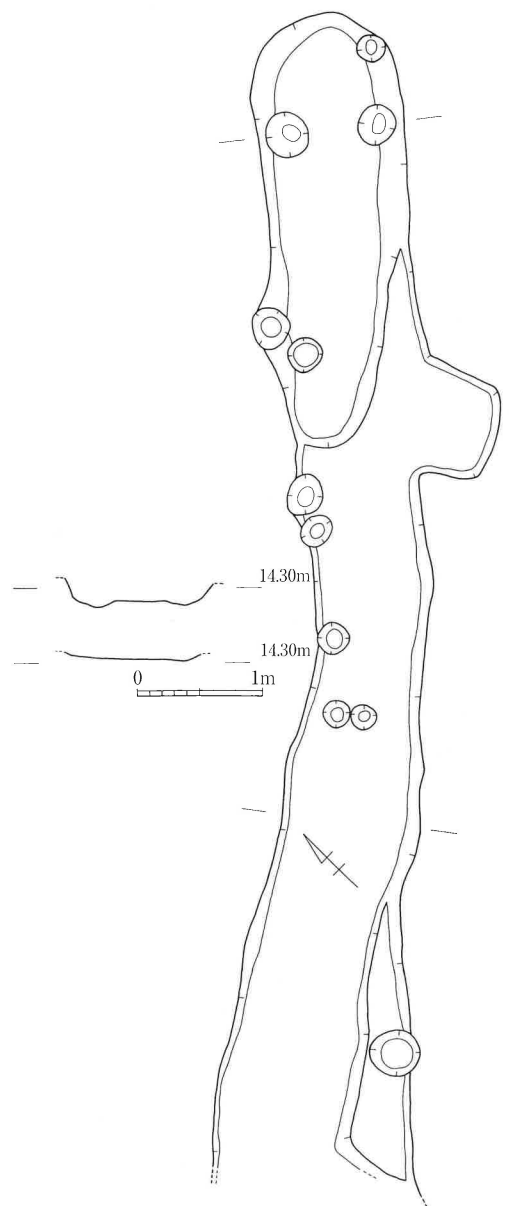
土坑SK30を切って掘られたL字形の区画溝である。溝は鈍角に曲がり断面は浅い皿状であり、長さ20m、幅0.6m、深さ0.2m。溝SD28に切られている。また溝SD44と接続する。埋土は黒色土の単層で炭焼土や土器片を含む。7世紀代の須恵器片が多く残留している。遺物は埋土中に小片が散在するものである。

1と2は口縁が外反し、外面を削って仕上げる土師質土器の鍋。2のほう削りが浅く外面に指圧痕が残る。3の3点は同一個体の土師質播鉢の片である。外面は削りで仕上げる。ほかに土師質の鍋や坏の破片、14世紀以後の瓦器碗の口縁や、残留した須恵器甕3点の破片が出土している。

SD44 (第3-16・17図)

溝SD55に接続する直線的な溝である。長さ12m、幅1.1m、深さ0.2m。断面は皿状である。埋土は黒色土の単層で土器片を含む。遺物は埋土中に小片が散在するもので15世紀代の遺物が多い。

1は土師質の鉢口縁で、端部をわずかに内湾させる。2は口径が36.6cmに復元される土師質鍋の口縁部で外面に煤が付着する。3と4は同一個体と推定される土師質の播鉢底部で、5本1単位のすり目がのこり、底面は十字型に直交させ、内面はよく使い込んで摩滅している。5は土師質の壺頸部。6は残留した須恵器甕口縁で、復元口径は12.0cmと小ぶりである。ほかに瓦器碗口縁、土師質坏の破片が出土している。



第3-18図 SD52 (1/60)

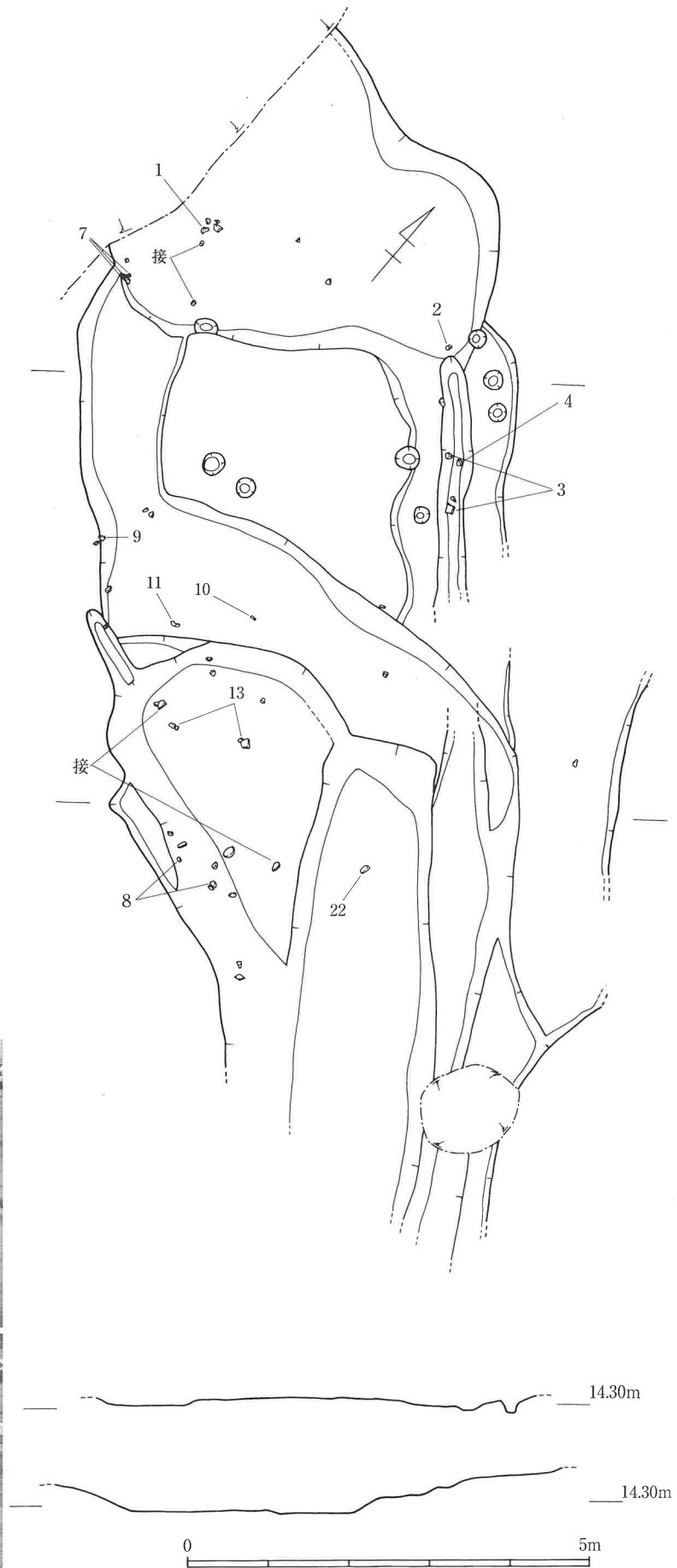
SD52 (第3-18図)

溝SD53に接続する溝である。長さ9.3m、幅1.4m、深さ0.2m。断面は浅い逆台形である。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で土器片を含む。この土層は土坑SK39と同じ土である。図示できるものはないが、瓦器碗や土師質鍋の破片が出土している。

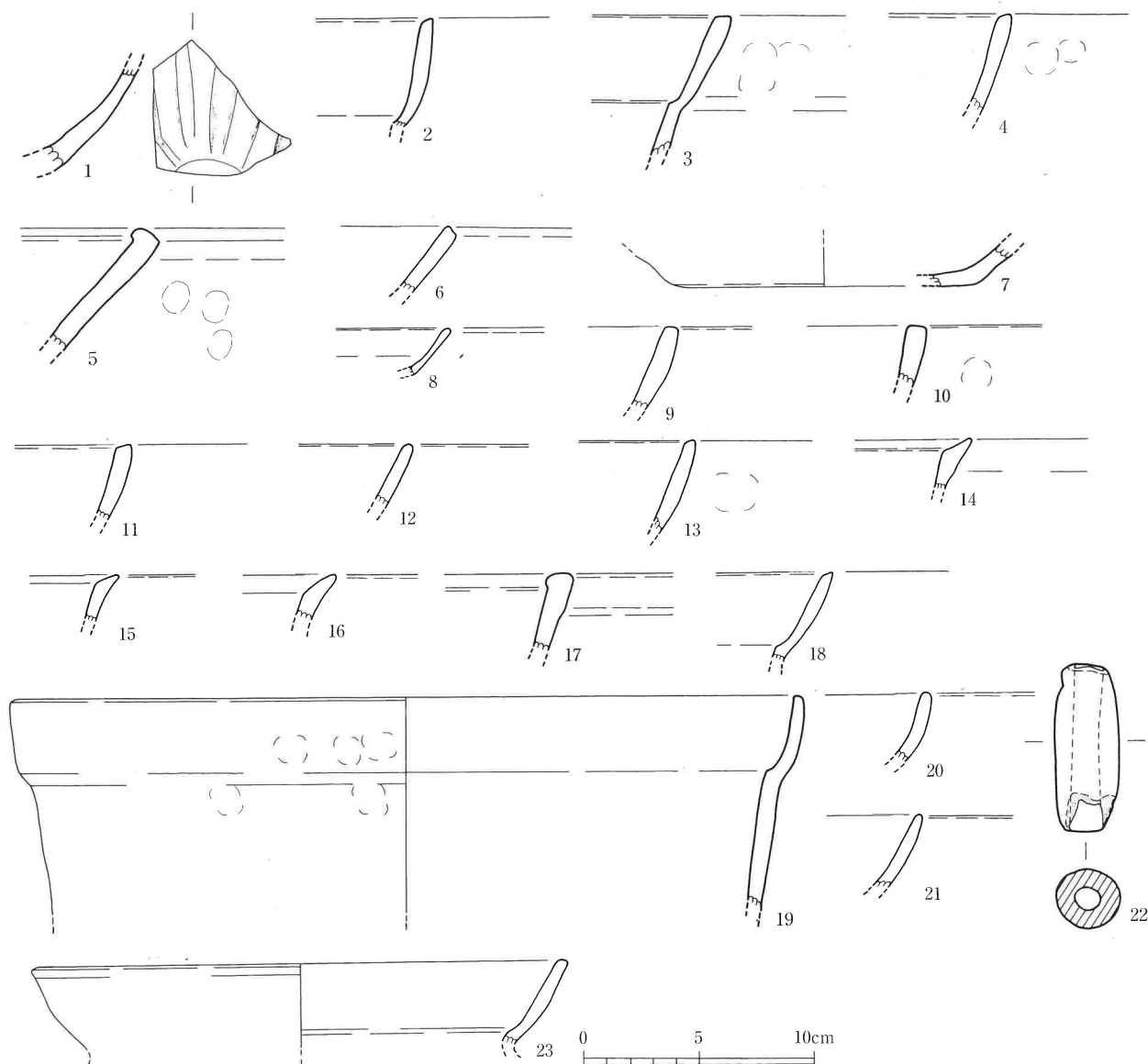
SD53 (第3-19・20図)

溝SD52と接続する複雑に絡み合っている。南側の深い部分（深さ60cm）が中心で、北側は浅い土坑から伸びた2条の浅い溝が深い部分に注ぎこむような構造である。内部からは多数の土器片が散在して発見された。

1は中国龍泉窯産青磁碗で外面に鎬連弁文をもつ13世紀ごろの製品。2~4は途中に段をもつ瓦質鍋口縁部。5は口縁端部を内側に張り出させる瓦質播鉢口縁部。6も瓦質の鍋の口縁部。7は復元底径13.2cmの土師質鉢の底部片。8は土師質小皿の口縁部。9と10.11~13は土師質鍋口



第3-19図 SD53 (1/80)



第3-20図 SD53出土遺物 (1/3)

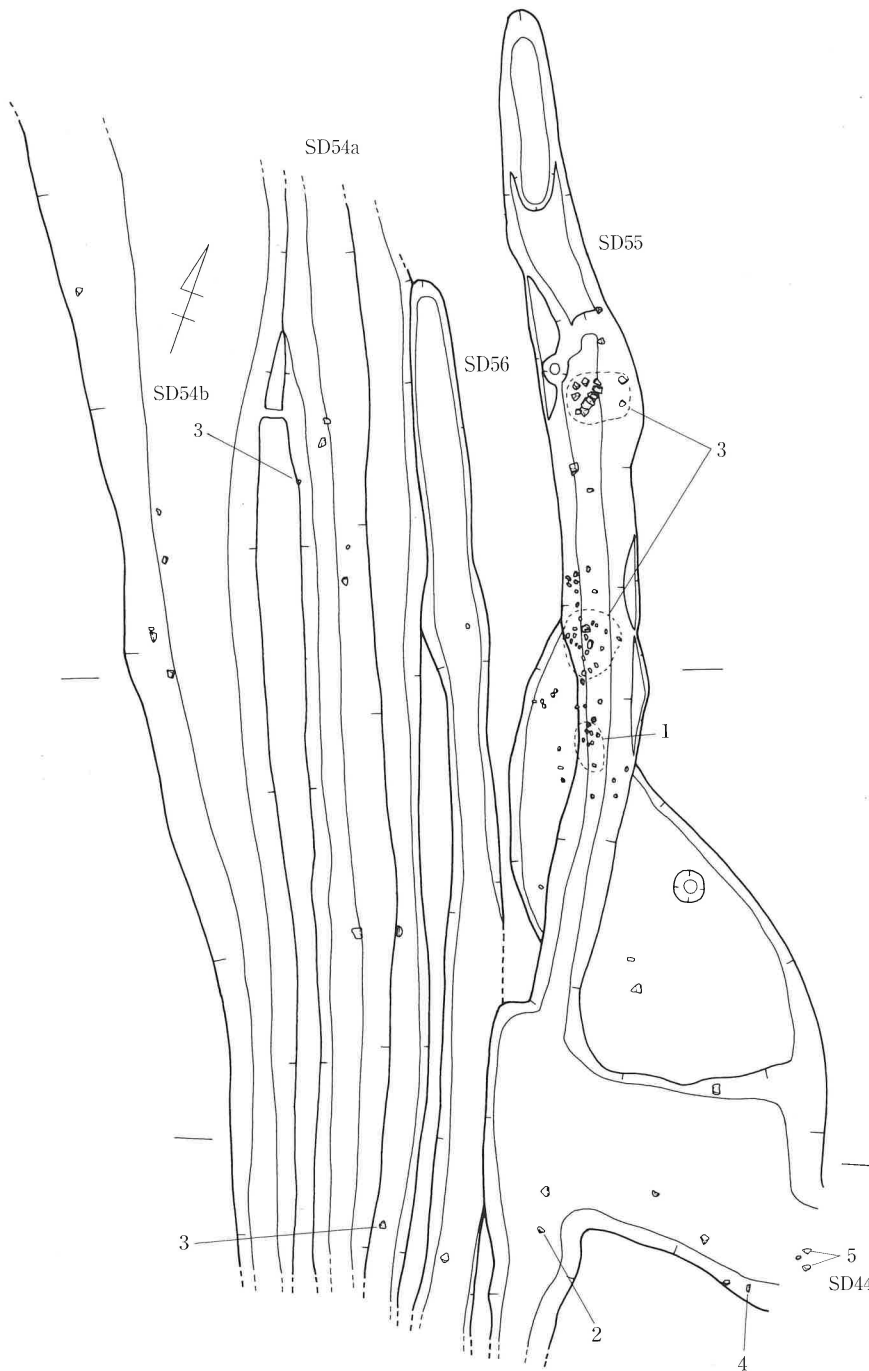
縁。14~16は端部を外方に尖らせる土師質鍋。17は端部を内側に丸く収める土師質鍋の口縁。18は内面に段をもつ土師質の鍋口縁部。19は内面に段を有する土師質鍋の口縁で口径は34.0cmに復元される。20と21も土師質鍋の口縁片。22は一部欠損した土師質の管状土錘。長さ7.2cm、最大幅2.8cm。23は残留した古墳時代前期の布留式土器の甕口縁部で内湾した口縁は前期後半のものである。

SD54、SD55、SD56 (第3-21図)

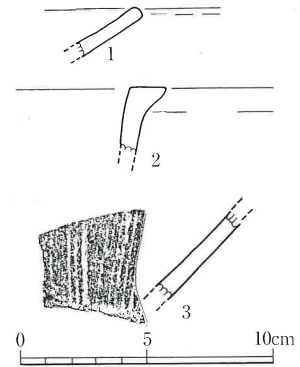
溝SD54は、SD53に接続する2条の溝であり、東側の溝をSD53a溝、西側の溝をSD53c溝とした。いずれも断面皿状の溝である。北に行くほど深くなって溝SD53の最も深い付近に接続する。したがって水が流れた場合南から北に流れることになる。出土遺物は破片で散在し、まとまってはいない。

SD55はSD44に接続する溝で、やや湾曲する。長さ13m、幅1.1m、深さ0.2m。断面は皿状である。埋土は炭焼土を多く含む暗褐色軟質土の単層で土器片を多く含む。特に中央部に土器片が集中する。

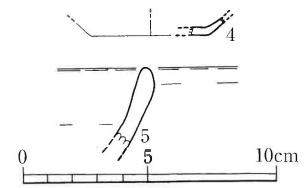
溝SD56は直線的な浅い溝である。長さ11m、幅0.6m、深さ0.1m。断面は皿状である。やや西に傾いた南北方



第3-21図 SD54ab・SD56・SD55 (1/80)



第3-22図
SD54a溝出土遺物 (1/3)



第3-23図
SD54b溝出土遺物 (1/3)

向の溝である。埋土は暗褐色軟質土の単層で土器片を含む。埋土中に碎片化した土器片が少数散在している出土状態である。

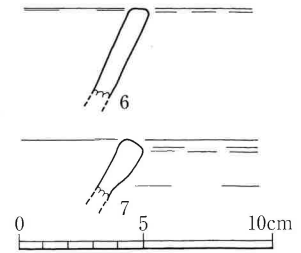
SD54a溝出土遺物 (第3-22図) 1は外面が黒灰色になった瓦器碗口縁部。2は逆L字型に外反する土師質鉢の口縁部。3は瓦質の播鉢片で、内面のすり目は密である。ほかに土師質の鍋、残留した須恵器甕の破片が出土している。

SD54b溝出土遺物 (第3-23図) 4は15世紀代のいわゆる大内系の土師質小皿底部片、復元定形は4.6cmで、胎土はきめ細かく精良で砂粒が少ない。白色に近い淡黄色である。5は土師質の鍋口縁部。ほかに残留した須恵器甕の破片が出土している。

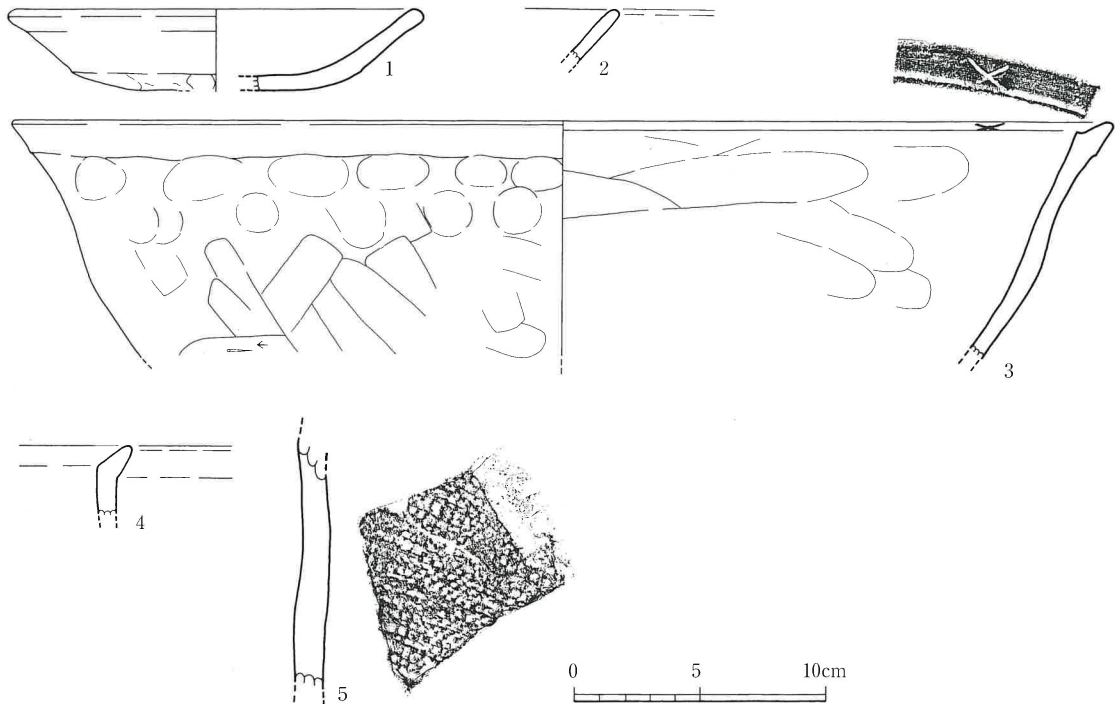
SD54下部出土遺物 (第3-24図) 6は土師質鍋、7は端部を外に肥厚させる土師質鍋口縁で

外面に煤が付着している。

SD55出土遺物 (第3-25図) 1は高台のまったく消失した型式の瓦器碗で口縁外面が青灰色である。復元口径15.6cm底外面は未調整で亀裂が走る。2も同じ瓦器碗の口縁部。3は口径が43.6cmに復元される土師質の鍋である。口縁上面に蓋受けの段になるように調整し、内面は横方向の平滑なナデで仕上げ、外面はヘラ削りで成形する。口縁上面の平坦面に×印のヘラ記号がある。外面には煤が付着している。4は口縁端部を外上方に折り曲げる土師質の鍋で、内面に焦げ付きの煤が付着している。5は瓦質の甕の胴部片で、外面に格子タタキがみられる。

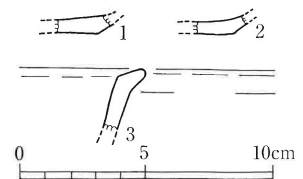


第3-24図
SD54下部出土遺物 (1/3)



第3-25図 SD55出土遺物 (1/3)

SD56出土遺物 (第3-26図) 1と2は回転糸切の土師質土器の坏底部片。2は口縁端部を外上方に折り曲げる土師質の鍋。ほかに瓦質土器の鍋片1点、土師質坏底部片2点と土師質の細片2点が出土している。

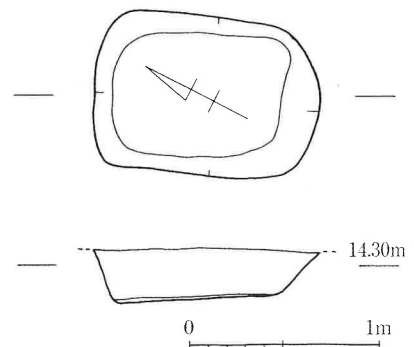


第3-26図
SD56出土遺物 (1/3)

3-3 土坑

SK7 (第3-27図)

長さ1.2m、幅0.85m、深さ0.3mの長方形の人為土坑である。埋土は上下2層にわかれ、下層は黄色の基盤層ブロックがつまり、上層は黒色土である。古代の須恵器の甕片1点出土している。ほかに遺物がないので断定できないが、須恵器を残留とみなして、周囲の遺構と同じ中世の遺構とみなすか、須恵器のみしかないと理由に古代の遺構とするか判断が分かれる。



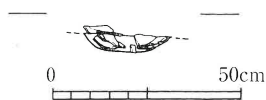
第3-27図 SK7 (1/40)

SX10 (第3-28・29図)

F4区で発見された土師器の鍋を埋設した遺構であるが、本稿では土坑

の中に含めて報告する。浅い土坑の底部に土師器鍋を正位に密着させて安置したものである。復元した鍋の状態から、鍋の底部は穿孔されていたものと推定される。鍋は実際に調理用に使用されており、底部を先行して地面に埋設することで別な用途に転用したものと推定される。

1はその土師質の鍋下半である。上半はすでに後世の水田化により消失しているが、胴部の径は24.8cmとかなり小型の鍋である。内面は平滑にナデで仕上げられ、外面はヘラ削りにより底部にいくほど薄くなるように仕上げられている。外面には煤が付着し、内面にも黒色に変化した部分が認められるので、明らかに鍋として実用に供されていたものである。底部中にいいには径7センチほどの故意に抜かれた穿孔がある。



第3-28図 SX10 (1/20)

SK13 (第3-30図)

F4区発見の底部が二段になる長円形土坑である。長さ2.7m、幅0.8m、深さ0.25m。埋土は3層に別れるが出土遺物が一切なく、時期は不明である。

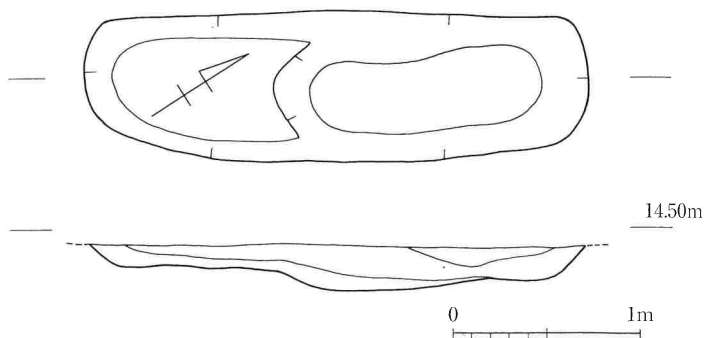


第3-29図 SX10出土遺物 (1/3)

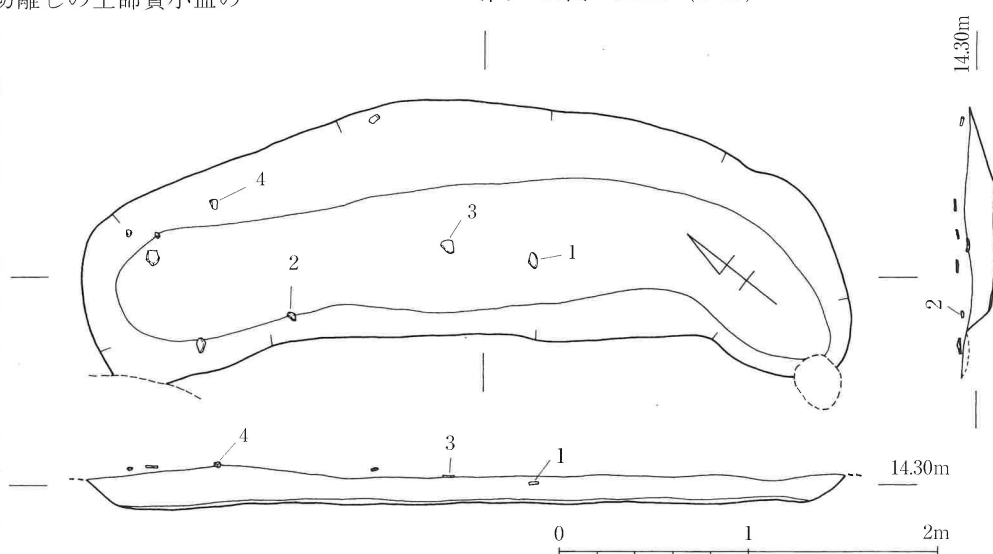
SK29 (第3-31・32図)

G4区で発見された二段掘りのややゆがんだ長円形の土坑で、断面は浅い皿状。長さ4.1m、幅1.2m、深さ0.2m。埋土は2層から成り、上層は明灰褐色土、下層は黒色土である。内部には土器片が多いが、すべて細片として発見された。廃棄土坑として掘られたもので、出土遺物からみて15世紀の遺構と考えられる。

1は回転糸切離しの土師器坏底部、復元底径は9.6cm。2も糸切離しの土師質小皿の口縁片で、器高は1.5cmほどである。3は高台のまったく消失した型式の瓦器碗で口縁外面が青灰色である。復元口径15.6cm底外面は未調整で亀裂が走る。溝SD55の1とは法量をふくめて極似している。4は中世の須恵質陶器の播鉢片である。すり目は疎である。ほかに内面に段をも



第3-30図 SK13 (1/40)

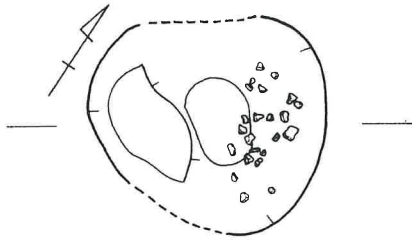


第3-31図 SK29 (1/40)

つ土師質鍋1点、土師質坏あるいは小皿の破片が出土している。

SK30 (第3-33図)

H5区発見の長さ0.95m、幅0.9m、深さ0.25mの円形土坑で、溝SD31に切られる。埋土は黑色土の単層で土器片を含む。内部からは古代の須恵器の甕、土師器甕口縁や、同一胎土の土師器碎片が30数点出土している。いずれも図示できるほど復元できなかったが、古代の遺物であるので、この土坑SK30は古代の遺構と考えられる。

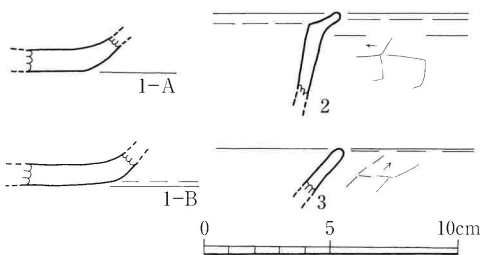


第3-33図 SK30 (1/30)

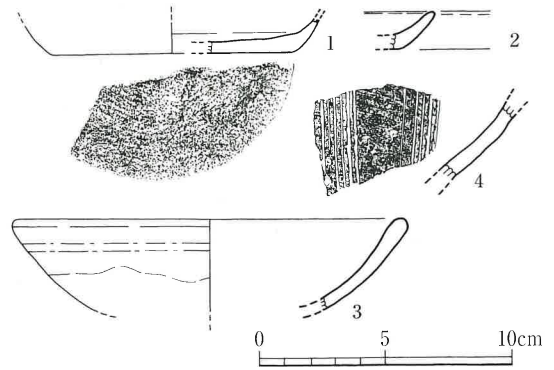
SK34 (第3-35・36図)

G6・H6区発見の方形土坑である。長さ3.1m、幅2.0m、深さ0.2m。埋土は黑色土の単層で、内部からは土器片が少量散在して出土している。

1は回転糸切離しの土師器坏底部。2は口縁端部を外に屈曲させて受けを作った土師質鍋の口縁片である。外面は削り調整で成形し、煤が付着している。3は瓦質の坏完形の、外面に削りがみられる。



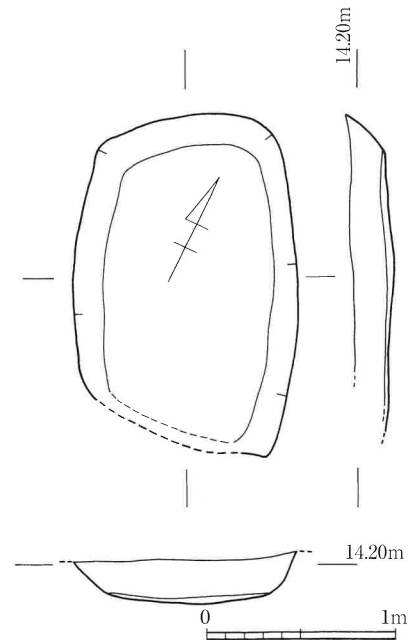
第3-36図 SK34出土遺物 (1/3)



第3-32図 SK29出土遺物 (1/3)

SK33 (第3-34図)

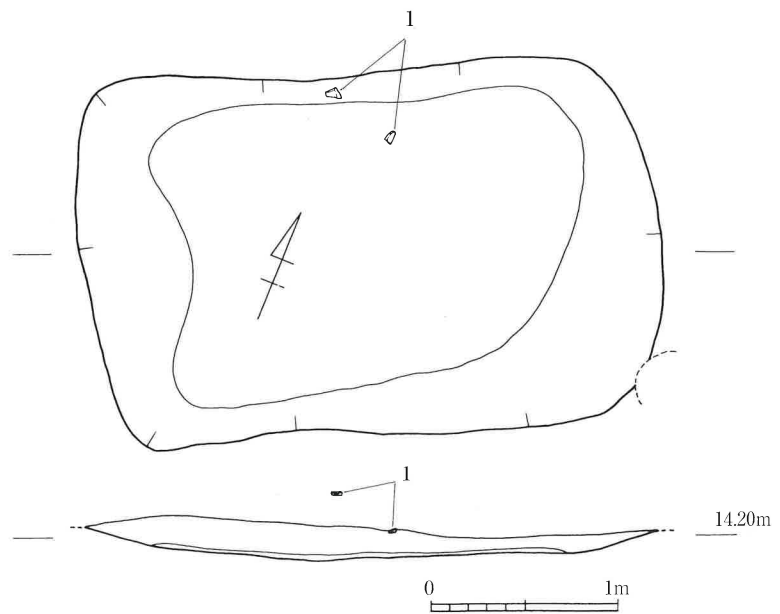
H6区出土胴張り長方形の土坑で長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.25m。風倒木痕の可能性あり。内部から中世の土師質鍋の破片が3点出土している。



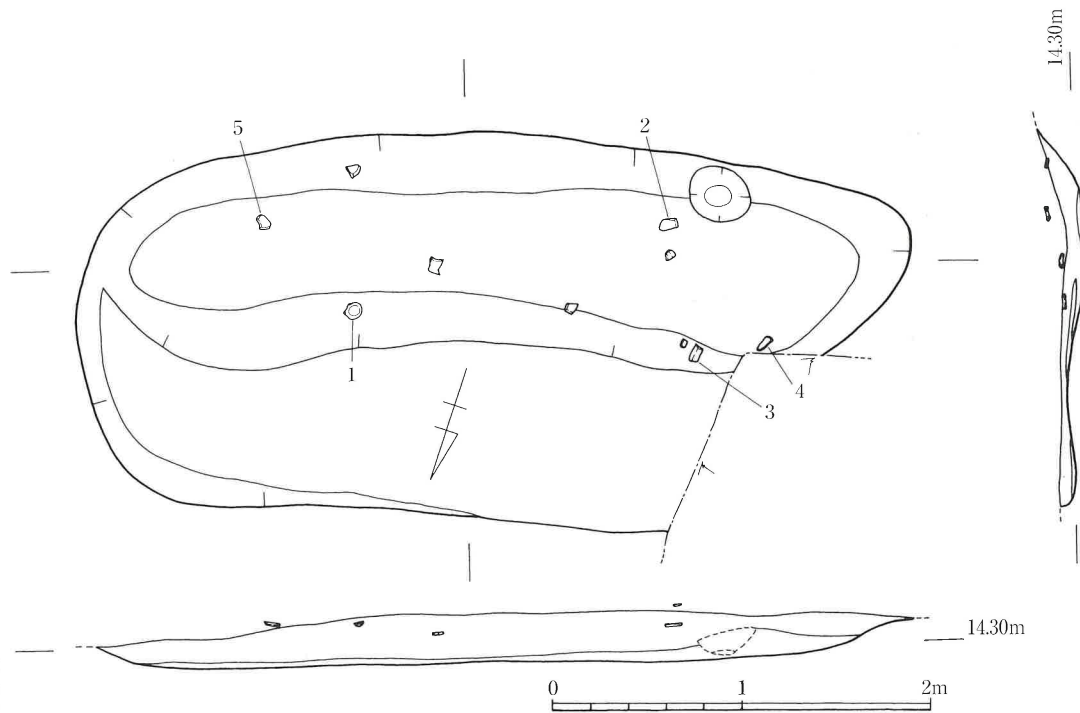
第3-34図 SK33 (1/40)

SK35 (第3-37・38図)

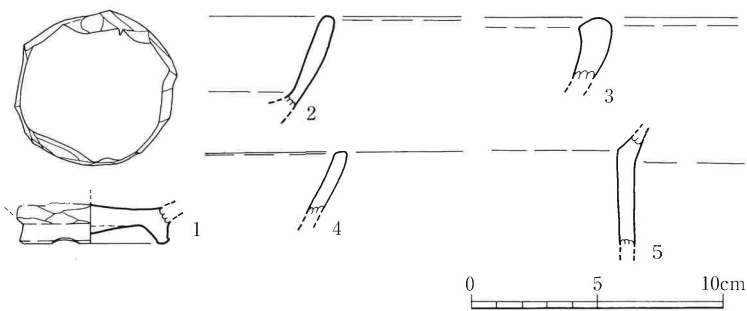
H2区出土の土坑で長さ4.4m、幅2.0m、深さ0.3m。遺構同士の切合関係はないが南側が深い。埋土は炭焼土と地山ブロックが混じる暗茶褐色軟質土の単層で、下部のほうブロックが多い。青磁碗は打ち欠かれて、高台を上に向けて出土したという遺物の廃棄の状況から祭祀行為が



第3-35図 SK34 (1/40)



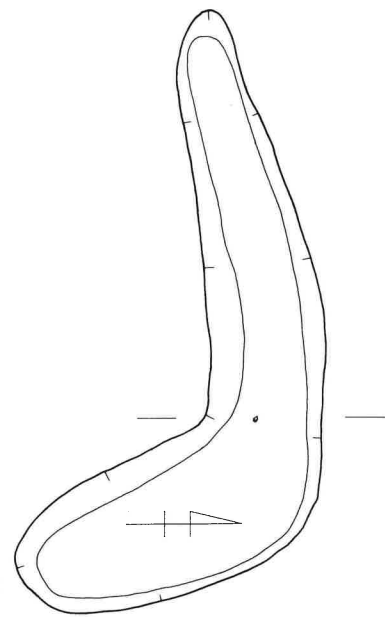
第3-37図 SK35 (1/40)



第3-38図 SK35出土遺物 (1/3)

行われていると推定される。土器片と中国製青磁碗の破片があり、出土遺物から中世の遺構である。

1は口縁全周を打ちかかれた中国龍泉窯産青磁碗の底部である。底径は5.9cm。2は内面に段をもつ土師質鍋の口縁部。3は口縁を内につまみ出すように肥厚させる瓦質鍋の口縁。4と5は瓦質鍋の口縁。ほかに瓦質鍋、土師質土器の碎片や、残留した須恵器の甕、上部から混入した18世紀後半の肥前染付け碗の小片が出土している。



SK36 (第3-39図)

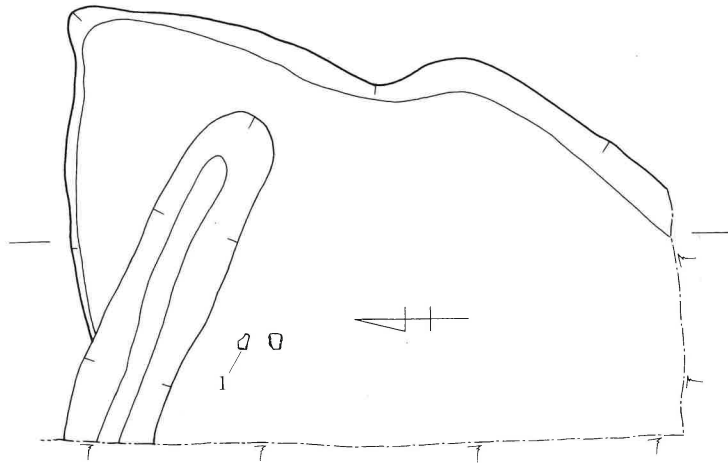
12区で検出された逆L字形の土坑で、長さ3.5m、幅0.8m、深さ0.1m。遺構同士の切合関係はない。埋土は暗褐色土の単層で、内部からは土師質土器の細片が1点出土している。中世の遺構である。



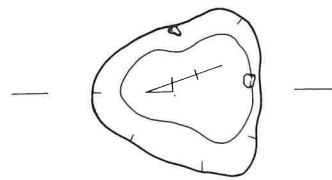
第3-39図 SK36 (1/40)

SK37 (第3-40・41図)

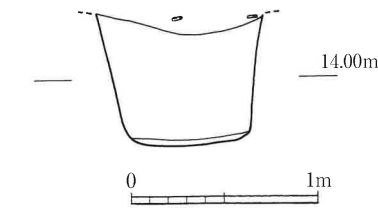
H2区で検出された不整形土坑で一部溝状に深い箇所がある。長さ4m以上、幅2.5m以上、深さ0.2m。遺構同士



第3-40図 SK37 (1/40)



第3-42図 SK39 (1/40)



SK42 (第3-44図)

H4区で検出された方形の小土坑で、長さ0.65m、幅0.55m、深さ0.05m。遺構同士の切合関係はない。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で柱穴SP38の埋土とよく似ている。内部からは瓦器碗の破片2点が出土しているほか、被熱した粘土が出土している。

SK43 (第3-45・46図)

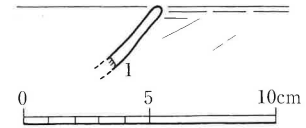
H4区で検出された不整形土坑である。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で柱穴SP38の埋土とよく似ている。内部からは土器片が出土している。

1は高台のまったく消失した型式の瓦器碗で口縁外面が暗灰色である。2は高台のまったく消失した型式の瓦器碗で口縁外面が灰白色である。復元口径は15.8cmである。ほかに格子タタキのある中世の土師質鍋の破片や瓦質土器の甕、残留した古代の須恵器片が出土している。

SK47 (第3-47図)

G4区で検出された長円形の土坑で、二つの土坑が重複している可能性もある。長さ2.2m、幅0.9m、深さ0.2m。

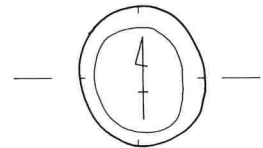
の切合関係はない。埋土は暗褐色土の単層で、内部からは土器片が出土している。中世の遺構である。1は土師質の坏の口縁で、端部を丸く収める。



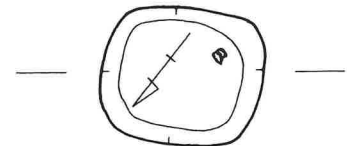
第3-41図 SK37出土遺物 (1/3)

SK39 (第3-42図)

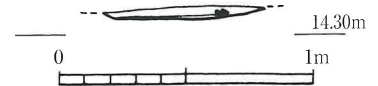
H4区で検出された不整形土坑で、長さ0.9m、幅0.9m、深さ0.7m。遺構同士の切合関係はない。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で柱穴SP38の埋土とよく似ている。内部からは中世の土師質鍋の細片が2点出土しているのみである。

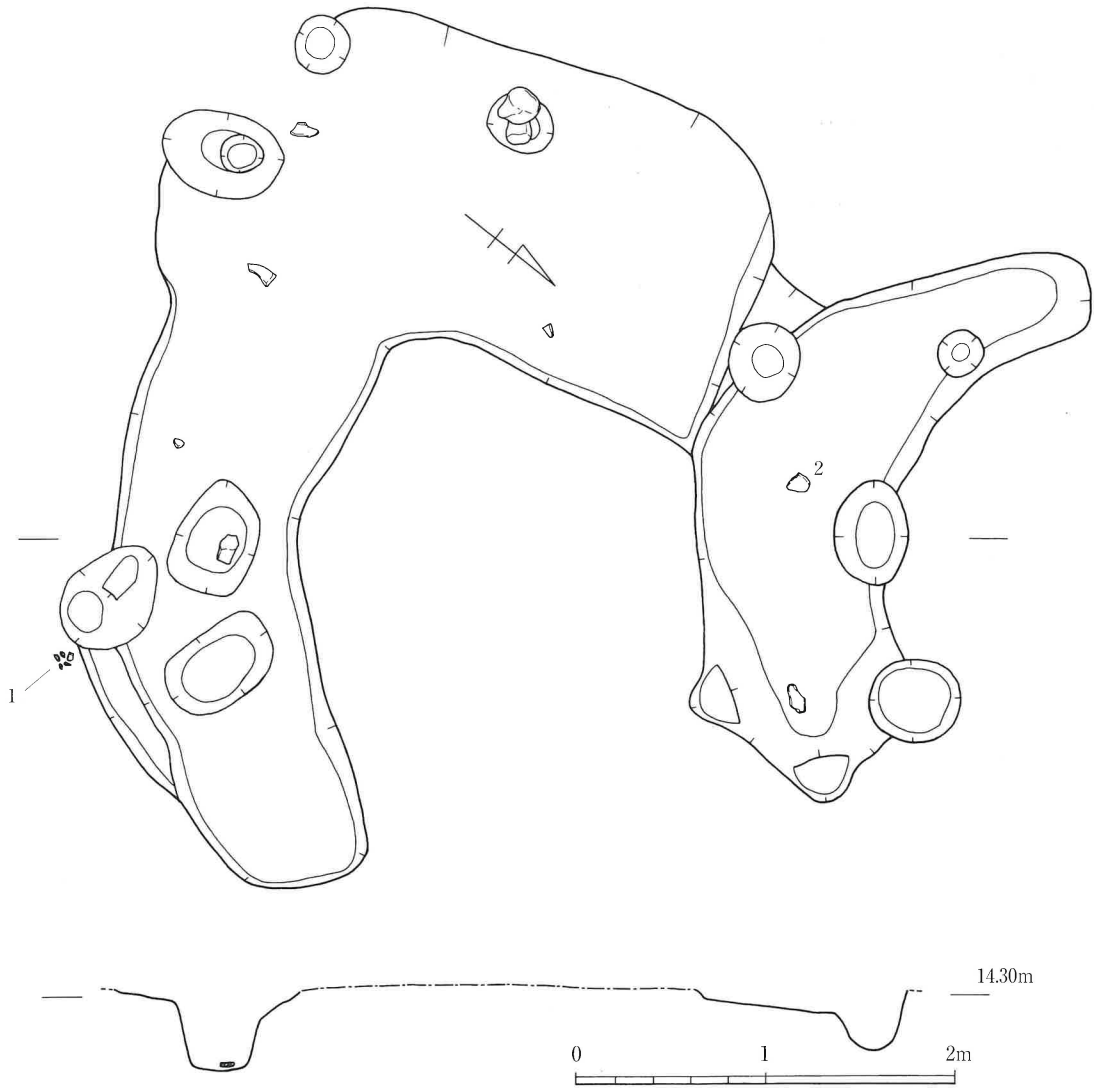


第3-43図 SK41 (1/40)



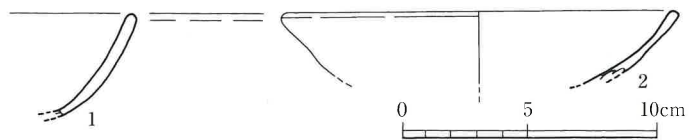
第3-44図 SK42 (1/30)



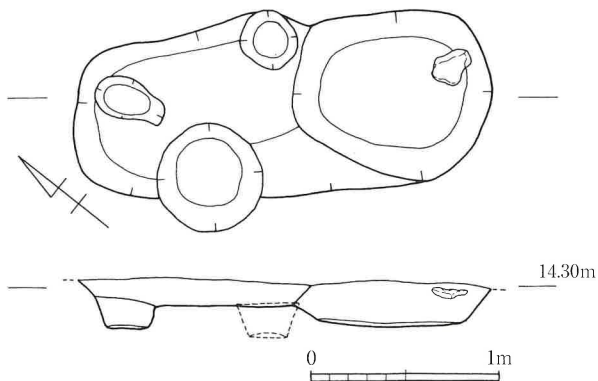


第3-45図 SK43 (1/40)

遺構同士の切合関係はない。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で柱穴SP38の埋土とよく似ている。内部からは土師器小片が3点出土している。古代の遺構である可能性がある。



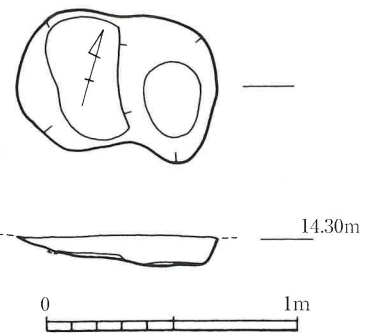
第3-46図 SK43出土遺物 (1/3)



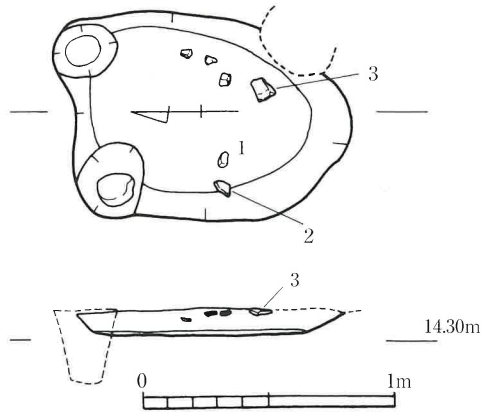
第3-47図 SK47 (1/40)

SK48 (第3-48図)

H3区で検出された不整形の土坑で、長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.1m。二つの遺構の重複の可能性もある。遺構同士の切合



第3-48図 SK48 (1/30)



第3-49図 SK50 (1/30)

関係はない。埋土は炭焼土を多く含む暗褐色軟質土の単層である。内部からは中世の土師質鍋の細片1点が出土している。

SK50 (第3-49・50図)

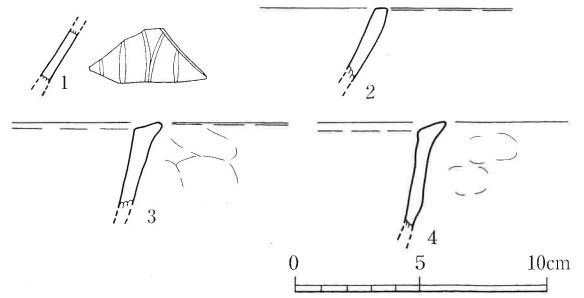
G3区で検出された不整形の土坑で、長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.1m。遺構同士の切合関係はない。埋土は炭焼土を多く含む淡茶暗褐色軟質土の単層である。内部からは多くの土器片が出土している。

1は鎬連弁文をもつ中国龍泉窯産青磁碗の破片で、13世紀のものである。2は内面に蓋受けの段のある型式の土師質鍋の口縁部。3と4は口縁端部を外上方につまみ出す土師質鍋の口縁で、外面は指圧痕を残す。

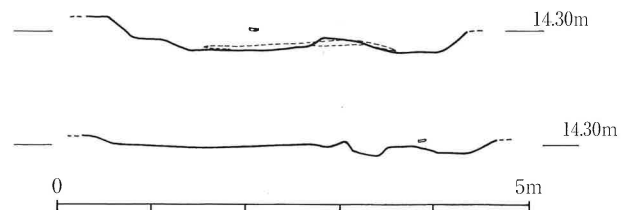
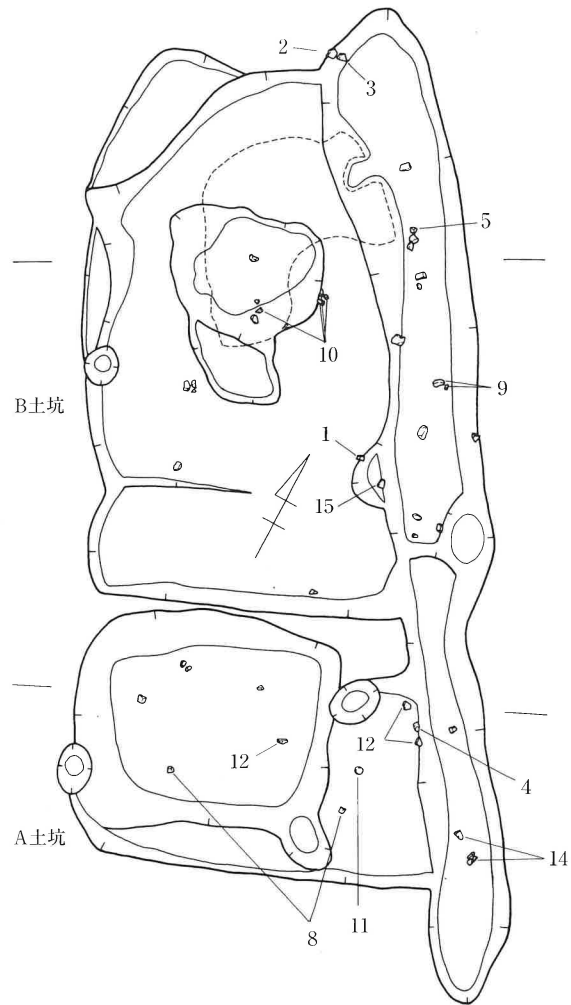
SK57 (第3-51図)

H3区で検出された大型土坑で、A Bの二つの土坑に分かれた。実際にはさらに多数の土坑と一条の溝からなると考えられる。SK57A土坑は長さ4m、幅2.5m、深さ0.3m。SK57B土坑は長さ5.5m、幅5m、深さ0.5m。ともに埋土は暗褐色軟質土の単層である。内部からは土器片のほか被熱した礫や炭層が多く出土している。廃棄土坑として用いられたものであるがA土坑の3の土師質小皿は出土時は潰れていたものの、ほぼ完形品を置いた状態で出土している。

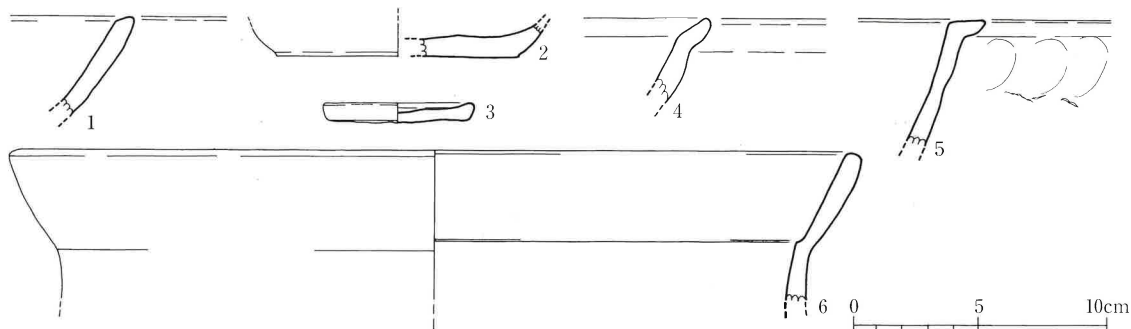
SK57A出土遺物 (第3-52図) 1は瓦質の鍋口縁片。2は回転糸切の土師質坏底部で、復元底径は9.6cm。3は6片が接合した完形となった回転糸切の土師質土器の小皿。口径5.7cm、底径5.5cm、器高0.8cm。口縁が真っ直ぐ立ち上がる型式で14世紀に類品がおおい。摩滅がひどい。4は口縁を外半させる土師質



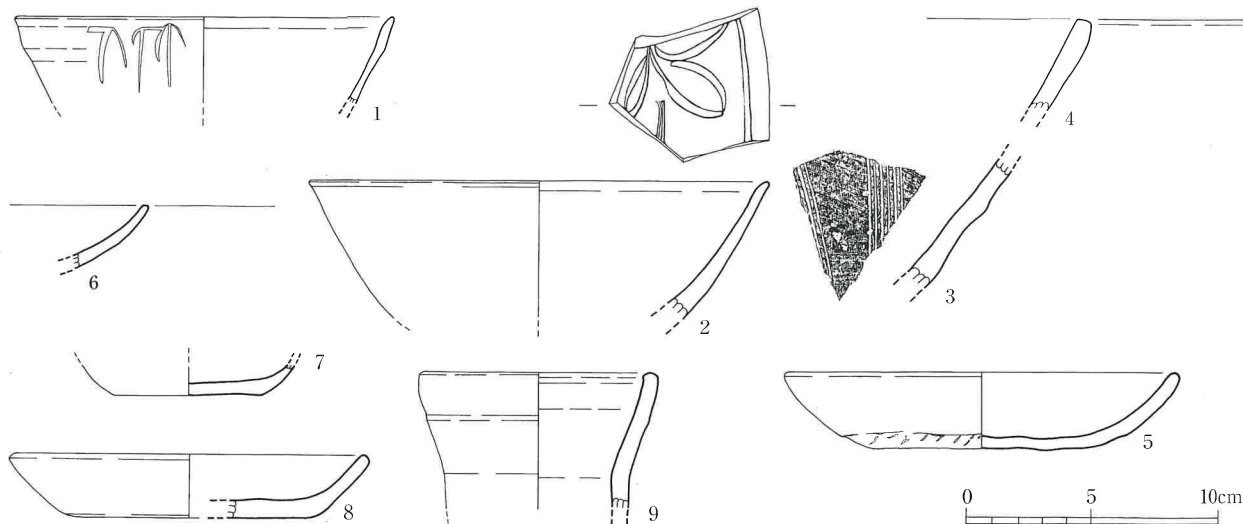
第3-50図 SK50出土遺物 (1/3)



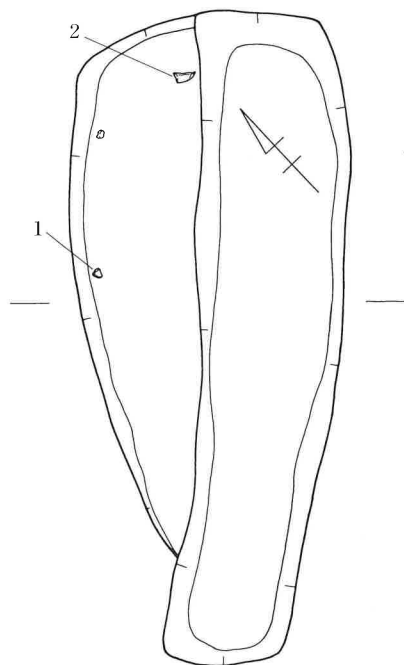
第3-51図 SK57A・B (1/80)



第3-52図 SK57A土坑出土遺物 (1/3)

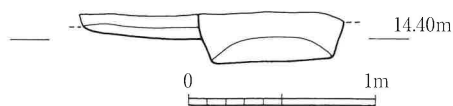


第3-53図 SK57B土坑出土遺物 (1/3)



鍋の口縁部。5はさらに口縁を逆L字形で曲げた土師質鍋の口縁部。6は内面に蓋受けの段を作り出した土師質鍋の口縁部、復元口径は33.6cm、外面に煤が付着している。ほかに高台のない瓦器碗の底部片が出土している。

SK57B出土遺物 (第3-53図) 1は中国龍泉窯産青磁碗の口縁片で、外面に小ぶりの鏽連弁文を施す、14世紀代に下るものか。復元高は15.0cm。2は同じく内面に文様を施す中国産青磁碗の口縁、復元口径18.2cm。3は暗赤褐色の備前系陶器播鉢の胴部片。4は瓦質鍋の口縁。5は高台の消失した型式の瓦器碗である。復元口径15.4cm、器高3.1cm。口縁は丸く収める。底部外面は押し出しのため亀裂が入る。15世紀代の製品である。6も瓦器碗の口縁部片。7は底部回転糸切の土師質小皿の底部片、復元底径5.8cm。器高は高めになる15世紀の製品である。8は底部回転糸切の土師質土器の坏で、復元口径は13.8cm、器高2.5cm、復元底径9.6cm。9は残留した須恵器提瓶の口縁部。ほかに土師器鍋や須恵器の甕の破片が出土している。



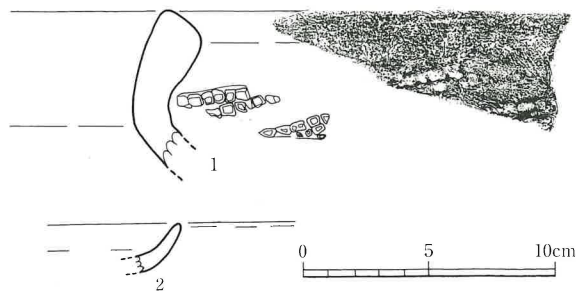
第3-54図 S58a・b (1/40)

SK58 (第3-54・55図)

G2区で検出された長方形の土坑で、長さ3.45m、幅1.45m、深さ0.25m。二つの土坑が重複している可能性がある。埋土は5~10cm大の

黄色土ブロックを多く含む黒褐色土の単層である。内部からは土器細片が散在して出土している。

1は瓦質の甕口縁部で、外面に格子タタキのあとが残る。胎土には砂粒が多い。2は土師質土器の小皿で器高が比較的高く、15世紀の製品と推定される。

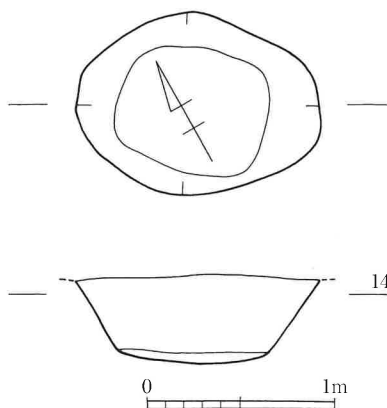


第3-55図 SK58出土遺物 (1/3)

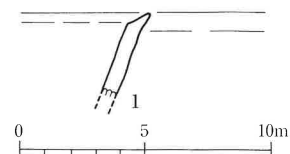
SK59 (第3-56図)

G4区で検出された長円形の土坑で、長さ1.3m、幅1.0m、

深さ0.5m。埋土は黒色土の単層である。内部からは瓦質と土師質の土器片2点が出土している。



第3-56図 SK59 (1/40)



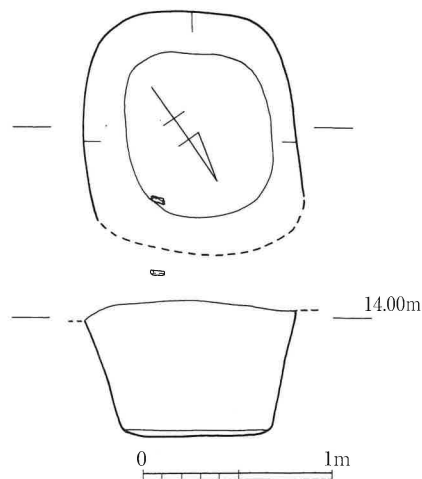
第3-57図 SK62出土遺物 (1/3)

SK62 (第3-57図)

長円形の小土坑である。1は外上方に口縁をつまみ出す土師質土器の鍋口縁部。

SK65 (第3-58図)

F6区で検出された円形の土坑で、長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.3m。溝SD3に切られる。内部からは瓦質播鉢や土師質鍋などの土器片が出土している。

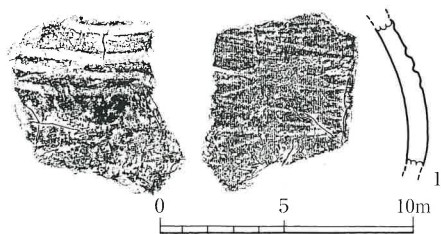


第3-58図 SK65 (1/40)

3-4 ピット

人為的な柱穴と考えられるピットも多いが、明確な区別はできなかった。しかし出土遺物の多くは周囲の溝と土坑から出土した遺物と同時代のものであるので、ピットの中には建物を構成するものが含まれているものと考えられる。

SP5出土遺物 (第3-59図)

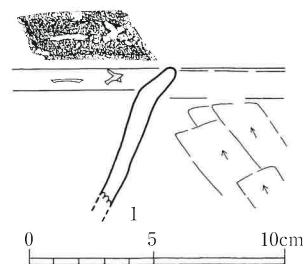


第3-59図 SP5出土遺物 (1/3)

1は縄文後期前半鐘崎式の新しい時期の深鉢の胴部片で、肩部に沈線文様があり内外は横方向の貝殻条痕で調整している。

SP18出土遺物 (第3-60図)

1は土師質の鍋である。口縁を軽く外におりませ、内面は横方向の平滑なナデで仕上げ、外面はヘラ削りで成形する。口縁上面の平坦面に×印と一記し野のヘラ記号が並んである。外面には煤が付着している。

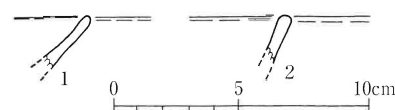


第3-60図 SP18出土遺物 (1/3)

に×印と一記し野のヘラ記号が並んである。外面には煤が付着している。

SP32出土遺物 (第3-61図)

1と2は口縁を丸くおさめた瓦器碗の口縁部。



第3-61図 SP32出土遺物 (1/3)

SP38 (第3-62・63図)

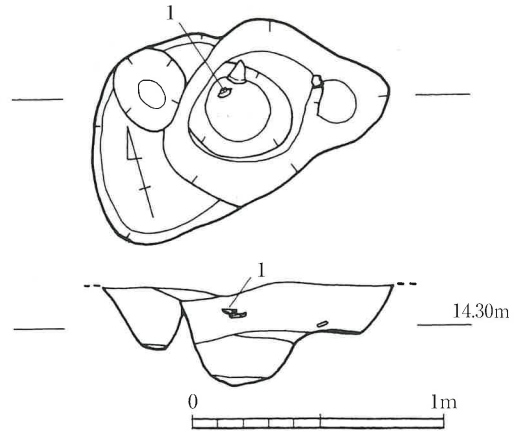
H4区で検出された不整形のピットで、遺構同士の切合関係はない。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層

で、内部からは土器片が出土している。土器の中に13～14世紀の土師器小皿が含まれているので、中世でも13～14世紀の遺構である。

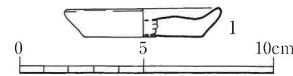
1は回転糸切の土師質小皿。復元口径5.2cm、復元底径4.2cm、器高1.1cm。はかに土師質の鍋、須恵器甕の破片が出土している。

SP40 (第3-64・65図) H4区で検出された不整形ピットで、3つのピットが重複している。遺構同士の切合関係はない。埋土は黄色土ブロック混じりの暗褐色土の単層で柱穴SP38の埋土とよく似ている。内部からは土器片が出土している。1は土師質鍋の口縁部。口縁は緩く外に外半させ、胴部外面下半をヘラ削りで調整する。外面には厚い煤が付着している。底部中央には円形の穿孔がある。

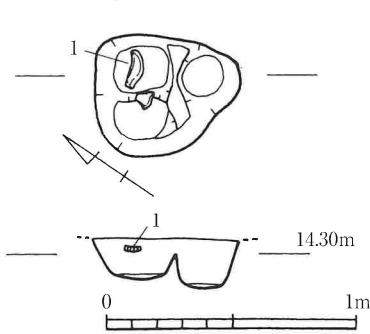
SP49出土遺物 (第3-66図) 1は土師質播鉢の底部である。



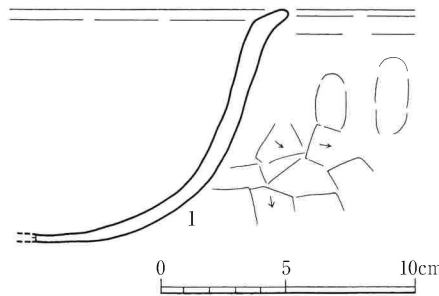
第3-62図 SP38 (1/30)



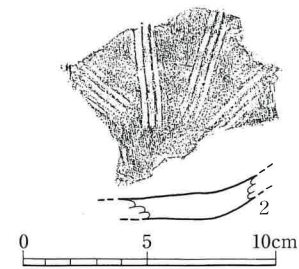
第3-63図 SP38出土遺物 (1/3)



第3-64図 SP40 (1/30)



第3-65図 SP40出土遺物 (1/3)



第3-66図 SP49出土遺物 (1/3)

SP51出土遺物 (第3-67図) 1は回転糸切の土師質坏の底部片で、復元底径は11.0cm。

SP64 (第3-68・69図) F3区で検出された柱穴で、溝SD3切られる。埋土は炭焼土を含む黒色土の単層で、底に根石として機能しうる円礫をおいてある。内部からは口縁を打ち欠いた土師質土器の小皿が出土している。柱穴を抜いた後に埋納した祭祀遺物と推定される。

1は口縁を大きく一箇所打ち欠いた土師質土器の小皿である。口径9.1cm、底径6.5cm、器高1.8cmの回転糸切。15世紀代の製品である。

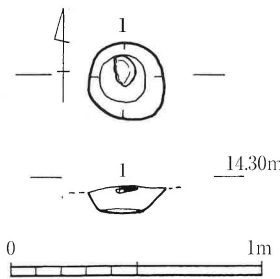
3-5 B地区出土遺物 (第3-70図)

1は土師質小皿口縁部、器高は1.9cm。2は口縁を外に屈曲させた土師質鍋で、外面はヘラ削りで仕上げ、煤が付着している。3は外上方に摘み上げる型式の土師質鍋の口縁、外面は指圧で仕上げる。

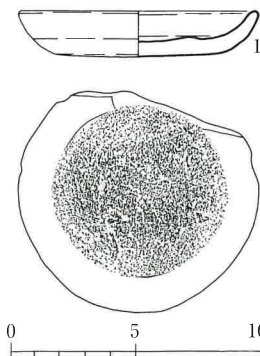
4は瓦質捏鉢の口縁の注ぎ口である。5は管状土錘の完形品で長さ4.0cm、最大径1.3cm、重さ5.8g。6は須恵器坏身の口縁片。



第3-67図 SP51出土遺物 (1/3)



第3-68図 SP64 (1/30)



第3-69図 SP64出土遺物 (1/3)

第4節 小結 (第3-71図)

発見された遺構と遺物から諸田南遺跡B地区を時代ごとにまとめておく。

縄文時代では柱穴SP5やSP63において縄文時代後期の土器が出土しており、わずかではあるが、この付近に縄文時代の遺構が存在した可能性がある。

古墳時代の前期後半の土師器甕や古代の須恵器が多数残留する。土坑SK7などのいくつかの小土坑がこの時代に該当するが、明確な遺構はほとんどない。周辺の中津市教委の圃場整備に伴う調査で、やや離れているものの同じ諸田南遺跡から6世紀から古代の遺構が多数発見されているので、B地区周辺でも関連する遺構が存在した可能性がある。

奈良時代から鎌倉時代の遺構や遺物はほとんど見出せない。

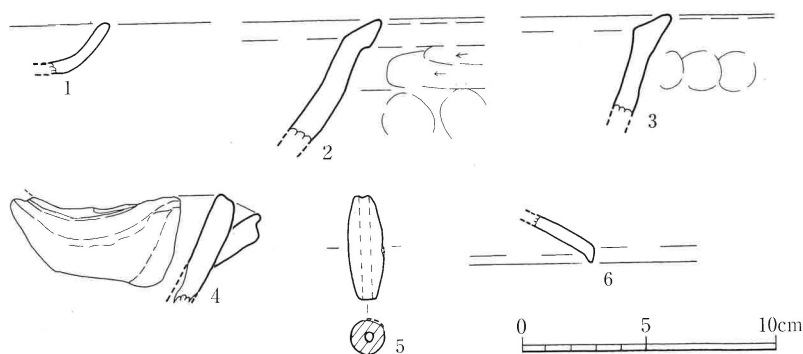
中世になると水路がかなり密に掘られるようになり、その周囲には宅地と考えられる区画が見出される(第3-71図)。周防灘に向かってのびる低丘陵上に立地する中世の小集落遺跡といえよう。

具体的にみると、14世紀から15世紀に掘削された水田導水用と推定される2条のV字溝SD1.SD28を中心に、途中で水溜を有する脇水路SD3がめぐり、調査区の南半では水路SD53やSD55の周囲にL字形の浅い溝が数ヶ所取り付き、その周囲に柱穴、廃棄土坑が集中する。とくに南側の水路群に接するように一辺が10~20mほどの矩形の区画1・2・3を見出すことができる。これらの小区画が営まれた時期は土坑

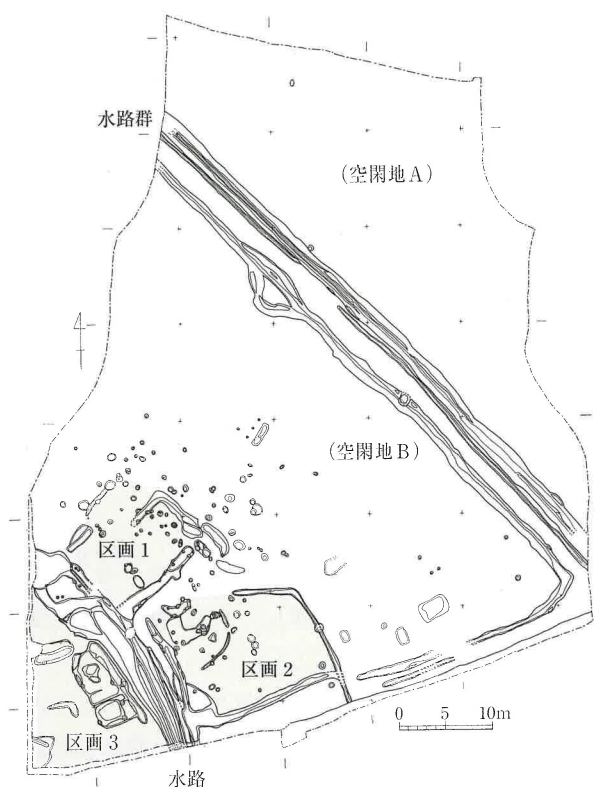
SK43ほかで出土した瓦器碗は小倉分類(註1)の、4類にあたるので14世紀後半から15世紀と考えられているものである。瓦質土器の鍋も山本哲也氏の教示に寄れば14世紀後半から15世紀前葉の年代が与えられる。ほぼ室町時代の前半期の遺跡と考えられる。この区画が小規模な宅地であるということが許されるならば、出土遺物は土師器鍋などの生活用品が中心にして、ごく少量ながら中国製の陶磁器が含まれる。ほかに生産用具として大型の管状土錘が一定量出土している。さらに区画と水路の間には空閑地AとBがあり、畑地あるいは水田として利用されていたものと考えられる。このような遺構と遺物の内容から、中世に台地上の水田開発をおこなうために掘られた水路と、その周辺に短期間の居住を繰り返した小集落の遺跡と考えられる。

近世になると集落は消滅し水路も埋没しているが、SD1とSD3の水路の区画は土地の境界としてのこっており、近世になって改めて同じ位置に水田用の水路が掘られている。

註1、小倉正五1984「宇佐地方の瓦器碗について—型式・編年に関する試案—」『古文化談叢』14、九州古文化研究会



第3-70図 B地区一括出土遺物 (1/3)



第3-71図 諸田南B地区の中世集落遺構 (1/800)



B地区全景



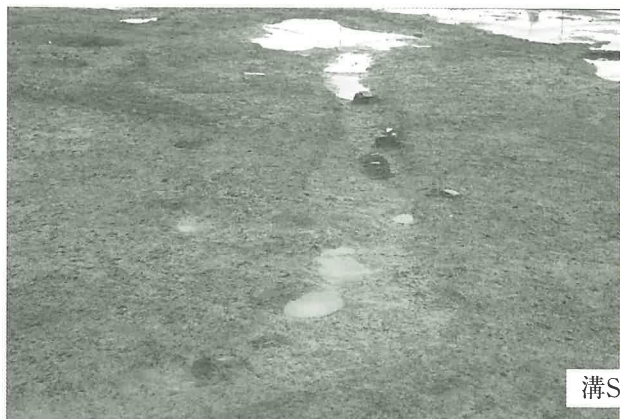
B地区完掘後全景



溝SD1~3



溝SD3



溝SD31

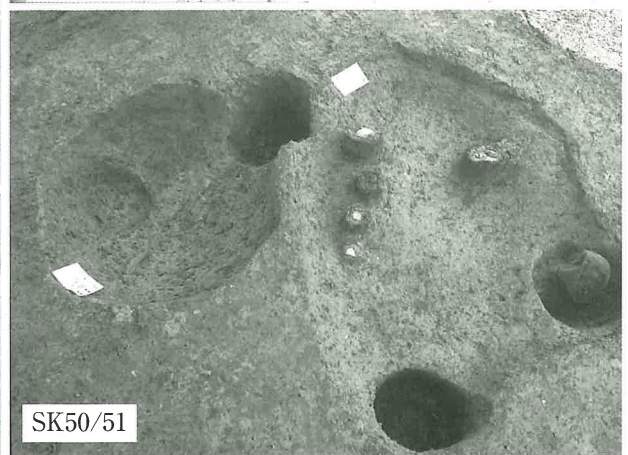
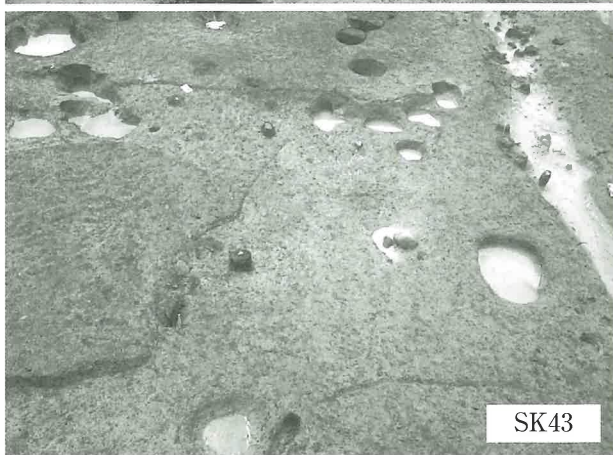
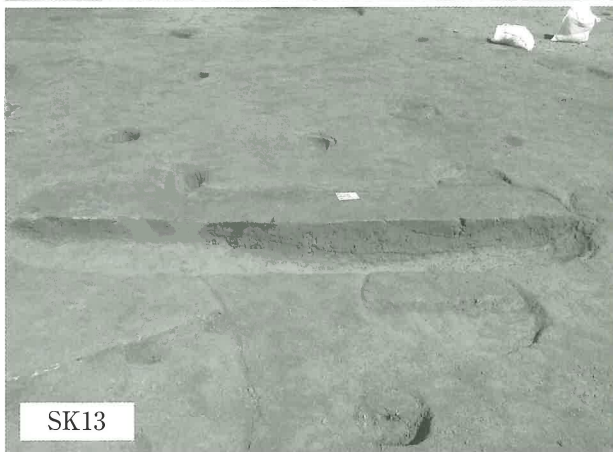
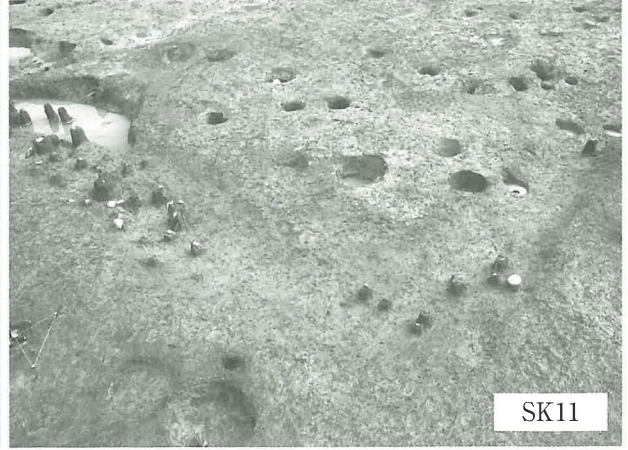
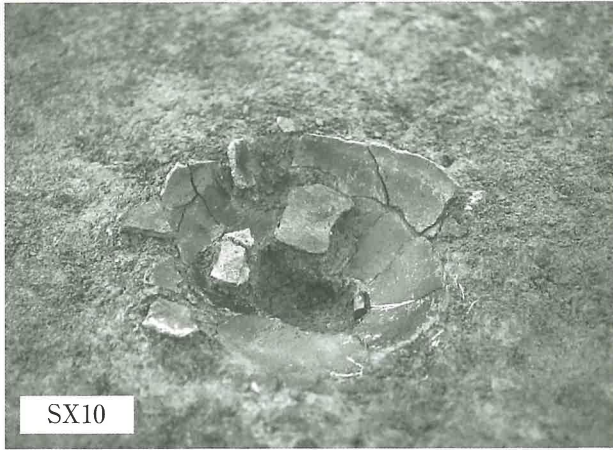


溝SD44



溝SD55

写真図版4

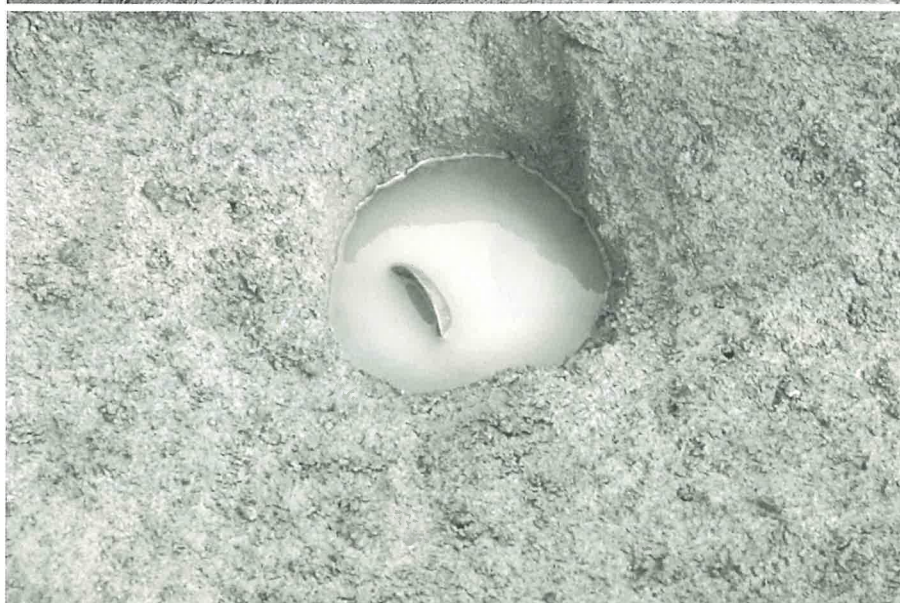




土坑SK53

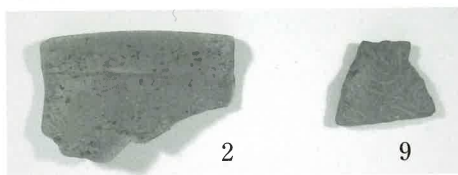


土坑SK57

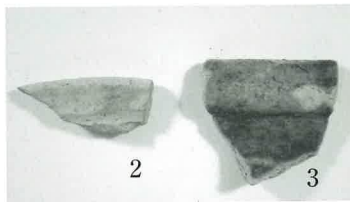


柱穴SP64

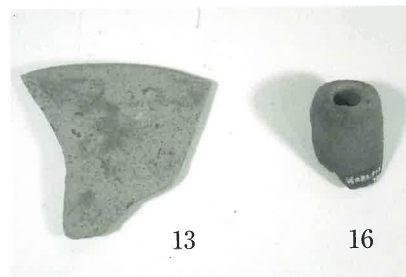
写真図版6



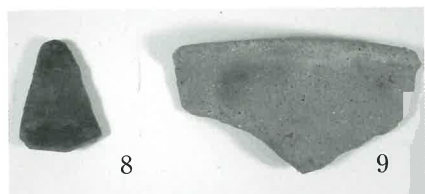
3-5図 SD1



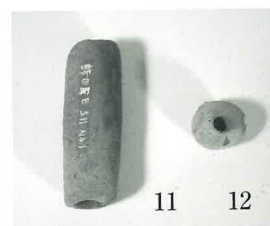
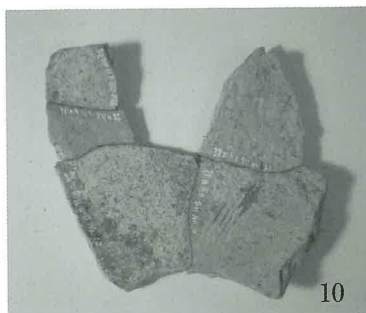
3-7図 SD3



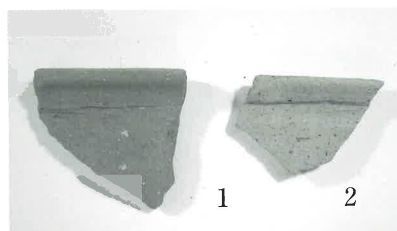
3-8図 SD3



3-10図 SD11



3-12図 SD25



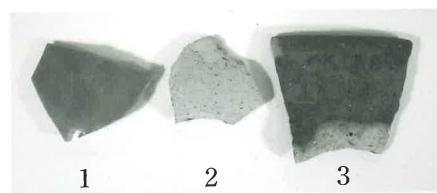
3-13図 SD28



3-15図 SD31



3-17図 SD44



3-20図 SD53

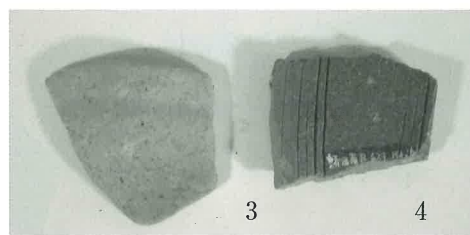


3-25図 SD25

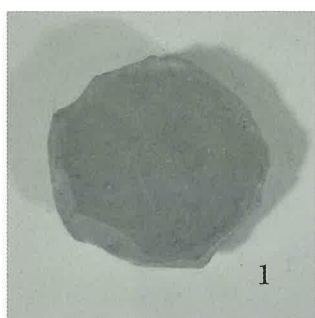




3-29図 SX10



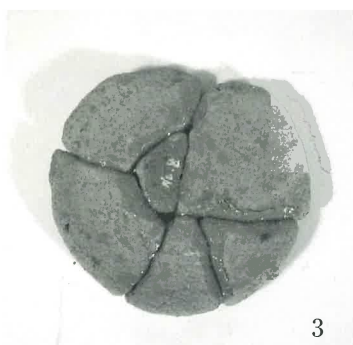
3-32図 SK29



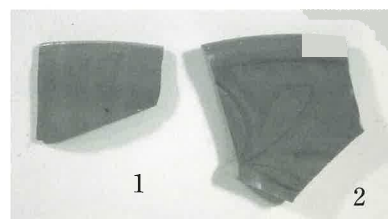
3-38図 SK35



3-46図 SK43



3-52図 SK57a



3-53図 SK57b



3-53図 SK57b



3-55図 SK58



3-59図 SP5



3-60図 SP18

写真図版8



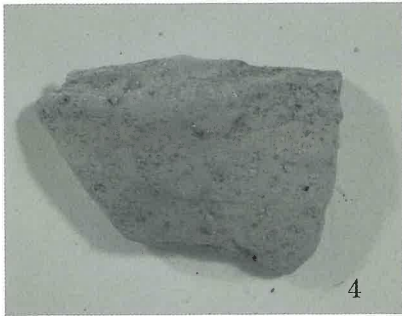
3-63图 SP38



3-65图 SP40



3-69图 SP64



3-70图 B地区



第4章
諸田南遺跡C地区



諸田南遺跡C地区と中津港線（南から）

第4章 諸田南遺跡C地区

諸田南遺跡は北側に展開する定留遺跡、諸田遺跡、赤迫東遺跡に匹敵する広大な面積の遺跡であるが、遺跡の場所によっては遺構、遺物の希薄な範囲があり、遺構の密度に濃淡が確認できる。今回の調査により、諸田南遺跡C地区は遺構、遺物の僅少な位置をしめていることが判明した。

発掘調査は表土層を重機で取り除き、人力による遺構検出が行われた。色調の違いで遺構確認していくが、当該地区には色調の異なる穴が数多く確認されており、これらが遺構かどうかという弁別をする作業に時間と労力



第4-1図 諸田南遺跡C地区調査区配置図 (1/2500)

を使うという至難の調査であった。遺構のような掘り込みは色調の違いによって4～5分類して発掘調査を実施した。結果的には、遺構のような掘り込みが植栽や風倒木の痕跡である可能性が高いことが判明した。

諸田南遺跡C地区は便宜上、C-1、C-2、C-3調査区に分けて調査を実施した。その結果、C-1調査区で中世～近世の溝状遺構を3条、C-3調査区では中世の溝状遺構を1条検出している。出土遺物としては中世～近世の瓦質土器や陶磁器が少量出土し、石鏃2点も発見されている。

第1節 出土遺構と遺物

溝状遺構（第4-3、4-4図）

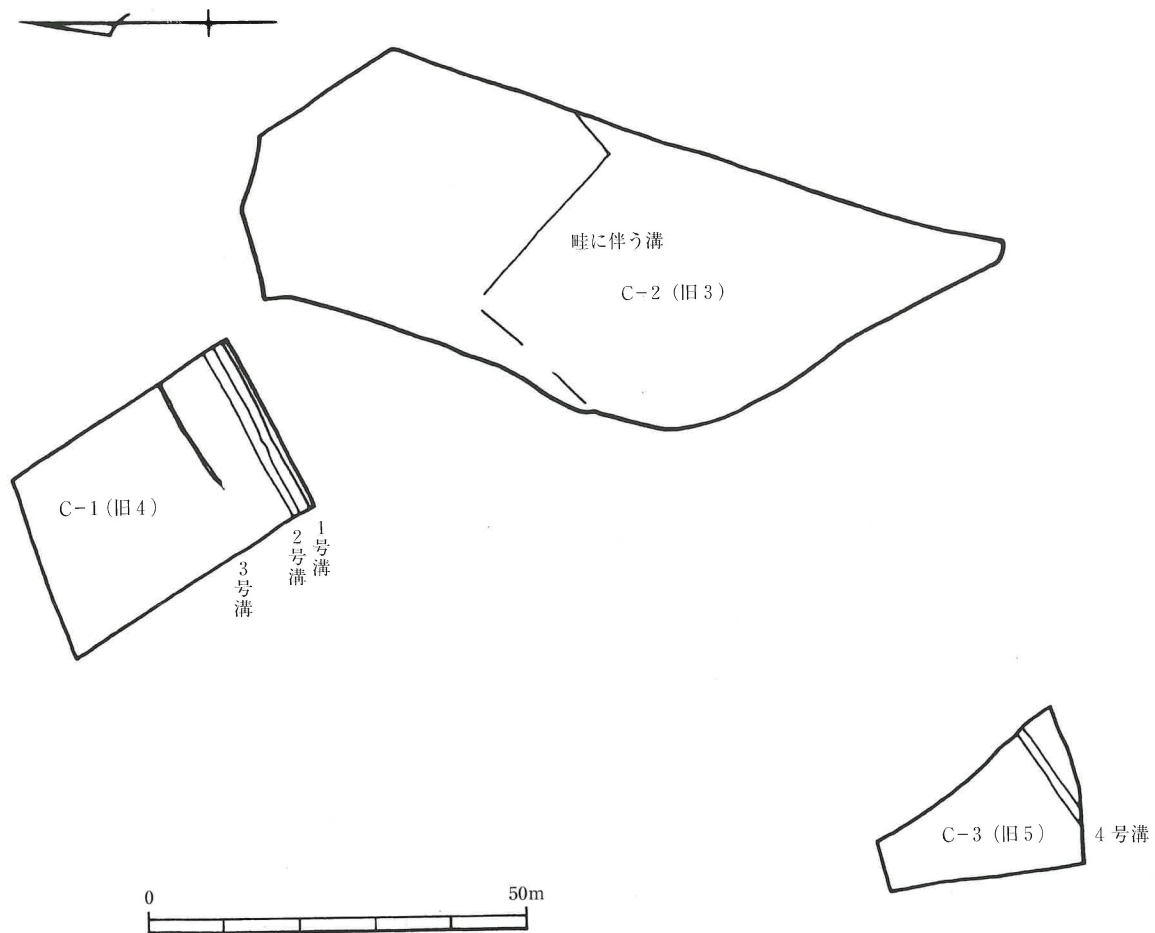
C-1調査区で東西に長く3条の溝状遺構が確認されている。1号溝は幅30～40cmで深さ5～15cmである。溝の断面は浅い皿状を呈している。溝は寸断されつつ遺存していた。2号溝は幅160～120cmで深さ15～20cmである。溝の断面は浅い皿状を呈している。二つの溝は平行しており、その間隔は160～180cmである。小道や畦畔に沿った両側の溝であろう。二つの溝には中世～近世の瓦質土器や土師質土器が少量出土している。2号溝に6～7m離れて3号溝が確認されている。3号溝は幅30～50cmで深さ5～10cmである。溝の断面は浅い皿状を呈している。

C-2調査区では水田の畦に沿って直角に曲がる溝状遺構が検出されているが、近現代に近いものであり図示はしていない。

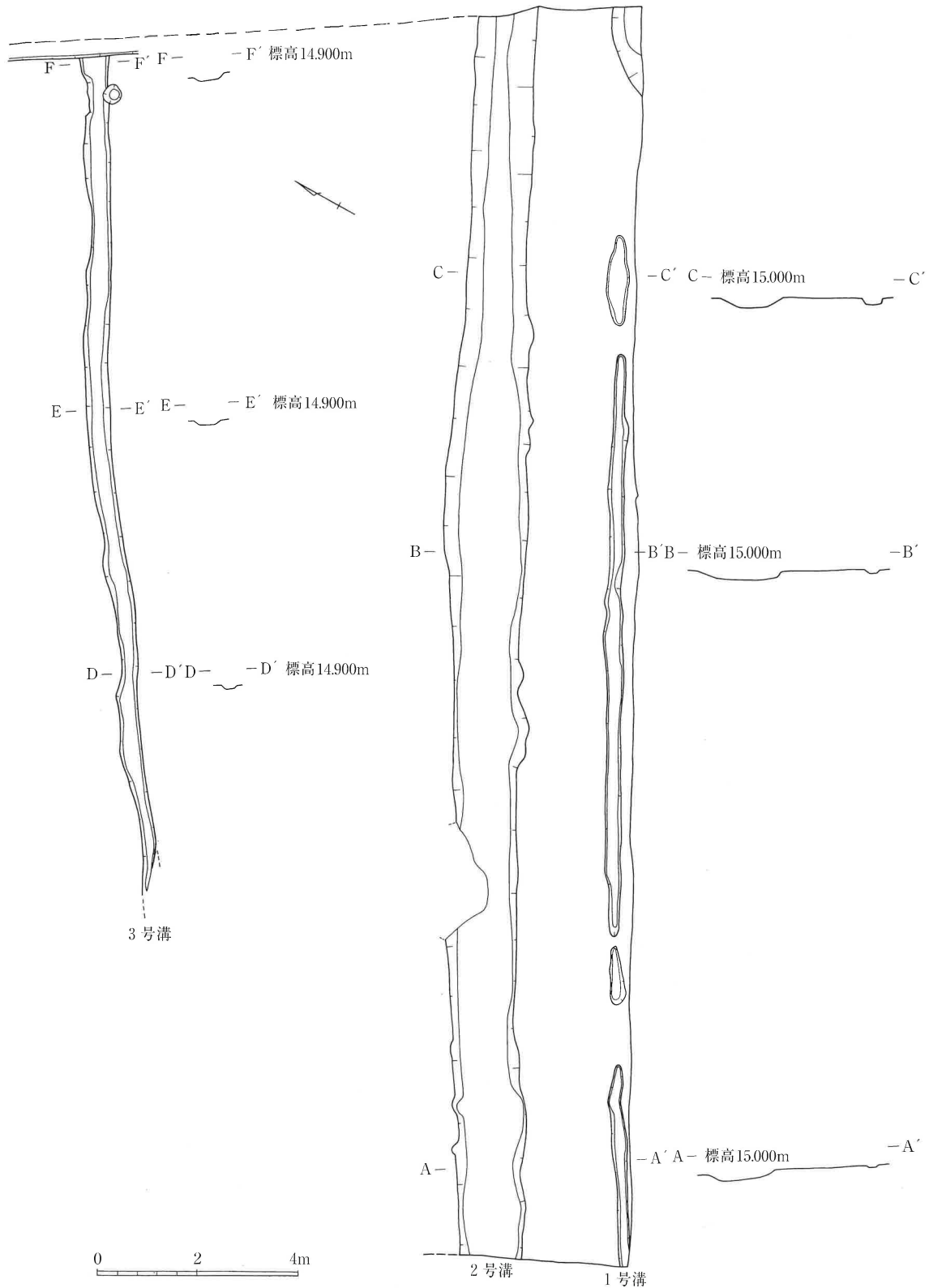
C-3調査区では溝状遺構を1条検出し、4号溝と呼称していた。4号溝は幅120～180cmで深さ10～20cmである。溝の片側は二段掘りで、断面は浅い皿状を呈している。

出土遺物（第4-5図）

諸田南遺跡C地区のC-1、C-2、C-3調査区で中世～近世の遺物が少量出土し、石鏃2点も発見されている。

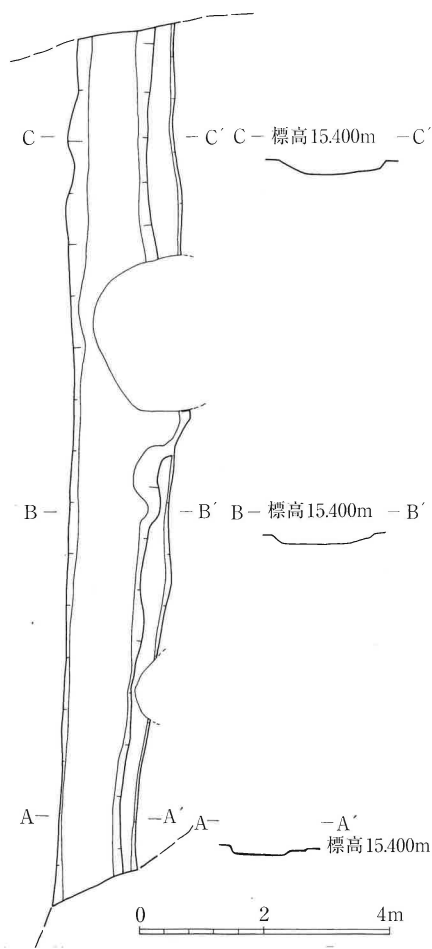


第4-2図 諸田南遺跡C地区遺構配置図（1/1000）



第4-3図 諸田南遺跡C-1地区1号溝～3号溝 (1/120)

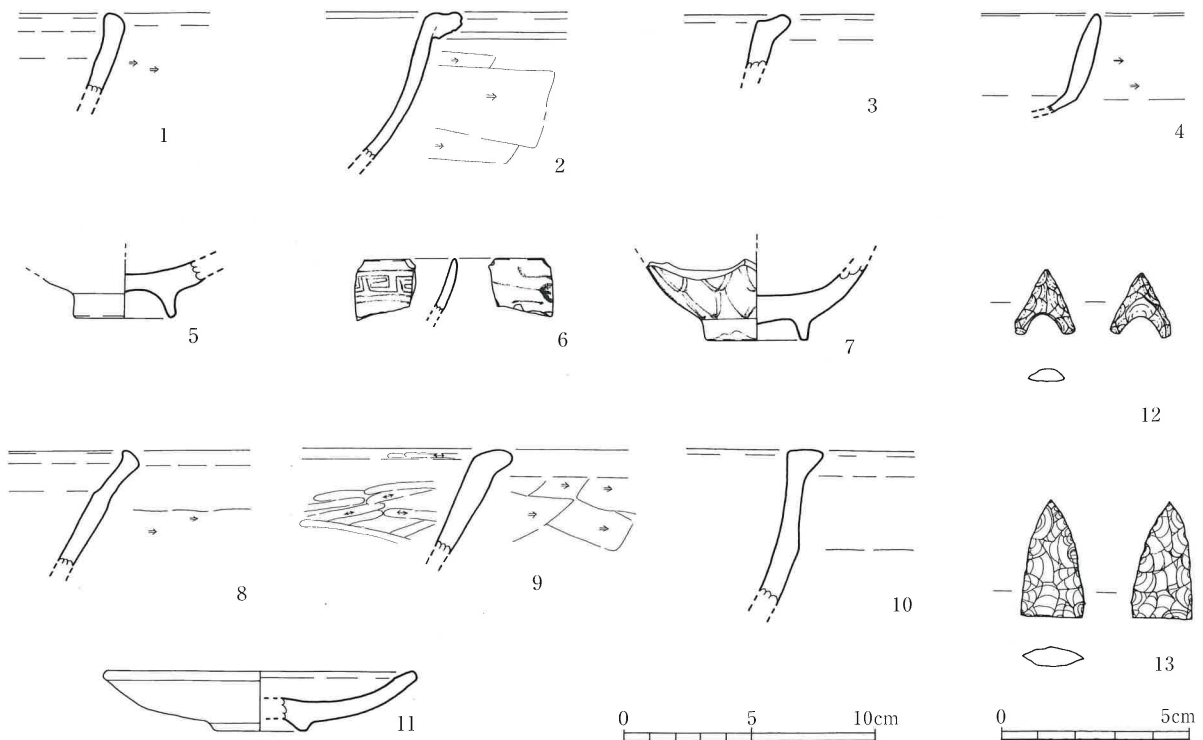
1、2はC-1調査区の1号溝から出土している。1は瓦質土器の土鍋である。口縁部が肥厚して心持ち内湾気味である。表裏撫で調整で色調は黒褐色を呈する。2は口縁部に粘土紐を取り付けて外側に折り曲げたように肥厚させた土師質の鉢である。幅広の口唇部には凹線が二条廻っている。表裏は撫で調整で表面は削り痕跡を残して



第4-4図 諸田南遺跡C-3地区4号溝(1/120)

いる。色調は表裏黄褐色である。高村焼であろうか。3、4はC-1調査区の2号溝から出土している。3は土師質土器の口縁部である。口縁部で小さく外反し、広い口唇部を形成している。4は瓦質土器の鉢である。口縁部が肥厚して胴部で屈折する形態である。表裏撫で調整で色調は黒褐色を呈する。

5~7はC-2調査区出土の近世陶磁器である。5は肥前陶器で高台付の碗である。6、7は肥前磁器の染付である。6は内側に雷文、7の表面は二重網目文の碗である。時期は18世紀後半である。8~11はC-3調査区で出土した瓦質土器である。8は口縁部を心持ち外反させ、肥厚した口唇部を内側に張出す鍋である。内面は灰褐色で表面は黒褐色で表面に煤が付着している。割れ口はローリングを受けた様相である。9は口縁部を肥厚させ外に張出すもので口唇を丸くおさめている。表面暗褐色で削り痕跡を残し、内面黒褐色でヘラ磨きの痕跡。鉢であろう。10は口縁部を肥厚させ、外側に張出した口唇は厚い。表裏黄褐色を呈する鉢である。割れ口はローリングを受けた様相である。11は瓦質土器の高台付皿である。表裏は灰黒褐色を呈する。全体的に角が取れてローリングを受けた様相である。12、13は石鏃である。12はC-1調査区出土である。凹基式の鋏形鏃である。全体的に角が取れてローリングを受けた様相である。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。13はC-3調査区の4号溝直上の出土である。姫島産黒曜石製の平基式石鏃で、長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2.1gである。



第4-5図 諸田南遺跡C地区出土遺物 (1/3、1/2)

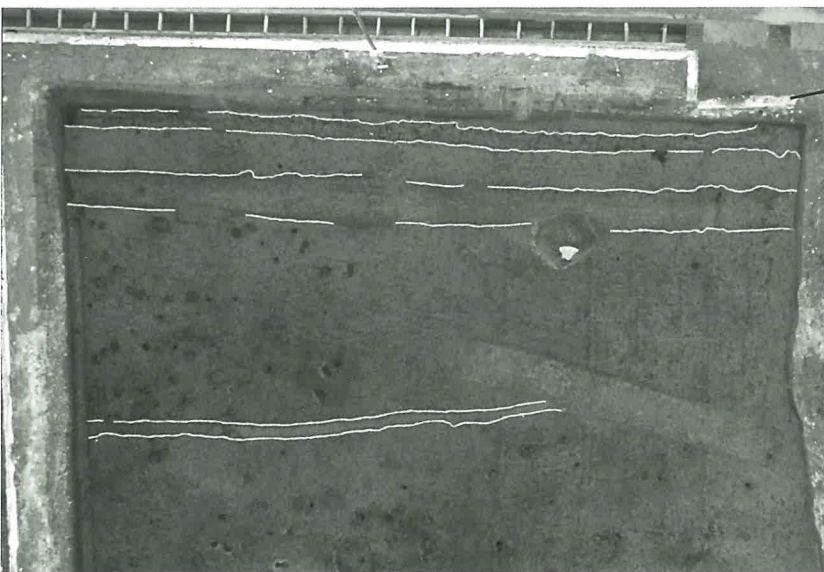
第2節 小結

諸田南遺跡C地区のC-1、C-2、C-3調査区で発掘調査を実施したが、当該地区には色調の異なる遺構状の土坑やピットが数多く確認されており、これらが遺構かどうかという検証に時間と労力をかけた調査であった。遺構状の掘り込みは色調の違いによって弁別して発掘調査を実施したが、結果としては、当初に推測していた以上に遺構・遺物の密度は希薄であった。検出した溝状遺構は中世～近世の所産であり、出土遺物としては瓦質土器や陶磁器が出土し、縄文期の石鏃も2点発見されている。諸田南遺跡の集落と可耕地との関係や空間の機能を推察するうえで今後参考となる事例であった。

写真図版1

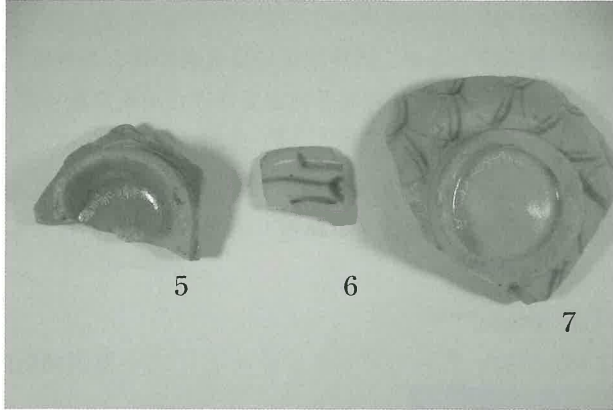


諸田南遺跡C地区俯瞰図（上部が北）

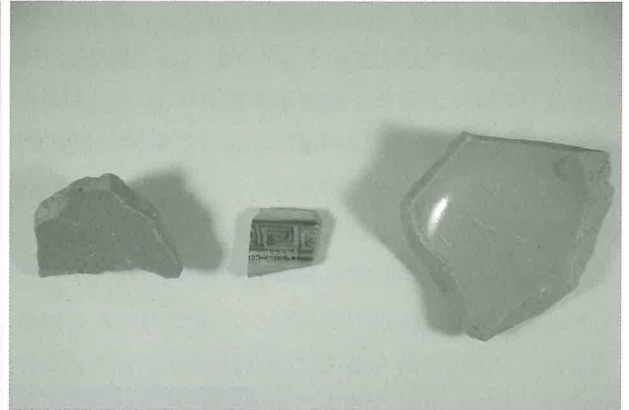


諸田南遺跡C-1調査区出土の溝
(北上空から)

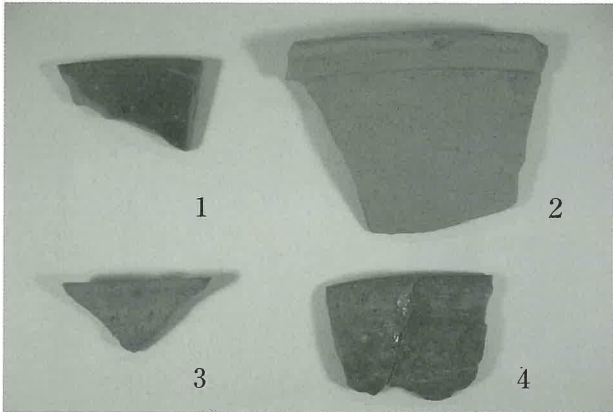
写真図版2



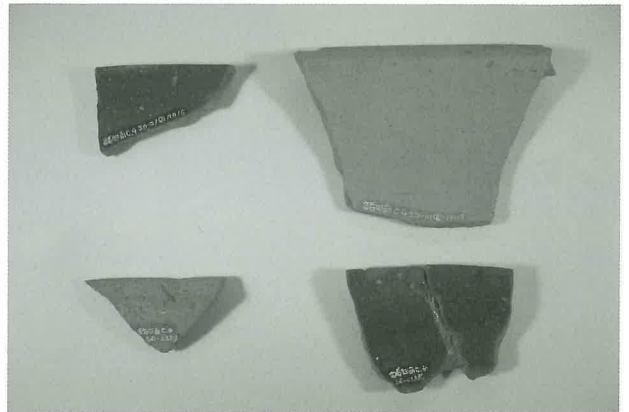
第4-5図 5.6.7 (表)



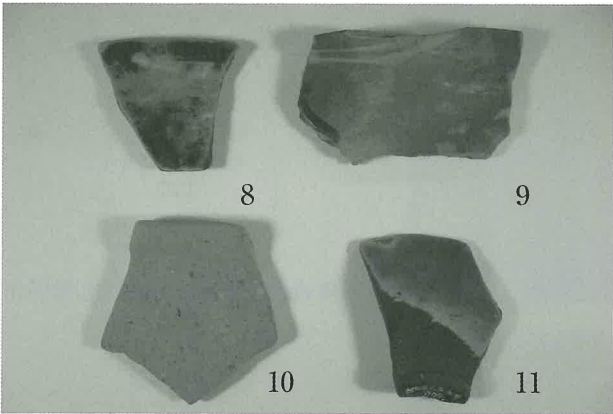
第4-5図 5.6.7 (裏)



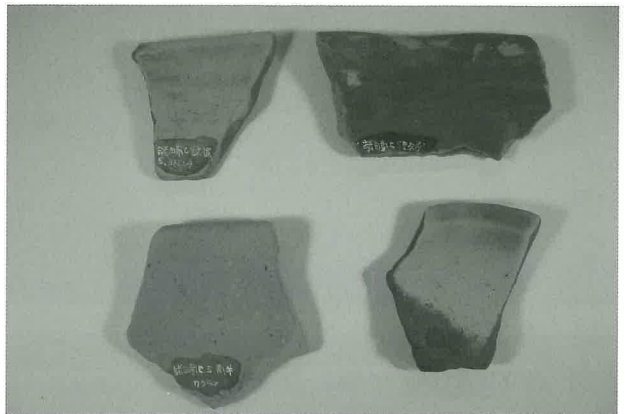
第4-5図 1~4 (表)



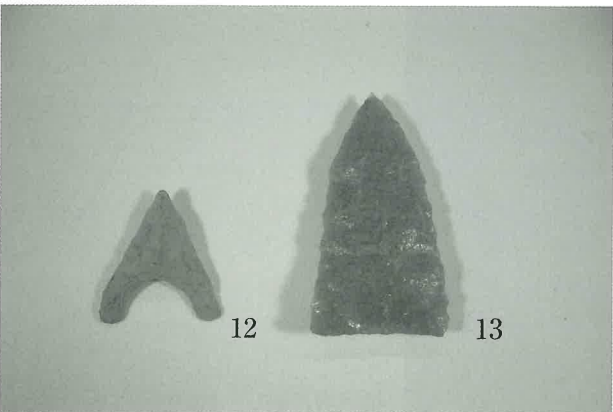
第4-5図 1~4 (裏)



第4-5図 8~11 (表)



第4-5図 8~11 (裏)



第4-5図 12.13 (表)



第4-5図 12.13 (裏)

第5章

さだのみ ほかの 定留遺跡外野地区



定留遺跡外野地区（北から）

第5章 ^{さだのみ} ^{ほかの} 定留遺跡外野地区

定留遺跡は低丘陵の全面を覆う広大な遺跡といて周知されていたが、今回、中津港線の路線幅に沿って約4,000㎡を調査対象地とした。この地区は地元の人によって外野地区と呼ばれている。今回調査の対象とした地区は確認調査の結果に基づいて、調査期間を約3ヶ月と見積もり発掘調査を実施したが、遺構密度が当初の推察を大きく下回ったため、約1ヶ月の調査期間に短縮修正して実施されたものである。外野地区からは、近世と考えられる溝3条と縄文早期と推察される陥穴1基、炉穴1基が検出された。

第1節 出土遺構と遺物

1号溝（第5-2、5-3図）

調査区の北端部で細長い溝状遺構を検出している。溝は北西部から南東部にかけて歪に曲がりながらも緩やかな弧状を呈するように遺存していた。溝は表土層を取り除いた後に確認されたもので、確認面の標高は12.6～12.8m前後である。溝幅は約1mで深さは約10～20cmであった。溝の断面は緩やかな皿状である。



第5-1図 定留遺跡外野地区調査区配置図 (1/2500)

出土遺物（第5-4図）

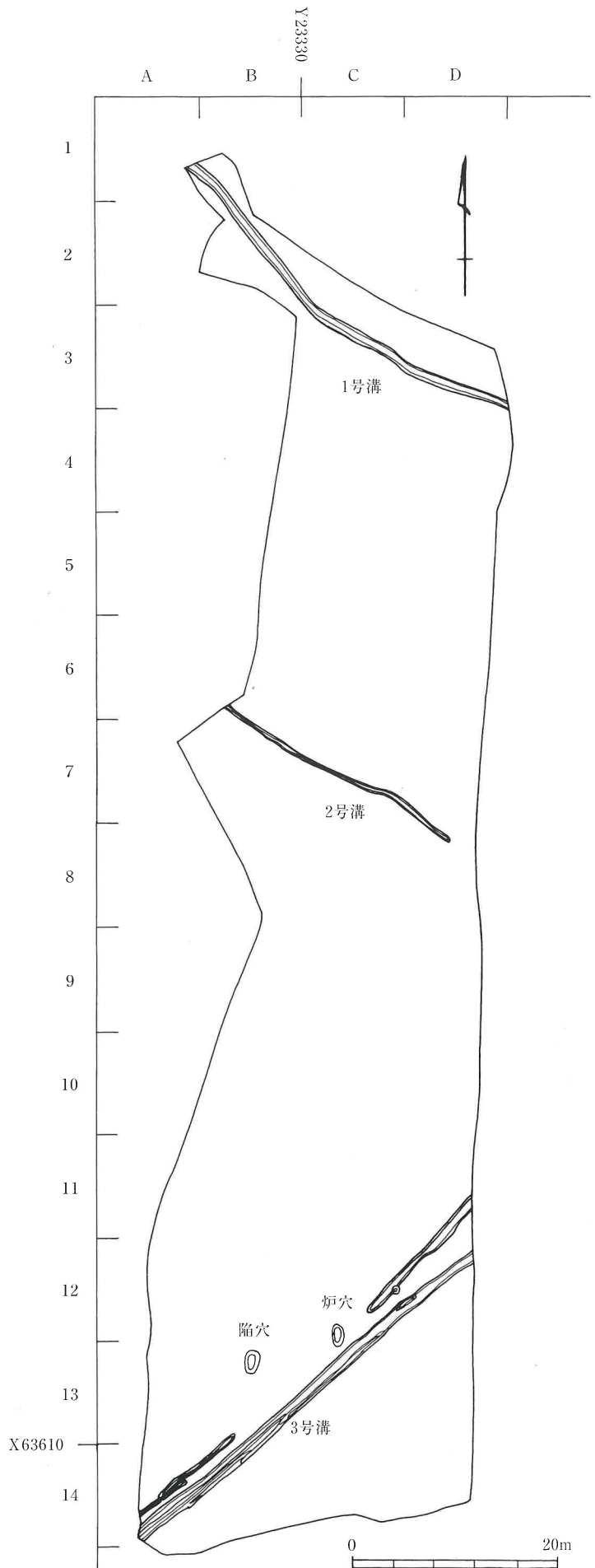
1は茶褐色を呈する関西系陶器の瓶の破片である。19世紀の所産である。2は淡橙色を呈する瓦器の平底部の破片である。底径18cmである。

2号溝（第5-2、5-3図）

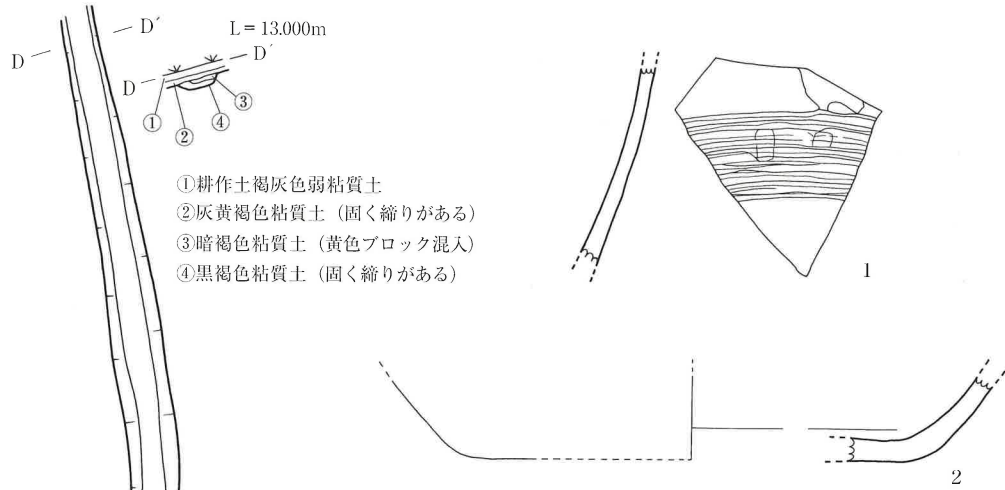
調査区の中央部で細長い溝状遺構を検出している。溝は北西部から南東部にかけて歪に曲がりながらもほぼ直線的に遺存していた。1号溝とほぼ並行する位置にある。溝は表土層を取り除いた後に確認されたもので、確認面の標高は12.8～12.9m前後である。溝幅は約45～65cmで深さは約6～8cmであった。溝の断面は緩やかな皿状である。

3号溝（第5-2、5-5図）

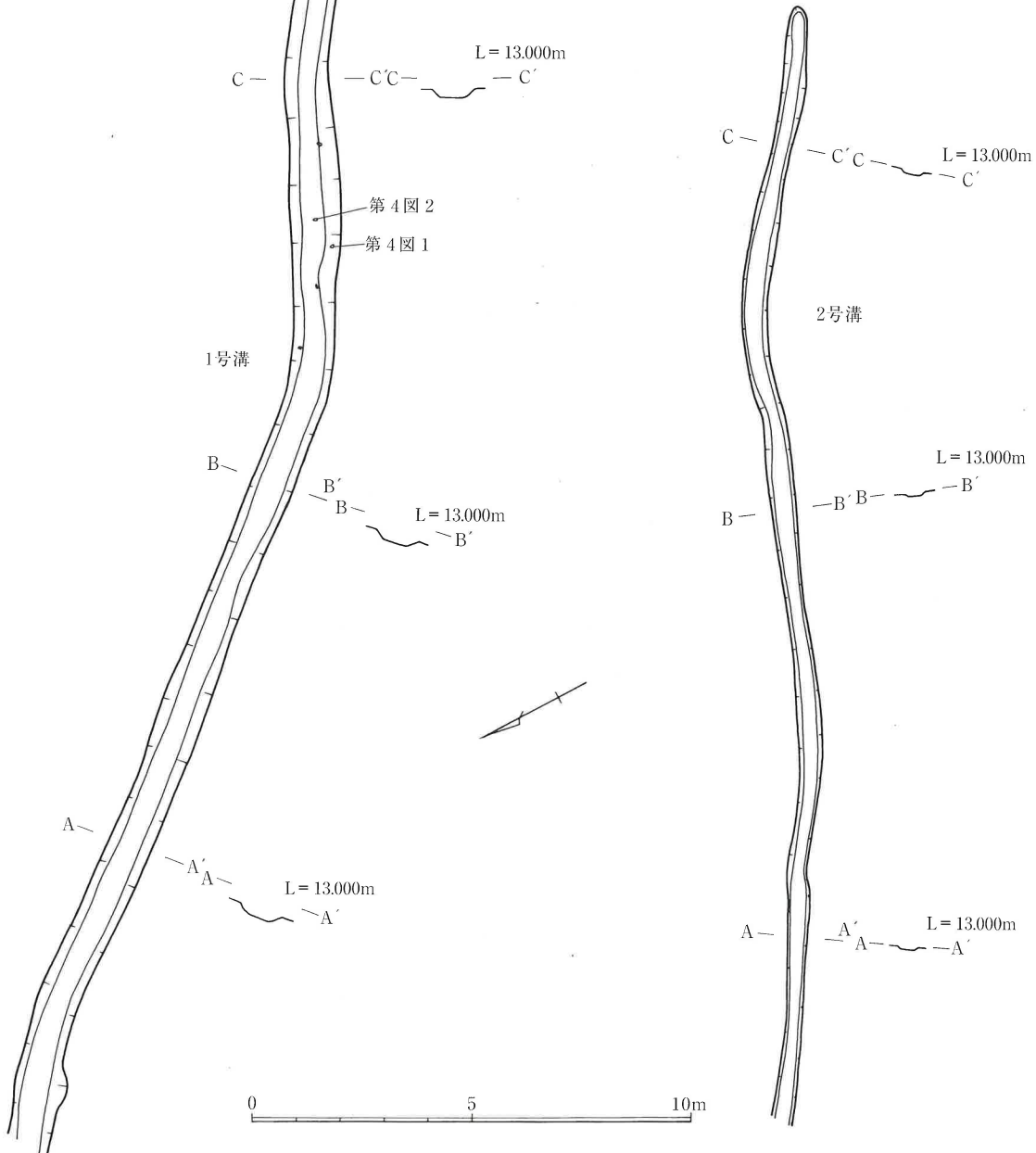
調査区の南端部で細長い溝状遺構を検出している。溝は南西部から北東部にかけてほぼ直線的に遺存していた。溝は表土層を取り除いた後に確認されたもので、確認面の標高は12.8～12.9m前後である。溝は場所によって2～3条にも分かれている様子である。溝幅は二段掘りを呈する広い溝で約1.3m、狭い溝で約50cmである。深さは広い溝で約15～25cm、狭い溝で約4～5cmであった。溝の断面は緩やかな皿状である。



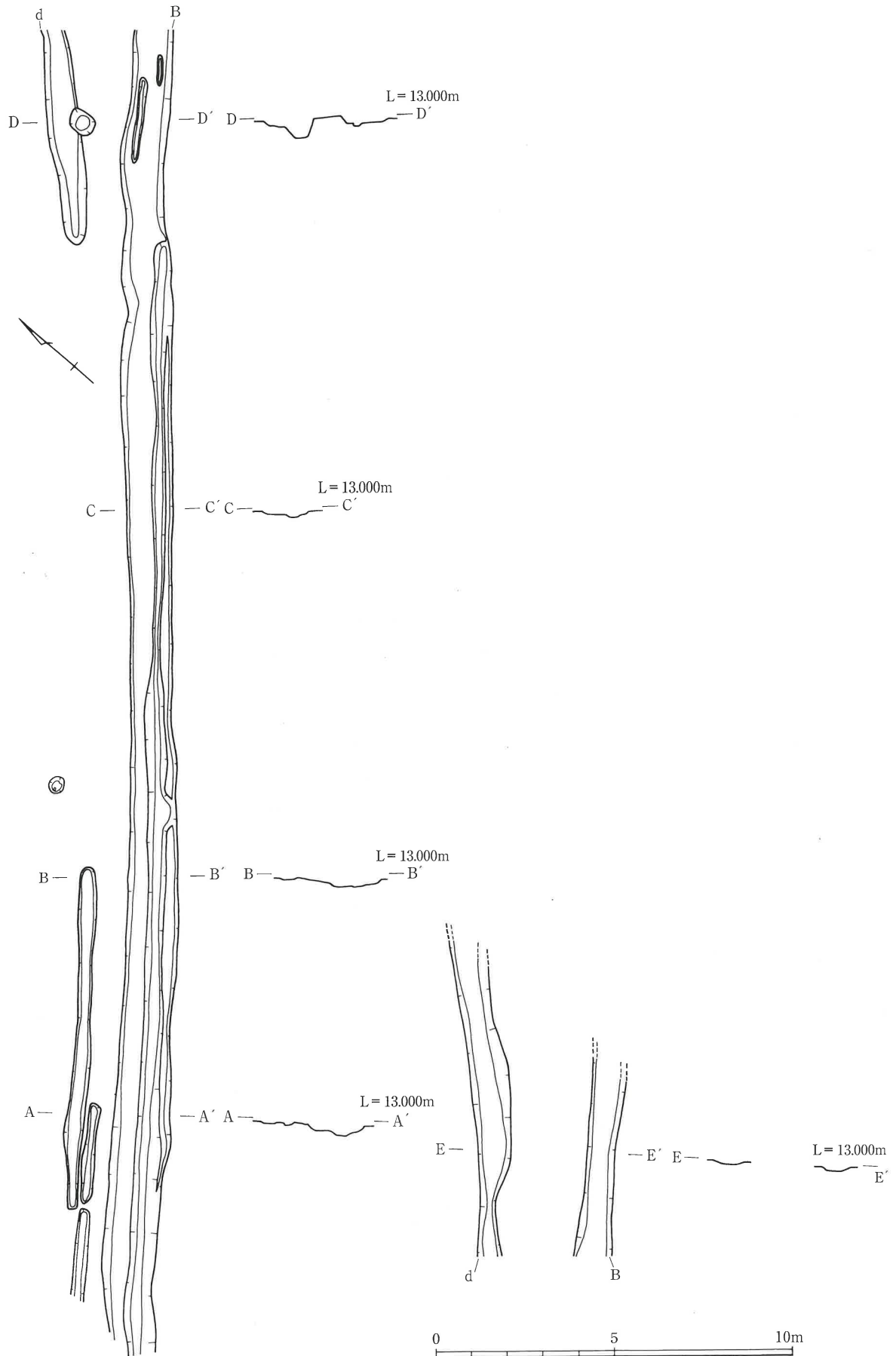
第5-2図 定留遺跡外野地区遺構配置図 (1/600)



第5-4図 定留遺跡外野地区1号溝出土遺物 (1/3)



第5-3図 定留遺跡外野地区1号溝、2号溝 (1/160) [1号溝と2号溝の間隔は任意である]



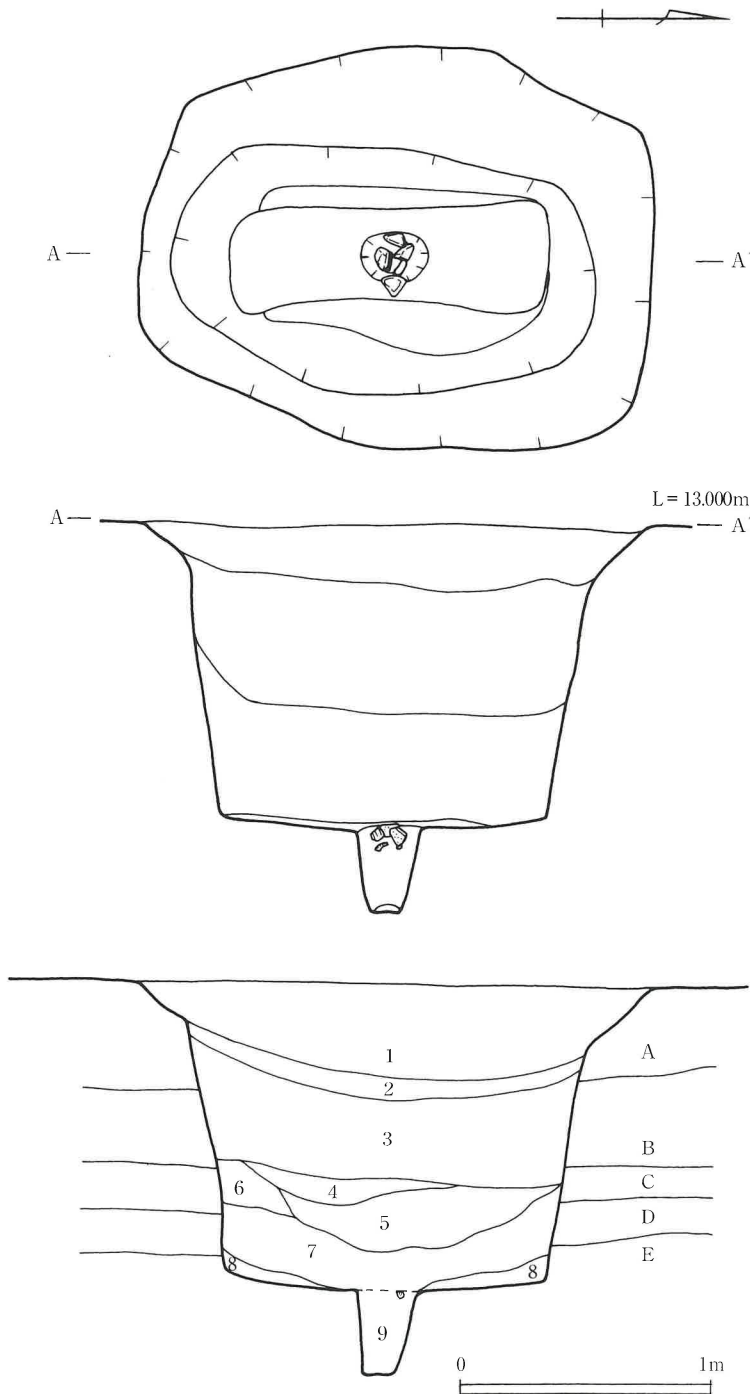
第5-5图 定留遗迹外野地区3号沟 (1/160)

陥穴遺構（第5-2、5-6図）

調査区の南端部の13-B調査区で陥穴遺構を検出している。陥穴は長軸を南北にとる楕円状の平面プランであり、覆土として黒褐色土層が充填されていた。平面プランは長径約2m、短径約1.6mの規模を呈するが、下層になるにつれて狭くなり、最終的には長径約1.25m、短径約37~45cmの長方形状を呈する。確認面から底部面までは1.2mの深さがある。陥穴の底面の中央部には長径25cm、短径20cm、最下層面で長径12cm、短径8cmの柱穴状の穴があり、穴の深さは32cmであった。穴の上部付近には掌大の礫が6個組まれたように配置されていた。礫間は3~5cm前後の隙間があり、逆茂木や杭を打ち込んで、杭の周りを礫で補強した様相が顕著であった。

陥穴の覆土は周辺からの流れ込みのようなレンズ状の堆積を呈する。そのまま放置した結果の様相であろう。出

土遺物はなかったが周辺部に縄文早期の無文土器が出土しており、この時期の所産と推察できそうである。



覆土層

- 1 黒色弱粘質土
- 2 暗黄褐色弱粘質土
- 3 黒褐色弱粘質土
- 4 灰黄褐色粘質土
- 5 黄褐色粘質土（2~5mmの黄色ブロックを混入）
- 6 黄褐色弱粘質土（脆弱である）
- 7 褐色弱粘質土（2~5mmの黄色ブロックをやや密に混入）
- 8 黒褐色粘質土（3~10mmの黄色ブロックをやや密に混入）
- 9 黄褐色弱粘質土（1~3 mmの黄褐色砂粒が密に混入しガラガラしている）

自然堆積層

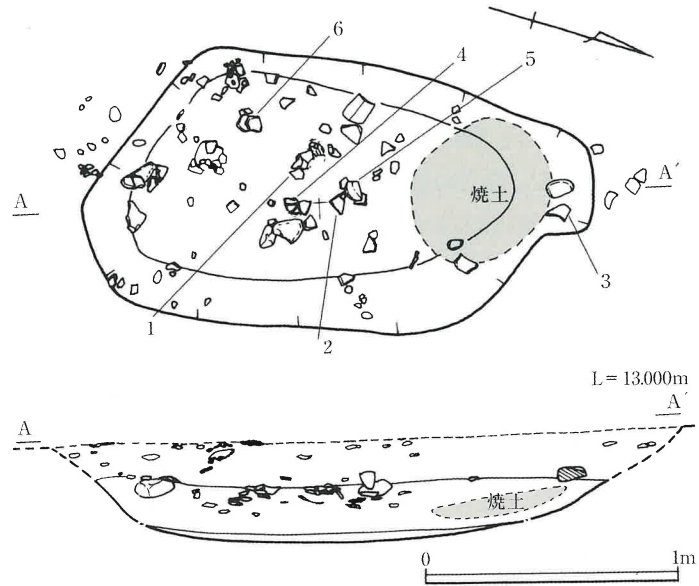
- A 黄褐色粘質土（粘性がやや強く、1~3cmの小礫を疎らに含む。遺構検出層）
- B 黄色粘質土（粘性が強く、1~3cmの小礫を疎らに含む。遺構検出層）
- C 明黄褐色粘質土（やや砂質気味で、1~5cmの小礫をやや密に含む）
- D 黄褐色砂質土（1~5cmの小礫をやや密に含む）
- E 明黄褐色砂礫（風化砂礫層）

第5-6図 定留遺跡外野地区陥穴（1/30）

炉穴遺構（第5-2、5-7図）

調査区の南端部の12-C調査区で不定形な土坑を検出している。炉穴遺構と推察できる。土坑は長軸を南北にとる歪な楕円状の平面プランであり、覆土として黒褐色土層が充填されていた。平面プランは長径約2m、短径約1.1m、確認面から底部面までの深さは約40cmで皿状の断面を呈する。土坑の北壁隅は少し突出した平面形を呈する。北壁隅の底面中央部には直径約50cmの焼土が遺存していた。焼土には炭化物を含み、その堆積は深い部分で約10cmである。

土坑の覆土は黒褐色を呈し、中には土器片や礫片を含んでいた。土器は赤褐色の厚い無文土器で縄文早期の古い時期の所産と推察できそうである。縄文早期の炉穴の可能性が高い遺構である。

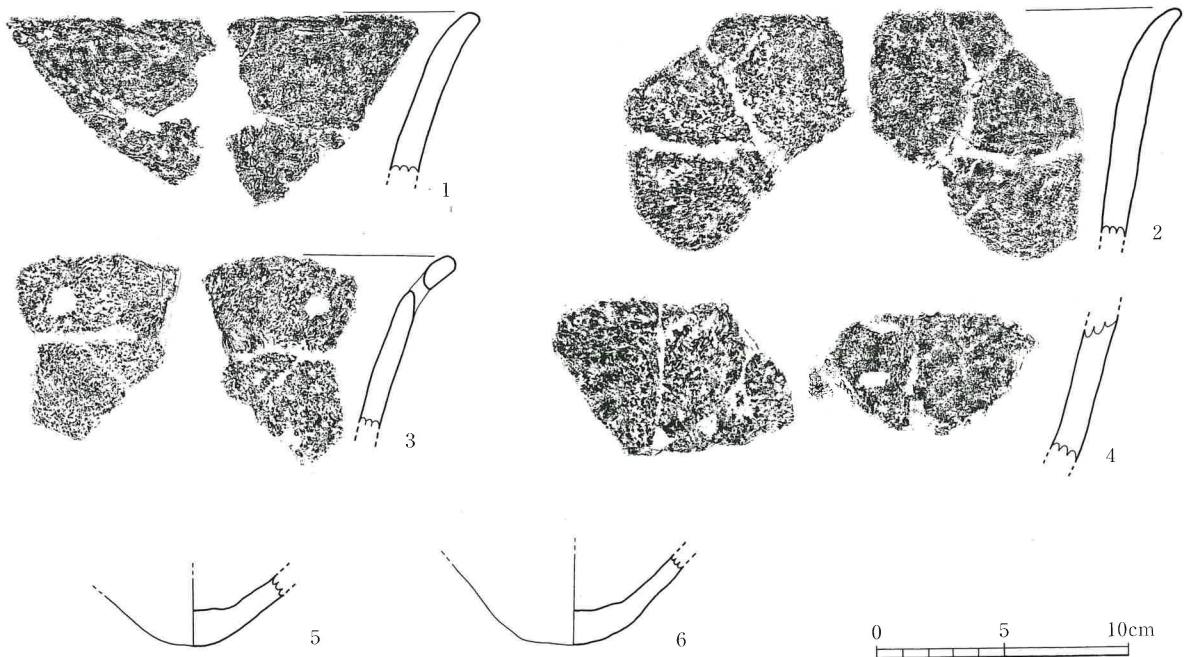


第5-7図 定留遺跡外野地区炉穴 (1/30)
[番号は第5-8図土器番号に同じ]

出土遺物（第5-8図）

1~3は無文土器の口縁部である。口縁部がやや外反して、端部は丸く調整されている。2の外表面は指頭状の撫で調整の痕跡を残している。3の口縁部には表面部からの焼成後の穿孔が確認できる。補修孔であろう。4は胴部の破片である。いずれも黄橙色～赤褐色を呈し、微細な砂粒を含んでいる。器壁は9~12mmの厚さを呈する。5~6は底部の破片である。丸底気味な尖底部であり、尖底の厚さは15mmを呈する。色調は黄橙色～赤褐色を呈し、微細な砂粒を含んでいる。

土器は黄橙色～赤褐色の器壁の厚い無文土器で縄文早期の古い時期の所産と推察できる。

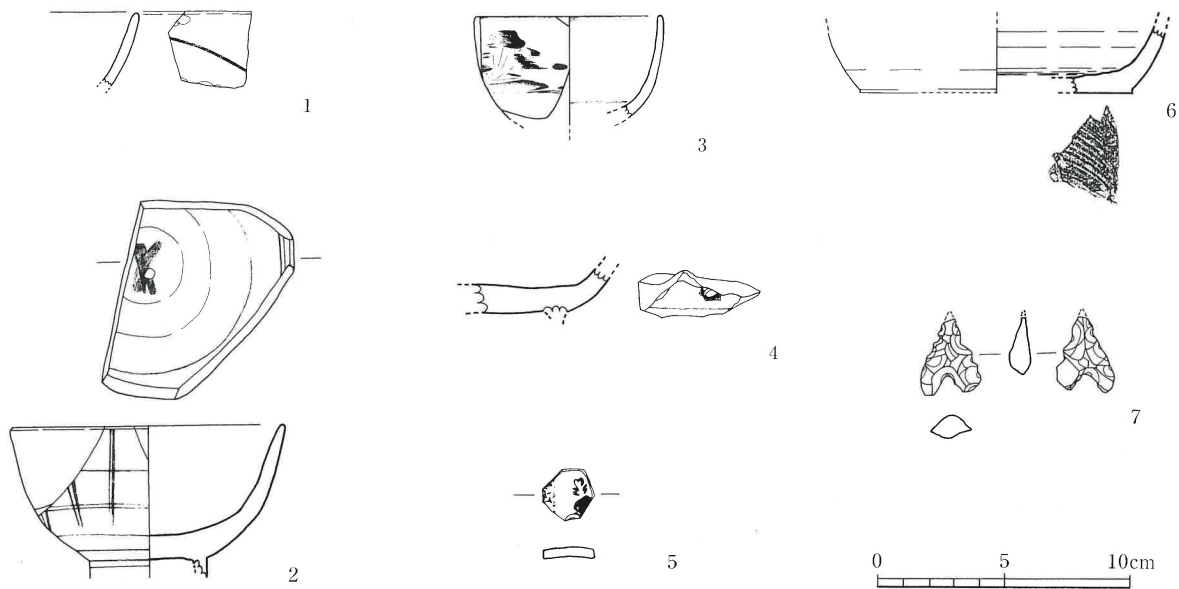


第5-8図 定留遺跡外野地区炉穴出土遺物 (1/3)

出土遺物（第5-9図）

1～5は近世の染付けの肥前磁器である。1は「くらわんか」の口縁部で18世紀後半。2は格子目文の端反り碗である。1820～1860年。3の高台は欠損している。4は肥前の碗である。18世紀後半。5は周辺を縁取りした磁器片加工品である。型紙刷りで1870～1880年代。6は硬い焼きの底部片である。底径10.6cmを呈し回転糸切り離しである。表裏は横撫で調整が施されている。

7はチャート製の石鏃である。長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.55cm、重さ1gである。縄文早期の所産であろう。



第5-9図 定留遺跡外野地区出土遺物（1/3）

第2節 小結

中津港線の中で最も北側に位置するのが広大な定留遺跡である。道路は遺跡の中央部を南北に縦断するが、確認調査の結果、定留遺跡の最も南端部の外野地区で僅少な遺物、遺構を検出したのみで他は確認できなかった。

外野地区では近世と考えられる3条の溝と縄文早期と推察される陥穴1基、炉穴1基が検出された。特に、陥穴の構造は楕円状の平面プランで底面中央部に杭を設置する典型的なものである。中津地方では昭和60年の国道10号線中津バイパスの調査で黒水遺跡から縄文早期～前期の25基の陥穴遺構が県内で最初に発見され注目された。陥穴は等高線に沿って等間隔に複数配置される様相が確認されており、外野地区で検出した1基の陥穴の周辺部には複数の陥穴が遺存している可能性が高い。一方、土坑内に焼土を伴う遺構に関しては、縄文早期の無文土器が出土したことから当該期の炉穴であることが推察できる。炉穴は中津日田道路の鳥遺跡でも複数出土しており、この時期の生活を考察するうえで留意される。

写真図版1



作業風景



1号溝 (東から)



陥穴上部黒色土完掘状態 (東から)



陥穴半載断面 (東から)



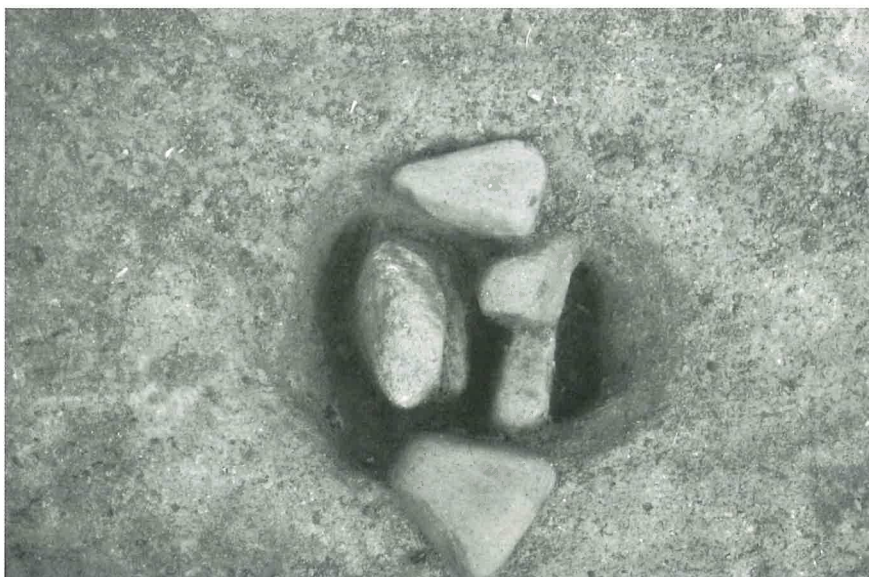
炉穴内遺物出土状態 (西から)



炉穴完掘状態 (西から)



陥穴発掘状態（東から）



陥穴床面ピット



陥穴完掘状態（東から）

写真図版3



定留1号溝出土遺物、第5-4図1、2 (表)



定留1号溝出土遺物 (裏)



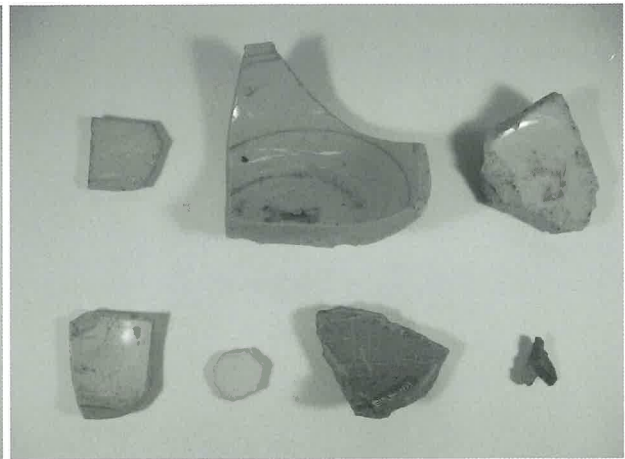
定留炉穴出土遺物、第5-8図1~6 (表)



定留炉穴出土遺物 (裏)



定留出土遺物、第5-9図1~7 (表)



定留出土遺物 (裏)

報告書抄録

ふりがな	もろたみなみいせきA・B・Cちく、さだのみいせき ほかのちく							
書名	諸田南遺跡A・B・C地区、定留遺跡外野地区							
副書名	— 中津日田道路中津港線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —							
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	栗田勝弘、田中裕介							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-0021 大分県大分市大字中判田1977番地 TEL 097-597-5675							
発行年月日	2008年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
諸田南遺跡 A・B・C 地区	中津市 大字諸田	44203	101133	A地区 33°34'30"	131°14'55"	2002～2004	11,100	中津日田道 路中津港線 建設工事
				B地区 33°34'22"	131°14'54"			
				C地区 33°34'21"	131°14'55"			
定留遺跡 外野地区	中津市 大字定留	44203	101034	33°34'36"	131°14'56"	2005.05.09 ～ 2005.06.08	4,000	中津日田道 路中津港線 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
諸田南遺跡 A・B・C地区	古墳時代～古代の 祭祀土坑、中世の溝	古墳時代～古代、 中世、近世		土坑、柱穴、溝状 遺構	須恵器、土師器、 瓦質土器	古墳時代～古代 の祭祀土坑		
定留遺跡 外野地区	縄文早期の陥穴、 炉穴、近世の溝	縄文早期、近世		陥穴、炉穴、溝状 遺構	縄文早期無文土器、 近世陶磁器	陥穴、炉穴		
要約	諸田南遺跡A地区で古墳時代後期の祭祀土坑を検出した。祭祀土坑の中央部には柱穴があり、土坑の埋め戻しの方法やその手法には興味深い様相を呈しており祭祀の特殊性が留意される。定留遺跡では縄文早期の陥穴と炉穴を検出した。							

諸田南遺跡A・B・C地区

さだのみ ほかの
定留遺跡外野地区

— 県道中津港線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第29集

平成20(2008)年3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1997番地
TEL(097)597-5675

印刷 勉強堂美術精版社
〒876-0832 大分県佐伯市船頭町2-52
TEL(0972)22-1324
